

仙台市文化財調査報告書第80集

南小泉遺跡

—第12次発掘調査報告書—

1985年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第80集

南小泉遺跡

—第12次発掘調査報告書—

1985年3月

仙台市教育委員会

序 文

市民の文化に対するニーズは年々に高まりつつあり、その領域についても単に芸術文化という概念に留ることなく、生活全般にまでも広がってきています。とりわけ近年の高度情報化や高学歴化、余暇時間の増大という大きな社会変動の中で、歴史や庶民文化に対する市民の探求心は深まりをみせています。こうした中で、文化財に対する関心も高まりつつあり、文化財の保護行政の充実強化が一層望まれております。それは地域が育んだ文化を語る上では、歴史や文化資源がその根底を成している事柄になっているにほかならないからです。

今回もまた南小泉遺跡の発掘調査が行われ、先人の生活文化を知る貴重な歴史資料が発見され、当時の文化を語る情報の提供がありました。南小泉地区に住んでいた人々の生活状況が生き生きと遺構や遺物を通じて語りかけてくれます。このような調査成果も理解ある市民の方々をはじめ多くの関係機関の協力の賜ものがあってのことと深く感謝を申し述べる次第であります。

本書が少しでも市民の文化財保護に対する思想の発揚に寄することを念じて序といたします。

昭和 60 年 3 月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

例　　言

1. 本書は結婚式場建設に先立って行なった南小泉遺跡（仙台市文化財登録番号C-102）の発掘調査報告書（第12次調査）である。
2. 発掘調査は社会教育課文化財調査係、佐藤甲二・小野寺和幸が担当し、本書の編集は佐藤甲二が行った。
3. 本書の執筆は以下のように分担した。

横山裕平（石器文化談話会会員）…Ⅳ 1(6) 渡辺 誠……Ⅰ
庄子 敦（東北学院大学OB）…Ⅱ 3、Ⅲ 1（住居跡） 小野寺和幸…Ⅲ 1（溝跡）
菊池 豊（東北学院大学OB）…Ⅲ 1（ピット） 佐藤甲二……Ⅱ 1・2・4、Ⅲ 1（土
壙）・2、Ⅳ 1(1)～
(5)、2

4. 石質鑑定は仙台市科学館・佐々木隆氏に御教授をお願いした。

凡　　例

- 本書中の土色については「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を使用した。
- 本書に使用した建設省国土地理院発行の地形図は、図中に示した。
- ローマ数字使用の層位名は基本層位を表し、算用数字の層位名は造構内堆積土を示す。
- 図版中の水系レベルは海拔高を示す。
- 方位は全て磁北を北としている。磁北方向は真北に対して西偏7°0'である。
- 土器で中心線が1点鎖線のものは、図上復元実測図である。
- 全資料は仙台市教育委員会で一括保管してあるので活用されたい。

本文目次

序文

例言

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	1
1. 遺跡の位置	1
2. 地理的環境	1
3. 歴史的環境	1
第Ⅱ章 調査の方法と概要	6
1. 調査に至る経過	6
2. 調査方法	6
3. 基本層位	6
4. 調査概要	7
第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物	9
1. 検出遺構	9
住居跡 9 上塙 14 溝跡 19 ピット 24	
2. その他の出土遺物	36
第Ⅳ章 まとめと考察	60
1. 出土遺物について	60
2. 検出遺構について	75

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第8図 住居跡出土遺物 2 (土師器 2・弥生土器)	12
第2図 南小泉遺跡年度別		第9図 住居跡出土遺物 3 (石器・石製品・鉄製品)	13
発掘調査区位置図	5	第10図 1号土壤平・断面図、 出土遺物 1(土師器)	15
第3図 調査区位置図	7	第11図 1号土壤出土遺物 2 (石器・石製品)	16
第4図 E-3 グリッド東壁セクション	7		
第5図 検出遺構全体平面図	8		
第6図 住居跡平・断面図	10		
第7図 住居跡出土遺物 1(土師器 1)	11		

第12図	2~10号土壤平・断面図	18	第26図	ピット出土遺物	
第13図	12~14号土壤平・断面図	19		(弥生土器・土師器)	34
第14図	2~14号土壤出土遺物1 (弥生土器)	20	第27~	各地区出土遺物1~3	
第15図	2~14号土壤出土遺物2 (土師器・石器)	21	29図	(弥生土器1~3)	37~39
第16図	1~9号溝跡平・断面図	23	第30図	各地区出土遺物4 (弥生土器4・土師器1)	40
第17~	6号溝跡出土遺物1~4 20図 (弥生土器1~4)	25~28	第31図	各地区出土遺物5 (土師器2・須恵器)	41
第21~	6号溝跡出土遺物5~8 24図 (石器1~4)	29~32	第32~	各地区出土遺物6~12 38図 (石器1~7)	42~48
第25図	2~5・7~9号溝跡出土遺物 (弥生土器・土師器・石器・石製品)	33	第39図	各地区出土遺物13 (土製品・石製品・鉄製品)	49

写 真 図 版 目 次

写真図版1	遺跡全景・検出遺構1	77	写真図版9	弥生土器2	85
写真図版2	住居跡遺物出土状況	78	写真図版10	弥生土器3	86
写真図版3	検出遺構2	79	写真図版11	弥生土器4	87
写真図版4	検出遺構3	80	写真図版12	土師器1	88
写真図版5	検出遺構4	81	写真図版13	土師器2	89
写真図版6	検出遺構5	82	写真図版14	陶磁器	90
写真図版7	検出遺構6	83	写真図版15	石器・石製品	91
写真図版8	弥生土器1	84			

表 目 次

第1表	南小泉遺跡(C-102) 発掘調査年度別成果一覧表	4	第5表	基本層位内出土遺物数量表	36
第2表	ピット觀察表	34	第6表	出土遺物観察表	50~59
第3表	ピット土層記録表	34	第7表	弥生土器類別資料出土数量表	66
第4表	遺構内出土遺物数量表	35	第8表	石材、器種対照表	72

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

南小泉遺跡は仙台平野の北部、仙台市遠見塚一丁目、二丁目、南小泉二丁目、古城三丁目、南小泉字伊藤屋敷・字遠見塚西・字村東・字霞ノ目に所在し、東西約1.5km、南北約0.9km、面積約1,250,000m²の仙台市内では最大規模の遺跡である。

今回の調査地点は、この南小泉遺跡の東部、国道4号線仙台バイパスのすぐ東側にあり、仙台市遠見塚東19番地に所在する。この地点は仙台市役所の南東約5.9km、国鉄仙台駅の南東約3.8km、国鉄長町駅の東北東約2.8kmの位置である(第1・2図)。

2. 地理的環境

仙台平野の地形は東と西で大きく二分される。西部は奥羽山脈から連なる七北田・青葉山・高館兵隣と名取川・広瀬川が中流域に形成した河岸段丘から成る。東部には幅約10kmの沖積平野「宮城野海岸平野」^{註1}が、海岸沿いに広がっている。この沖積平野は、深沼層・霞ノ目層・福出町層・岩切層の4層から形成されており、本遺跡はこの霞ノ目層にあたっている。霞ノ目層^{註2}は層厚1~5mほどの現世に続く氾濫原で、内陸部の上部を占めている。

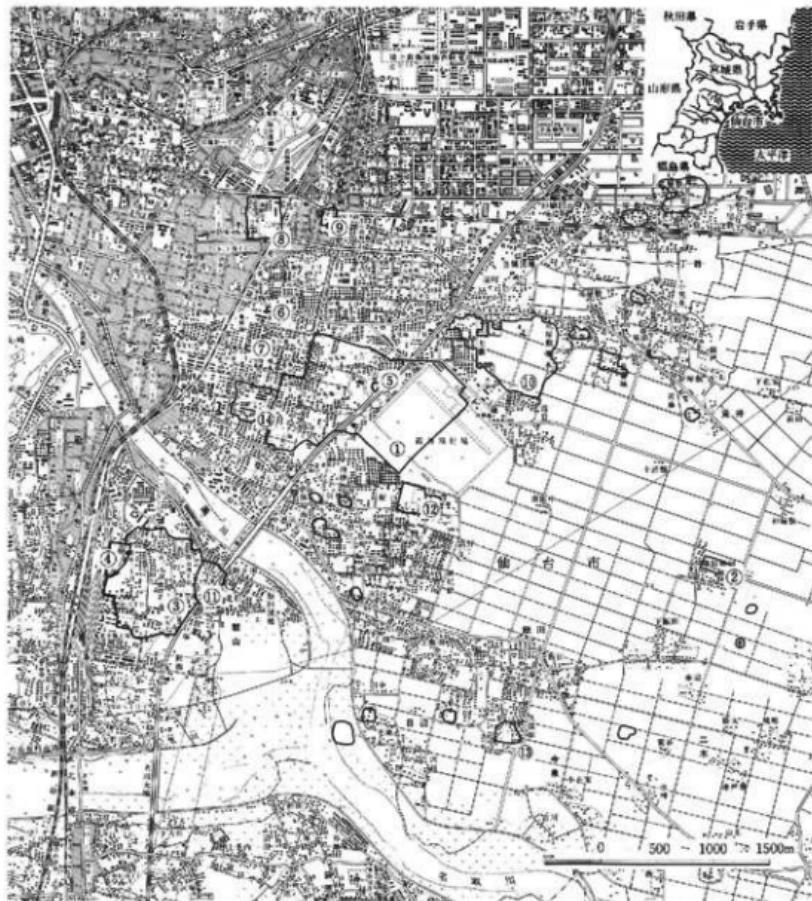
この中を流れる名取川の支流広瀬川は、その左岸に自然堤防・後背湿地などの複雑な微地形を形成している。本遺跡はこの自然堤防上に立地しており、標高は11m前後である。

3. 歴史的環境

仙台市南東部の古城、即ち若林城一帯は藩政時代「若林」と汎称されていた。それ以前の仙台城下町創設時には、この地方は「小泉村」と呼ばれていた。「小泉村」は当時、南目村・荒巻村・根岸村などと入会になっていた大村で、現在の南小泉地区は旧小泉村の一部である。この「小泉」という地名は、その名の通り古くから良質で豊富な清水が湧き出していたという言い伝えから生まれたものであると考えられている。

明治維新後、町村行政の整理統合に伴い宮城郡高城郷(松島地方)の小泉村と、国分郷「小泉村」との混称を避けるため、高城郷を北小泉村、国分郷を南小泉村と改称した。現在、南小泉遺跡内に含まれる地域は、本章第1節で述べた範囲である。

南小泉遺跡の存在が知られるようになったのは昭和11年頃で、畠の天地返しによって多くの弥生土器・土師器の破片が出土地することが松本源吉氏によって注目された時に遡る。その後、昭和14年春から16年春にかけて霞ノ目飛行場の拡張工事の際に、飛行場の西側で土採りが行われ多数の竪穴住居跡・土器等が発見され、古代の大集落跡の存在が確実なものとなったので



No.	遺跡名	登録番	種別	立地	年代
1	南小泉遺跡	C - 102	墳 墓	自然 墓	弥生 - 古代
2	藤田新田遺跡	C - 103	墳 墓	洪 溝	弥生
3	都山遺跡	C - 104	官道・寺院跡	自然 墓	内境(米朝) - 奈良(初期)
4	西向畠遺跡	C - 105	包 合 地	自然 墓	繩文・弥生・古墳
5	塗足塚古墳	C - 001	古 墓	沖 領 平 野	古 墓
6	法輪塚古墳	C - 003	古 墓	沖 領 平 野	古 墓
7	猪塚古墳	C - 004	古 墓	自然 墓	古 墓
8	陣 美 国 分寺跡	C - 419	寺 院 路	自然 墓	奈 麻 - 平 安
9	連湖國分尼寺跡	C - 420	寺 院 路	冲 領 平 野	奈 麻 - 平 安
10	仙台東郊美里跡	C - 421	美 里 路	自然 墓	奈 麻 - 平 安
11	北日塚跡	C - 505	城 壕 路	自然 墓	奈 麻 - 江 戸 世 紀
12	神 野 塚 路	C - 506	城 壕 路	自然 墓	中 世
13	今 里 城 路	C - 507	城 壕 路	自然 墓	繩文(後期) - 近世
14	若 林 城 路	C - 511	城 壕 路	自然 墓	(中) - 近世

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

ある。

周辺の遺跡を各時代毎に概観すると（第1図）、弥生時代としては本遺跡と西南西約2.5kmに西台畠遺跡、東南東約3kmに藤田新田遺跡がある。古墳時代では、中期に本遺跡の中心部に、東北地方では第3位の規模を誇る主軸長110mの前方後円墳・遠見塚が築かれている。また、本遺跡の西約1kmに法領塚古墳、猫塚古墳がある。7世紀の後半から8世紀初頭にかけて、本遺跡の南西約2kmには、多賀城創建以前の官衙遺跡と考えられる郡山遺跡がある。奈良時代になると、本遺跡の北北東約2kmの地に陸奥国分寺・同尼寺跡が造営されている。さらに、中世から近世にかけては本遺跡西の若林城をはじめ、南西約2kmに北日城、南東約1kmに沖野城が築かれている。このように、古来から本遺跡一帯が仙台平野の中でも中心的地域であったことがうかがえる。

南小泉遺跡内における発掘調査は、年々増加の一途をたどっている。このため、今年度の調査区を含めた過去の発掘調査地点や調査成果に混乱をまねく恐れが生じてきている。そこで、当文化財調査係では、今年度漸定的に過去の発掘調査区を年度別にまとめ整理することにした（第1～13次調査、第2図）。尚、各年度毎の調査成果の概略は第1表に記載したので、これを参照されたい。

註 記

1. 地学団体研究会「新編 仙台の地学」～仙台支部編～ 1980
2. 仙台市教育委員会「南小泉遺跡範囲認証調査」、「仙台市文化財調査報告書第13集」 1978

発掘調査参加者

庄子敦 菊池豊 井口祐二 小林康子 浅見礼子 大山のり子 柏倉セツ子 苗ノ又三千代
佐藤紀美 佐藤みよ 村上篤 大宮裕二 宮崎進

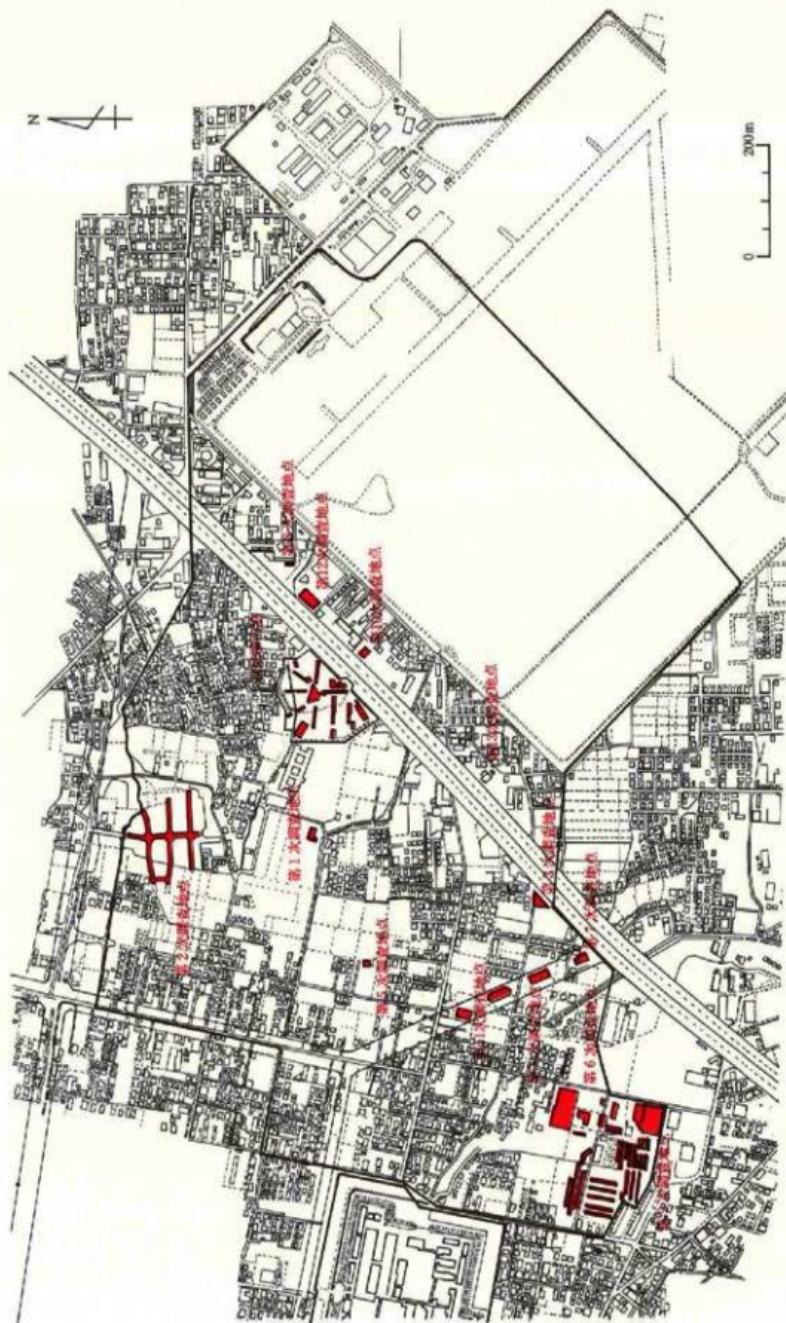
遺物整理参加者

庄子敦 菊池豊 村上篤 大宮裕二 宮崎進 阿部多津子

南小泉遺跡調査年度	発掘年代	検出遺跡	調査時出土上遺物	文部
第1次(昭和52年)	平安時代 不 明	溝状遺構。 小溝状遺構。	兔牛七器(獣形圓式)。土師器(南小泉式、表移ノ入式)。須恵器、西陶器。瓦。石器(鉄片)。石製品、石製模造品。鉄製品。	1
第2次(昭和53年)	—	—	兔生土器。土師器(南小泉式)。須恵器。	2
第3次(昭和55年)	平安時代	住居跡(1軒)。	十脚器(表移ノ入式)。須恵器。	3
第4次(昭和56年)	古墳時代中期 平安時代 中 世 不 明	住居跡(5軒)。土塹。上塙状遺構。 燒上遺構。溝跡。	兔牛土器(大泉式・十二塚式)。土師器(南小泉式、表移ノ入式)。須恵器。陶磁器(中・近世)。瓦(古代)。土製品(土五・羽口等)。石器(石礫、スクレイバー等)。石製品(瓦玉、小玉、結縛車、砾石、鐵等)。石製模造品。鐵製品(鎌、刀子、劍、釘等)。銅製品(中國鏡)。	4
第5次(昭和56年)	不 明	努力穴遺構。上塙、溝跡。	土師器(南小泉式、栗廻式、表移ノ入式)	5
第6次(昭和56 ～57年)	平安時代以前 平安時代 近世以降 不 明	溝跡。 住居跡(2軒)。柱立性建物跡(4棟)。 土塹。	兔牛土器(大泉式)。土師器(南小泉式・栗廻式、栗廻式、國分寺下層式)。表移ノ入式・磨擦土器合一)。赤燒土器。須恵器。土師質土器。陶磁器(中世・近世)。瓦(古代)。土製品(土五等)。石製品(石臼、石帶、砾石等)。風字甌。鉄製品(鎌、刀子、鐵、鐵鋸等)。銅製品(古錢等)。動物骨遗体。	6
第7次(昭和57年)	平安時代以前 平安時代 平安時代以降 近世 不 明	上塙。小溝状遺構。 住居跡(2軒)。土塹。性格不明遺構。 溝跡。	兔牛上器(獣形圓式)。土師器(南小泉・引弘式・表移ノ入式)。須恵器。陶器(近世)。瓦(古代・近世)。土製品(羽口)。石器(石礫等)。石製品(結縛車、石臼等)。鐵製品(鎌光、針?)、鉄滓等)。	7
第8次(昭和57年)	—	土塹。	兔牛土器。土師器(南小泉式)	8
第9次(昭和57年)	平安時代 中 世 飛山・江戸切頭 不 明	住居跡(2軒)。土塹。 猪口柱立性建物跡(2棟)。井戸跡。 土塹。井戸跡。溝跡。	上神器(表移ノ入式)。須恵器。土淨實土器。陶器(中世・近世初期)。瓦(古代)。石製品(砾石、石块)。金屬製品(中國鏡)。漆器。	9
第10次(昭和57年)	古墳時代中期 不 明	住居跡(5軒)。 猪口柱立性建物跡?。上塙、溝跡。ビット。	兔牛土器(獣形圓式・十二塚式)。土師器(南小泉式)。須恵器。石製品(結縛車、砾石等)。石製模造品。	10
第11次(昭和58年)	古墳時代中期 古墳時代末期 平安時代 中 世 飛山・江戸切頭 不 明	住居跡(4軒)。柱立性建物跡(1軒)。土塹。 柱立性建物跡(3棟)。土塹。溝跡。 墓壙。	住牛上器(大泉式)。土師器(住社式・住社式洋型・國分寺下層式)。表移ノ入式・栗廻土器合一)。須恵器。土師質土器。陶磁器(中世・近世)。瓦。上神器(上施)。右器(右腰、左石腰、石錐、スクレイバー、石株等)。石製品(勾玉、石臼等、砾石等)。石製模造品。瓶器。鐵製品(刀子、劍、鐵滓等)。銅製品(新・鎧塔、中國鏡)。骨(加工骨)。炭化米。植物骨遗体。	11
第12次(昭和59年)	平安時代中期 平安時代後期 古墳時代中期 不 明	溝跡。 上塙。	兔牛土器(獣形圓式・糞便式)。須恵器。陶磁器(中世・近世・瓦(近世))。上製品(引刀)。石器(石礫、ドリル、スクレイバー・右腰、鉄片等)。石製品(石臼?)。石製模造品等)。鐵製品(鎌、刀子等)。	12
第13次(昭和59年)	古墳時代中期 不 明	住居跡(1軒)。兼て替えあり)。 溝跡。	土師器(南小泉式)。須恵器。陶磁器。石器(鉄片)。石製模造品。鐵製品(鎌)。植物骨遗体。	13
遠見塚古墳 (C-001) 昭和43年1月8日 国指定史跡	—	埴丘規模: 主軸約110m(後円部約63m、前方部約47m)。前方部幅約97m。接点部幅約91.5m。後円部高約0.7m。前方部高約0.5m。	14	
主 体 部: 粘土層(2層)。小棺?。出土遺物: 梗跡20、ガクス製小瓦4、華札(碧玉)1		15		
周辺及び埴丘出土遺物: 弥生土器(南支那式土器・獣形圓式・十三塚式、天王山式)。土師器(埴茎式、南小泉式、引弘式)。須恵器。陶磁器(中世・近世・瓦(近世))。上製品(引刀)。石器(石礫、ドリル、スクレイバー・右腰、鉄片等)。右器(右腰)。		16		
石製品(石臼?)。石製模造品等)。鐵製品(鎌、刀子等)。		17		
石製品(石臼?)。石製模造品等)。鐵製品(鎌、刀子等)。		18		
石製品(石臼?)。石製模造品等)。鐵製品(鎌、刀子等)。		19		

- 文献1. 佐野香 喬(1995) 南小泉遺跡第一回発掘調査報告書(昭和52年3月)
2. 南小泉遺跡第二回発掘調査報告書(昭和54年3月)
3. 佐野香 喬(1996) 南小泉(昭和55年3月)
4. 佐野香 喬(1997) 南小泉遺跡第一回発掘調査報告書(昭和56年3月)
5. 佐野香 喬(1998) 年度3(昭和57年3月)
6. 佐野香 喬(1999) 南小泉遺跡第一回発掘調査報告書(昭和58年3月)
7. 佐野香 喬(2000) 南小泉遺跡第一回発掘調査報告書(昭和59年3月)
8. 佐野香 喬(2001) 年度4(昭和60年3月)
9. 佐野香 喬(2002) 南小泉遺跡第二回発掘調査報告書(昭和61年3月)
10. 佐野香 喬(2003) 南小泉遺跡・貴重な遺物に付する発掘調査報告書(昭和62年3月)
11. 佐野香 喬(2004) 南小泉遺跡第一回発掘調査報告書(昭和63年3月)
12. 佐野香 喬(2005) 南小泉遺跡第一回発掘調査報告書(昭和64年3月)
13. 佐野香 喬(2006) 南小泉遺跡第一回発掘調査報告書(昭和65年3月)
14. 佐野香 喬(2007) 南小泉遺跡第一回発掘調査報告書(昭和66年3月)
15. 佐野香 喬(2008) 南小泉遺跡第一回発掘調査報告書(昭和67年3月)
16. 佐野香 喬(2009) 南小泉遺跡第一回発掘調査報告書(昭和68年3月)
17. 佐野香 喬(2010) 南小泉遺跡第一回発掘調査報告書(昭和69年3月)
18. 佐野香 喬(2011) 南小泉遺跡第一回発掘調査報告書(昭和70年3月)
19. 佐野香 喬(2012) 南小泉遺跡第一回発掘調査報告書(昭和71年3月)

第1表 南小泉遺跡(C-102) 発掘調査年度別成果一覧表



第2図 南小泉遺跡年度別発掘調査区位置図

第Ⅱ章 調査の方法と概要

1. 調査に至る経過

南小泉遺跡のほぼ中央部を縦断する仙台バイパスの沿道は、近年、各種の工場、配送所、ガソリンスタンド、商店等が立ち並んできた地域の一つである。このたび、遺跡内、仙台市遠見塚東19番地に所在する店舗跡地（1,250m²）に、新たに結婚式場が建設されることとなった。仙台市教育委員会では、申請者、村田住宅建材株式会社と協議の結果、遺跡が損われていない部分に係る建物建築部分130m²を調査対象とし、工事に先がけ、昭和59年9月3日より調査を実施した。

2. 調査方法

本調査に先行し、小規模な試掘トレンチを7ヶ所入れた。その結果、段差部分（第3図の破線部分）から東側は、旧表土下1m以上も削平が及んでおり、すでに遺跡が損われていることが判った。従って調査対象は、この段差の西側部分に絞り実施した。段差部分より西へ約50cmずらしたN-49°-Wを調査区東壁とした。調査区は東西7.5m、南北15mで、建物部分より一回り大きく設定した。調査は、北西杭を基準とする南北A-E、東西1-3の3×3mグリッドにより行った。ただし、遺構が調査区外に延びた場合は、随時拡張を行った。結果的には、A-3、C-D-3グリッドの東側、B-C-1グリッドの西側の一部を拡張した。

3. 基本層位

基本層位は大きく3層に大別される。また、Ⅱ層はa、bの2層に細分される。（第4図）。

Ⅰ層：旧表土層（水田）である。黒褐色（2.5Y3/1）シルト層で、調査区全域にわたって15~20cmの厚さで堆積している。底面は平坦で安定し、鉄分の集積層が認められる。出土遺物は弥生土器、非ロクロ土器、陶磁器等の弥生時代から現代に至る遺物が出土しているが、全て小破片となっている。

Ⅱa層：暗褐色（10YR3/3）シルト層及び黒褐色（10YR2/2）シルト層で構成される。分布状況は調査区東側で顕著に認められ、東側で厚く（約10cm）、西側では薄く（4cm）堆積している。出土遺物は弥生土器、非ロクロ土器、須恵器があり、相当数出土している。

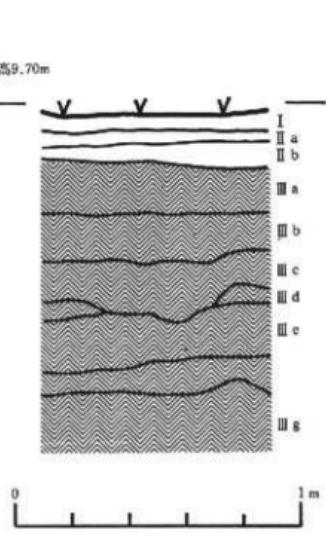
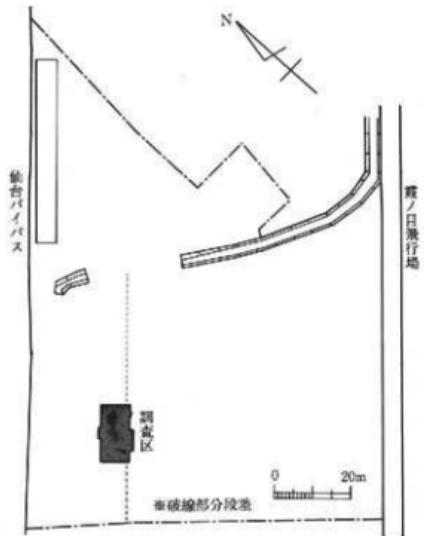
Ⅱb層：黒褐色（10YR2/2）粘土質シルト層で、地山ブロックを含む。調査区全域に分布するが、西側では徐々に薄くなり、断続的となっている。堆積土の厚さは5cm前後である。出土遺物は弥生土器、非ロクロ土器がある。

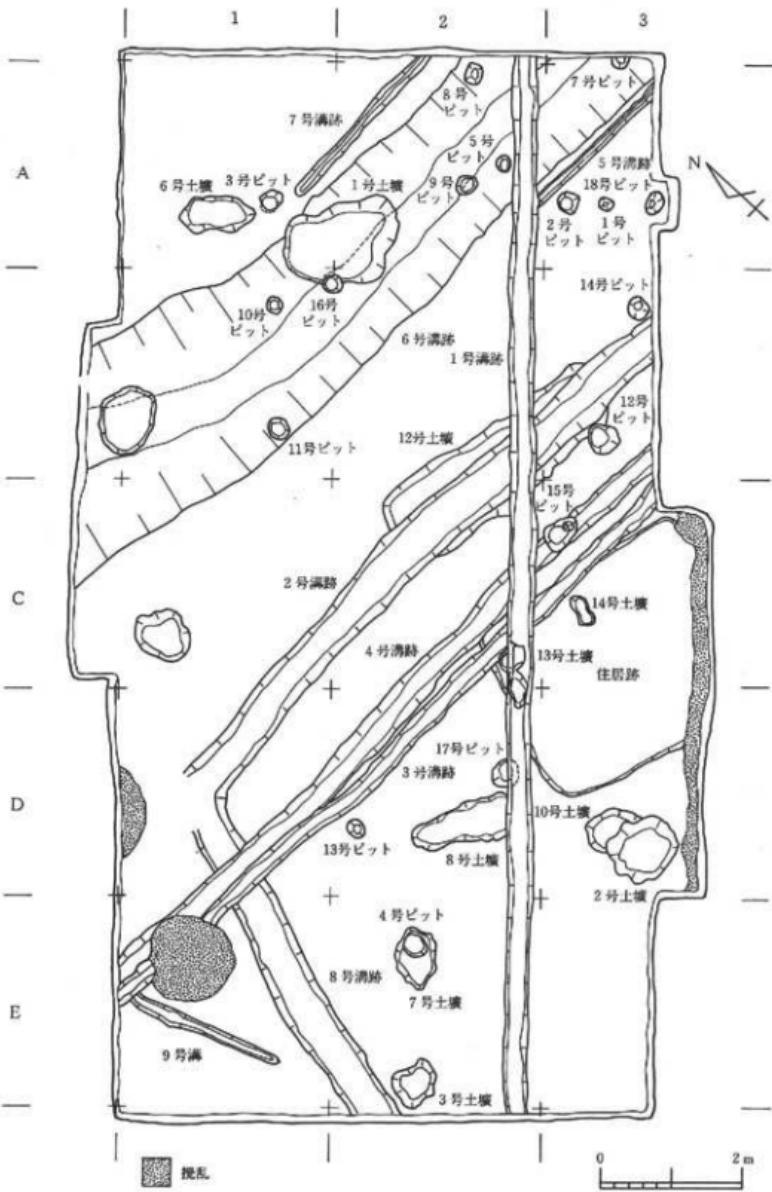
Ⅲ層：地山と捉えられる。にぶい黄褐色（10YR6/4）砂質シルト層で、一部グライ化している。

尚、Ⅲ層以下の層位はE-3区で、1.3mまで掘り下げて確認した。その結果、Ⅲ層は7層に細分されたが、大きな土質の変化は認められなかった。また、Ⅲ層は2~4cm/mで、南東に下り傾斜を示している。Ⅲ層中からの出土遺物はない。

4. 調査概要

昭和59年9月5日に調査を開始し、10月10日の終了まで、実動21日の調査日数を要した。調査面積は拡張部も含め118m²である。検出遺構はⅡa層上面で溝跡1条（1号）が、Ⅲ層上面では住居跡1軒、土壌10基（1~8・10・12号）、溝跡8条（2~9号）、ピット17個（1~5・7~18号）が検出された。また、住居跡貼床の下より土壌2基（13・14号）が検出されている（9・11号土壌、6号ピットは欠番）。Ⅲ層上面での遺構重複関係では、住居跡は3・4号溝跡に切られる。土壌では1・5号土壌が6号溝跡を切り、2号土壌は10号土壌を切り、12号土壌は2号溝跡に切られる。溝跡どうしでは8号溝跡が3・4号溝跡に切られ、3号溝跡は4・9号溝跡を切る。ピットでは4・12・16号ピットが7・12・1号土壌を切り、5・7~11号ピットが6号溝跡を切り、12号ピットが12号土壌を切っている。出土遺物はこれら遺構内及び基本層位Ⅲ層を中心として、弥生土器、非ロクロ使用の土師器、須恵器、陶磁器、瓦、石器、石製品、土製品、鉄製品が平箱10箱程出土している。これらの大部分は破片資料である。出土資料中最も多かったのが土師器、次いで弥生土器である。





第5図 検出遺構全体平面図

第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物

1. 検出遺構

住居跡(第6~9図 写真図版1・2)

〈検出地区〉 住居跡は調査区の中央東端のC・D-2・3グリッドで検出された。住居跡が一部調査区外に延びるため、C・D-3グリッドを東側に50cm程拡張し、平面プランを確認した。その結果、住居跡南東コーナー及び東壁の大部分が水道管理設工事の際に削平を受け、残存していないことが判った。

〈検出面〉 II b層堆土後のⅢ層上面で検出された。

〈重複〉 住居跡は1号溝跡、13・14号土壤、同一面では3・4号溝跡と重複関係が認められる。1号溝跡に住居跡北西コーナーの壁・堆積土・床面を、3・4号溝跡に住居跡北西コーナー及び北壁・堆積土を切られている。また、住居跡貼床下で認められた13、14号土壤は住居構築の際に切っている。

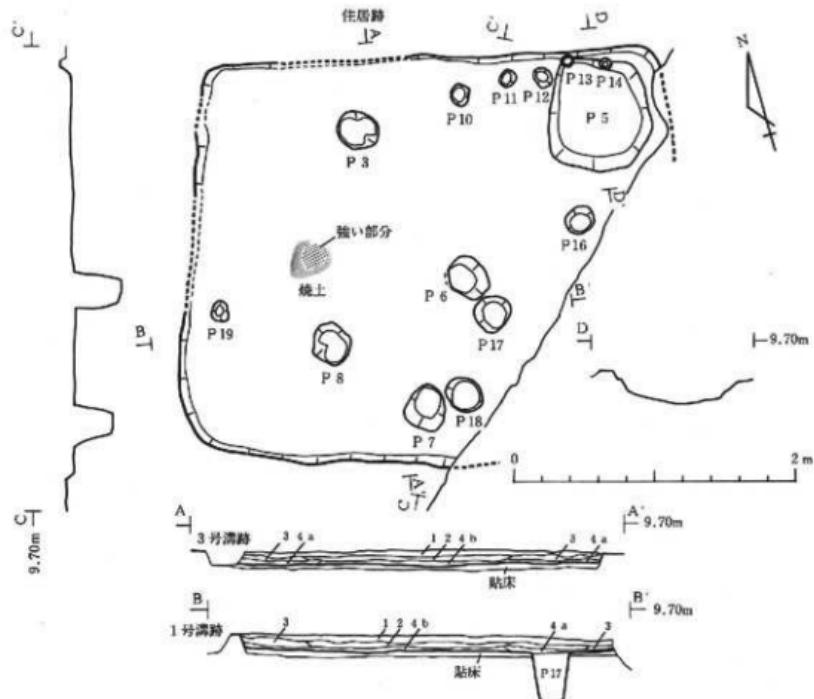
〈平面形、残存状況〉 後世の搅乱を受け、残存状況は良好ではないので、平面形について確かなことは言えないが、方形を基調としたいわゆる隅丸方形状を呈するものと見られる。計測値は残存部で320(東-西)×275(南-北)cmを計る。

〈壁〉 壁は床面付近では垂直ぎみに立ち上がるが、壁上端部では一部崩落し、外傾する所も見られる。また、壁は地山であるⅢa層か、壁下端部では一部Ⅲb層がそのまま壁となっている。床面からの壁残存高は9cm平均である。

〈床面〉 床面は縮っており、緩やかに東側に傾斜している。住居跡床面レベルで一番高い西壁直下と低い北東壁直下の比高は約3cmである。床面は平坦でなく、緩やかな凹凸が認められた。また、住居床面西寄りのやや高まった所に焼土及び焼土粒の広がりが観察された。範囲は30×28cmである。しかし、焼土の厚さがわずかにしか認められず、焼け方も明瞭なものとは言えない状態であったため、この焼土の広がりがどのような性格を有していたものなのか明確にできなかった。尚、床面全面にわたり、貼床が認められた。

〈床面施設〉 住居跡床面施設はピットが14個が検出された。ピットには床面よりの深さが30~40cmに及ぶものや10cm前後の浅いもの等がある。これらのうち、方形状を呈するP₅以外は全て円形状を示している。主柱穴については柱痕跡の認められるピットはなく、不明である。ただし、P₁₀~P₁₄は住居北壁直下に並び、深さが類似するという規則性が認められ、補助穴になる可能性が考えられる。

住居跡北東コーナーで認められたP₅は方形状(長軸78×短軸70cm、深さ28cm)を呈しており、底面は断面形が「U」字状である。堆積土中や上層部(床面近く)から、土師器(壺、甕等)、



住居跡土層註記表

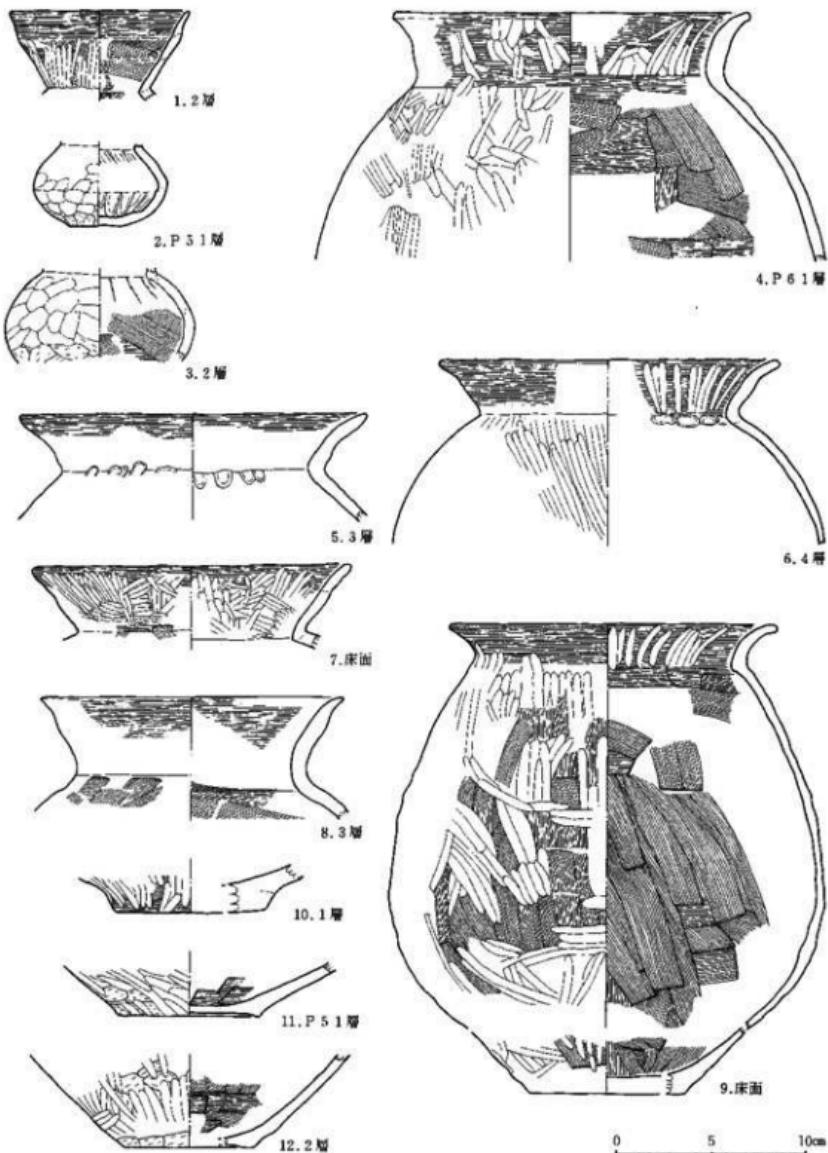
層位	土色	土性	粘性	しまり	堆入物
1	10YR 5/6 黒褐色	シルト	ややあり	あり	風化頸灰岩程。炭化物程。焼土。
2	10YR 5/6 黒褐色	粉質シルト	なし	あり	炭化物。焼土粒少量。
3	10YR 5/6 黒褐色	粘土質シルト	あり	あり	風化頸灰岩程。炭化物粒多量。焼土粒若干。
4 a	10YR 5/6 に赤い黄褐色	砂質シルト	ややあり	あり	炭化物程。焼土粒・地山ブロック多量。
4 b	10YR 5/7 1 黑褐色	炭化物の層	なし	なし	
粘E	10YR 5/6 に赤い黄褐色	粘土質シルト	あり	あり	炭化物。

住居跡内ピット観察表

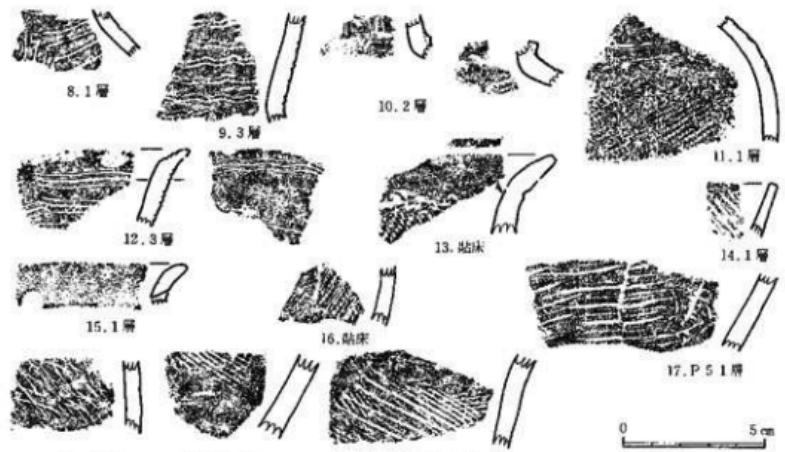
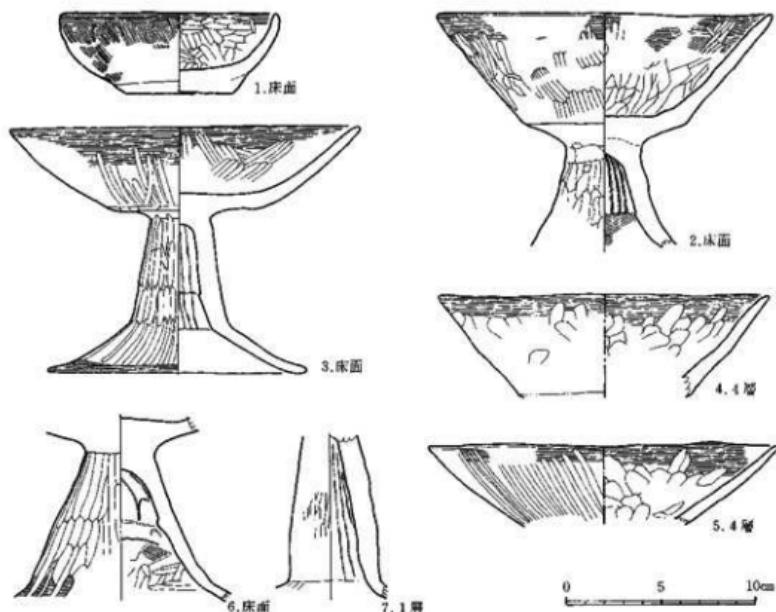
※1・2・4・9・15号は欠番

ピット名	層位	土色	土性	粘性	しまり	調人物	上端範囲	深さ	備考
P 3	1号	10YR 5/6 黒褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	—	28×24cm	6cm	—
P 5	1号	10YR 5/6 黒褐色	粘土質シルト	あり	あり	炭化物粒若干。地山ブロック	78×79cm	28cm	—
	2号	10YR 5/6 に赤い黄褐色	粘土質シルト	あり	あり	炭化物粒若干	28×25cm	6.5cm	—
	3号	10YR 5/6 黒褐色	粘土質シルト	あり	あり	炭化物粒若干。地山ブロック	30×25cm	32cm	—
P 6	1号	10YR 5/6 黒褐色	粘土質シルト	あり	あり	地山ブロック	30×28cm	27cm	ややグライ化
P 7	1号	10YR 5/6 灰灰褐色	粘土質シルト	あり	ややあり	炭化物粒。地山ブロック	30×28cm	27cm	—
P 8	1号	2.5YR 5/6 黄褐色	粘土質シルト	あり	あり	—	28×25cm	8cm	—
P 10	1号	10YR 5/6 黄褐色	粘土質シルト	ややあり	あり	地山ブロック	15×13cm	15cm	—
P 11	1号	10YR 5/6 黒褐色	粘土質シルト	あり	あり	地山ブロック	12×11cm	16cm	—
P 12	1号	10YR 5/6 黑褐色	粘土質シルト	あり	あり	地山ブロック	8×7 cm	10cm	—
P 13	1号	10YR 5/6 黑褐色	粘土質シルト	あり	あり	地山ブロック	7×7 cm	8cm	—
P 14	1号	10YR 5/6 黄褐色	粘土質シルト	あり	あり	地山ブロック	20×19cm	14cm	—
P 15	1号	10YR 5/6 黑褐色	粘土	ややあり	あり	地山ブロック多量	26×25cm	29.5cm	—
P 17	1号	10YR 5/6 黑褐色	粘土質シルト	あり	あり	炭化物粒。地山ブロック	27×22cm	16cm	—
P 18	1号	10YR 5/6 黑褐色	粘土質シルト	あり	あり	炭化物。地山粒ブロック	14×11cm	16.5cm	—
P 19	1号	10YR 5/6 黑褐色	粘土質シルト	あり	あり	炭化物。	—	—	—

第6図 住居跡平面・断面図



第7図 住居跡出土遺物1（土師器1）



第8図 住居跡出土遺物2（土師器2・弥生土器）

弥生土器片が出土している。尚、P₅は貯蔵穴の可能性が考えられる。

（堆積土）住居内堆積土は大きく4層に大別される。1層は黒褐色シルト層で、住居全体に広く分布し、中央部に厚く、壁際で薄く堆積している。2層は褐色砂質シルト層で、住居中央部を中心としレンズ状堆積を示している。3層は黒褐色粘土質シルト層で、住居壁際において環状に認められる。4層は炭化物を含む割合で、4a、4b層に細分される。4a層はにぶい黄褐色砂質シルト層であり、住居床面東側に分布する。また、4b層は黒色炭化物層で、住居西壁から中央部にかけて床面を覆う形で堆積している。

これらの住居堆積土は1層から3層まではレンズ状堆積を示し、住居跡セクションにおいても住居壁上端からの流れ込みのようすが顕著に表われているが、4層はレンズ状堆積を示しながら、流れ込みのようすが把握できない。従って、1層～3層は確実に自然流入土と見て間違いないものと見られる。また、4層については住居廃絶後直ぐに流入したため、セクションに表われなかったのか、あるいは住居廃絶時に堆積していたものか解らない。

（出土遺物）堆積土、床面、床面施設、貼床より830点の遺物を出土した。堆積土1層よりの出土量が最も多く、全体の約36%を占める。出土遺物の内訳は弥生土器片177点、非ロクロ土師器592点、石器57点（ドリル1点、剝片54点、礫石器2点）、石製品2点（内1点石製模造品）鉄製品2点（内1点刀子）である。非ロクロ土師器は、ほとんどが破片資料であるが、大型のものが多く、内には第7図9のように口縁から底部まで固化できるものがある。また第8図1・3のように一部欠失するがほぼ完形のものもある。遺物は堆積土上層のものと、床面あるいは床面施設出土のものが接合関係を示す場合がある他、第7図4・9のように床面、床面施設出土のものとD・E-1グリッドIIa層出土のものが接合関係を示す場合がある。



第9図 住居跡出土遺物3（石器・石製品・鉄製品）

1号土壙(第10・11図、写真図版3-1)

〈概要〉 A・B-1グリッドにまたがり位置する。Ⅲ層上面で検出された。6号溝跡を切り、西壁の一部を16号ピットに切られている。上端平面形は、約180×90cmの不整円形を呈する。深さは約15cmと浅く、壁面もゆるやかに立ち上る。底面は平坦でなく凹凸が激しい。堆積土は単層で、炭化物粒、焼土粒を比較的多く含む。

〈出土遺物〉 検出面から底面までまんべんなく419点の遺物が出土した。内訳は弥生土器片73点、非クロ土師器337点、石器8点(石核1点、礫石器1点、剣片6点)、石製品1点である。土師器の大部分は破片資料であったが、大型破片が多く、内には底面出土の壺(第10図2)のように口縁から底部まで同化出来る資料も出土した。

2号土壙(第12・14・15図、写真図版3-2)

〈概要〉 D-3グリッドに位置する。検出層位はⅢ層上面で、10号土壙を切っている。上端・下端平面形とも不整円形で、上端規模は直径約90cmである。深さ約20cmで、断面はややひらいた「U」字状を呈する。底面はやや凹状となる。堆積土は2層から成り、各層とも炭化物粒、焼土粒を含み、1号土壙堆積土と類似性が強い。

〈出土遺物〉 堆積土より63点の遺物が出土した。内訳は弥生土器片14片、非クロ土師器片48点、剣片1点である。

3号土壙(第12・14図、写真図版3-3)

〈概要〉 E-2グリッドに位置する。検出層位はⅢ層上面である。上端・下端平面形とも不整円形で、上端規模が直径約60cm程の小型の土壙である。深さ約10cmと浅く、断面はややひらいた「U」字状を呈す。底面はほぼ平坦である。堆積土は単層で、炭化物粒、焼土粒を含む。

〈出土遺物〉 弥生土器片4点、非クロ土師器片が7点出土したのみである。

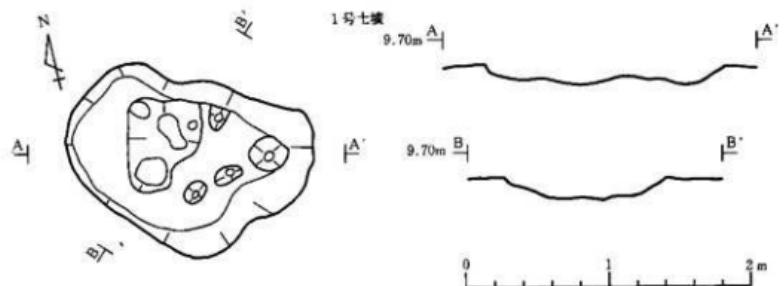
4号土壙(第12・14・15図、写真4-1)

〈概要〉 C-1グリッドに位置する。検出層位はⅢ層上面である。上端・下端ともほぼ南北に長軸を持つ不整円形である。上端規模は約80×70cm、深さは12cm前後である。壁角は45°前後で、底面は凹凸状を呈する。堆積土は単層で、1~3号土壙の堆積土に類似する。

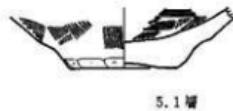
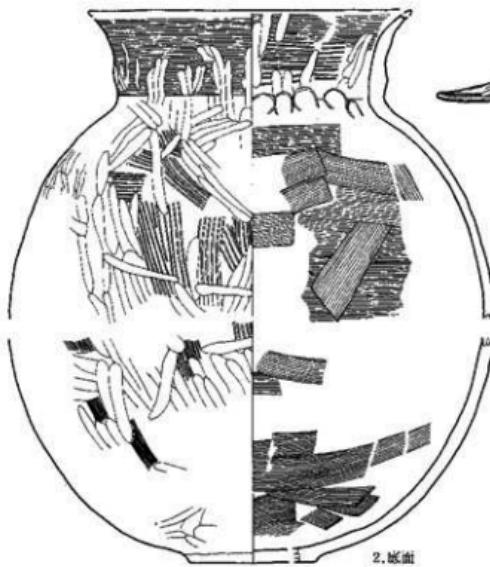
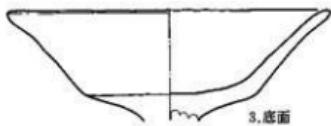
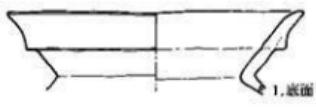
〈出土遺物〉 堆積土中より弥生土器片6点、非クロ土師器片12点が出土した。

5号土壙(第12・15図、写真4-3)

〈概要〉 B-1グリッドに位置する。検出層位はⅢ層上面である。上端平面形が約100×75cmの

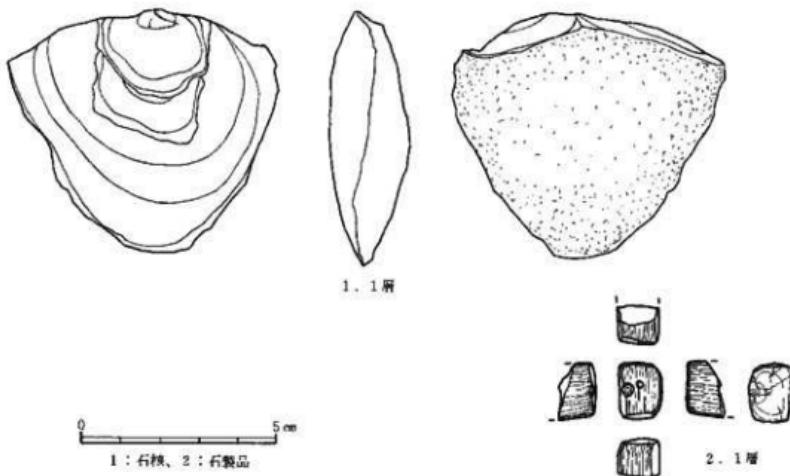


1号土器	土色	土性	粘性	しまり	温入物
地植上 7.5YR5/6	黒色	シルト	あり	ややあり	5kg大の炭化物質、鉢上部



0 5 10cm

第10図 1号土壙平・断面図、出土遺物1（土師器）



第11図 1号土壙出土遺物2（石器・石製品）

楕円形を呈する土壙である。深さは約7cmと浅く、断面はひらいた「U」字状である。底面は凹凸があり、特に東側は著しい。堆積土は2層から成り、堆積土1層には炭化物粒、焼土粒を顕著に含む。全体的に1号土壙堆積土と類似性が強い。

〈出土遺物〉堆積土・底面から39点の遺物が出土した。内訳は弥生土器片12点、非ロクロ土器器片26点、剝片1点である。土器の多くは小破片であったが、土器には底面出土の甕（第15図3）、堆積土1層出土の甕（第15図4）のような図化可能な資料も出土した。

6号土壙（第12図、写真図版4-1）

〈概要〉A-1グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出された。上端・下端平面形とも不整楕円形を呈す。上端平面形の規模は約100×50cmを測る。深さは底面の凹凸が激しく安定していないが、平均10cm内外である。壁面は長軸側では非常にゆるやかな立ち上りを示す。短軸側では断面はひらいた「U」字状を呈す。堆積土は単層で、1号土壙の堆積土に類似する。

〈出土遺物〉非ロクロ土器器の体部破片が堆積土中よりわずか5点出土したのみである。

7号土壙（第12図、写真図版5-1）

〈概要〉E-2グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出された。北側を4号ピットに切られている。上端・下端平面形とも不整楕円形で、上端平面規模約80×60cmの土壙である。深さ約15cm、

断面「U」字状で、底面はやや凹状を呈す。堆積土は単層で、炭化物粒、焼土粒を含む。1号土壙堆積土との類似性が強い。

〈出土遺物〉弥生土器片、非ロクロ土師器片が各1点堆積土中より出土したのみである。

8号土壙(第12・14図)

〈概要〉D-2グリッドに位置する。IIb層上面で不明確で、III層上面で明確に検出された。1号溝に東側を切られており、明確な規模は不明である。上端・下端平面形とも不整長楕円になるとと思われる。上端平面形規模は残存長軸で約140cm、短軸約60cmである。底面は検出土壙中最も凹凸が激しい。深さは平均10cm前後と浅い。堆積土は単層から成り、炭化物粒を多量に含む。1号土壙堆積土との類似性は認められない。カク乱の可能性もある。

〈出土遺物〉弥生土器片13点、非ロクロ土師器片23点の計36点の土器片が堆積土中より出土した。

10号土壙(第12図)

〈概要〉D-3に位置する。III層上面で検出され、2号土壙に南側を切られている。平面形は円形か楕円形を呈していたものと思われる。上端残存規模は東西で約60cm、深さは約10cmである。断面形はややひらいた「U」字状を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は単層から成る。

〈出土遺物〉堆積土中より弥生土器片4点、非ロクロ土師器片6点が出土した。

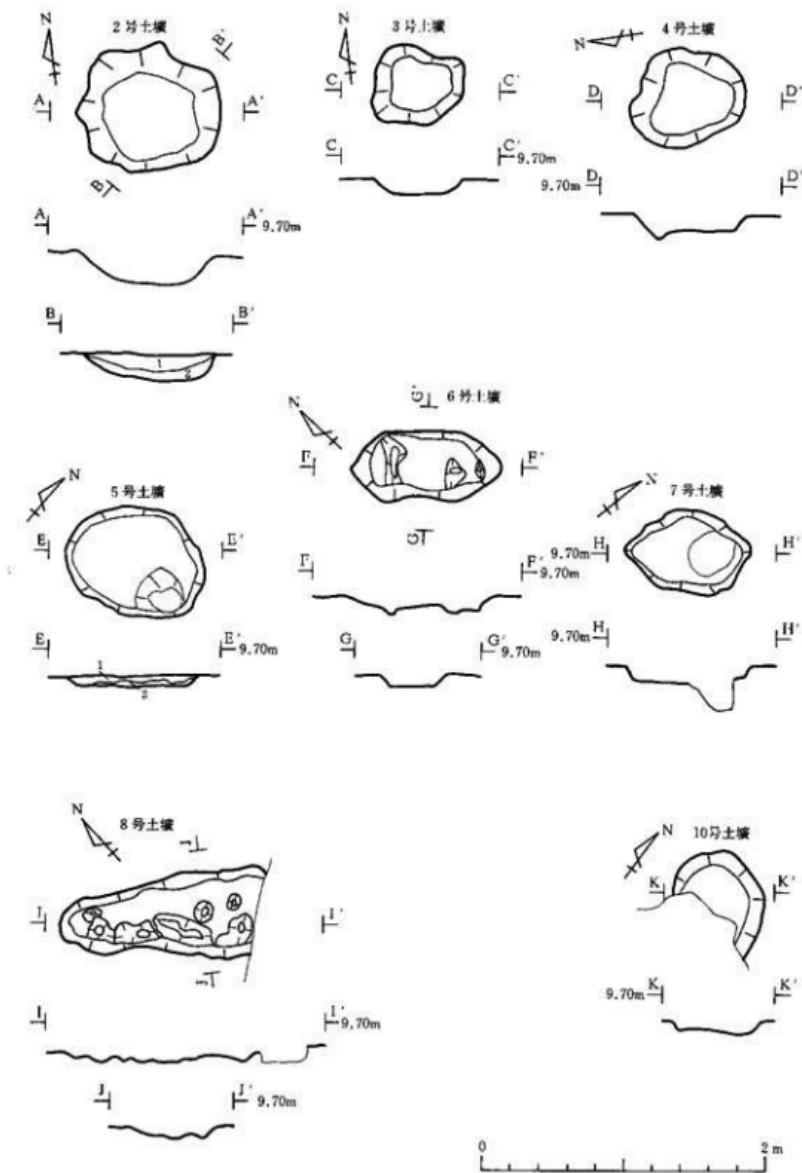
12号土壙(第13~15図、写真図版5-2)

〈概要〉B-C-2・3グリッドにまたがって位置する。III層上面で検出された。長軸方向を2号溝、南西コーナー付近を12号ピット、また中央部を上層検出遺構(1号溝)に切られている。残存部分は少ないが、上端・下端平面形とも隅丸長方形を呈した大型の土壙である。長辺は2号溝跡とほぼ同じE-5°-Sである。上端平面形規模は約360×120cmで、深さは約10cmと浅い。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦である。堆積土は単層で1号土壙等の堆積土と異なる。

〈出土遺物〉堆積土より44点出土した。内訳は弥生土器片22点、非ロクロ土師器片18点、スクリーパー1点、剝片3点である。

13・14号土壙(第13~15図)

〈概要〉住居跡貼床堆土後に検出された。13号土壙は住居跡北西コーナー付近に位置し、上端長軸約1mを呈す不整形の土壙である。底面凹凸が激しく、凹部で深さ約10cmを測る。14号土壙は住居跡北側中央に位置し、上端・下端平面形とも不整楕円形を呈す。上端平面形規模は約



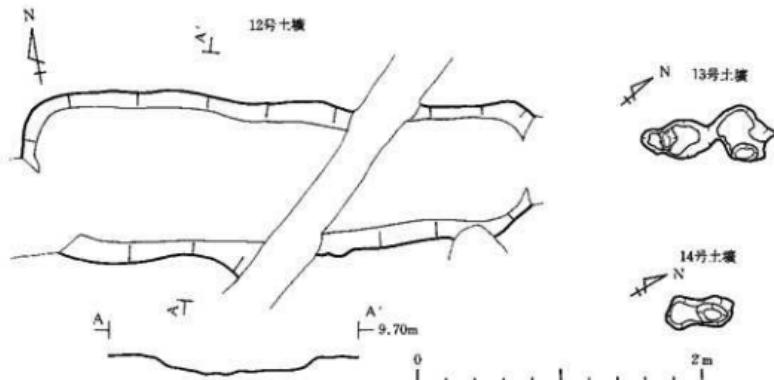
第12図 2~10号土壤平・断面図

50×20 cmで、深さは約6 cmを測る。底面には北側に凹部が認められる。堆積土は両土壤とも単層から成る。両土壤とも住居跡により土壤上部が削平され、底部がわずかに残存したものと考えられる。

〈出土遺物〉 13号土壤堆積土中から弥生土器片が6点、14号土壤底面・堆積土中から弥生土器片が2点、ストーン・リタッチャーが1点出土した。この内、14号土壤底面出土の土器片は、住居跡出土遺物（特に貼床）と接合し、口縁部から底部まで一応図示できる資料（第14図10）となった。

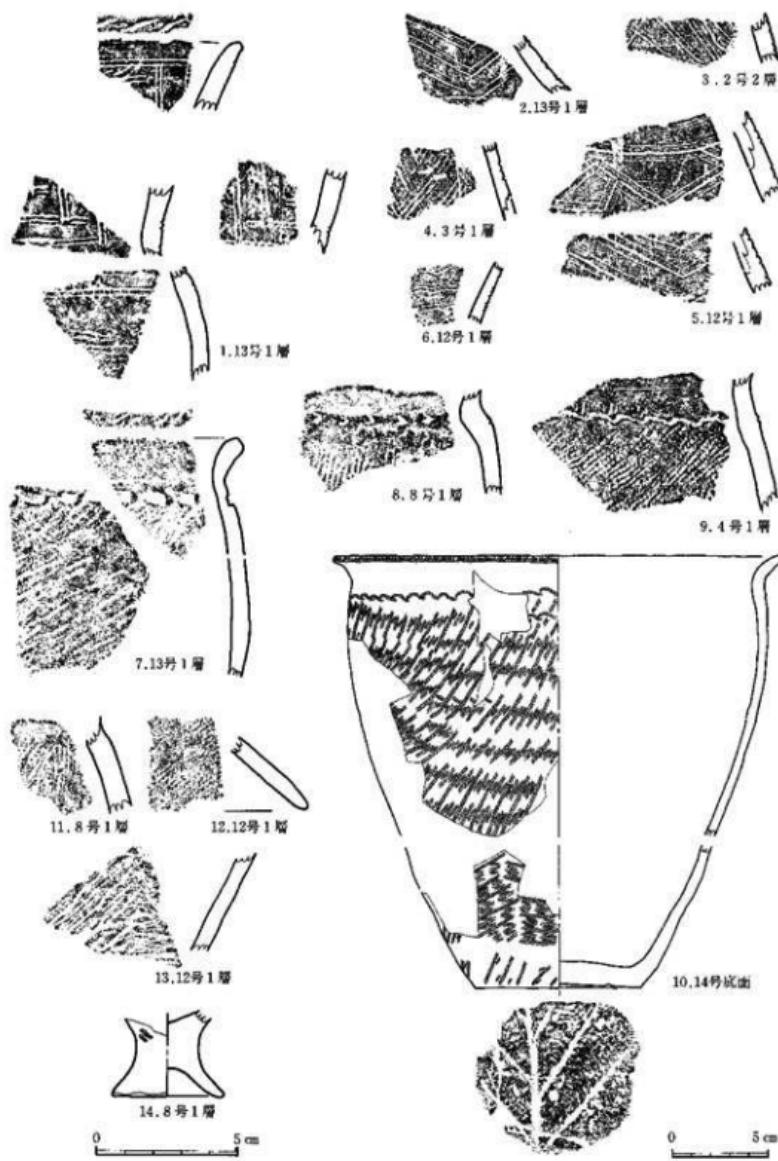
1号溝跡（第5・25図、写真図版5-3）

〈概要〉 II a層上面で検出された。A-2-E-2グリッドにかけて位置する。N-41°-Eの傾きをもって調査区を南北に継続する。上端幅は約34 cm、下端幅は約20 cmを測る。深さは調査区北端で14 cm、南端で30 cmを測り、南側にゆるく傾斜している。断面は壁が急に立ち上がる「U」字状を呈する。堆積土は2層から成り、下層の堆積土は砂質シルトで、特にC-3グリッド以南で確認されている。

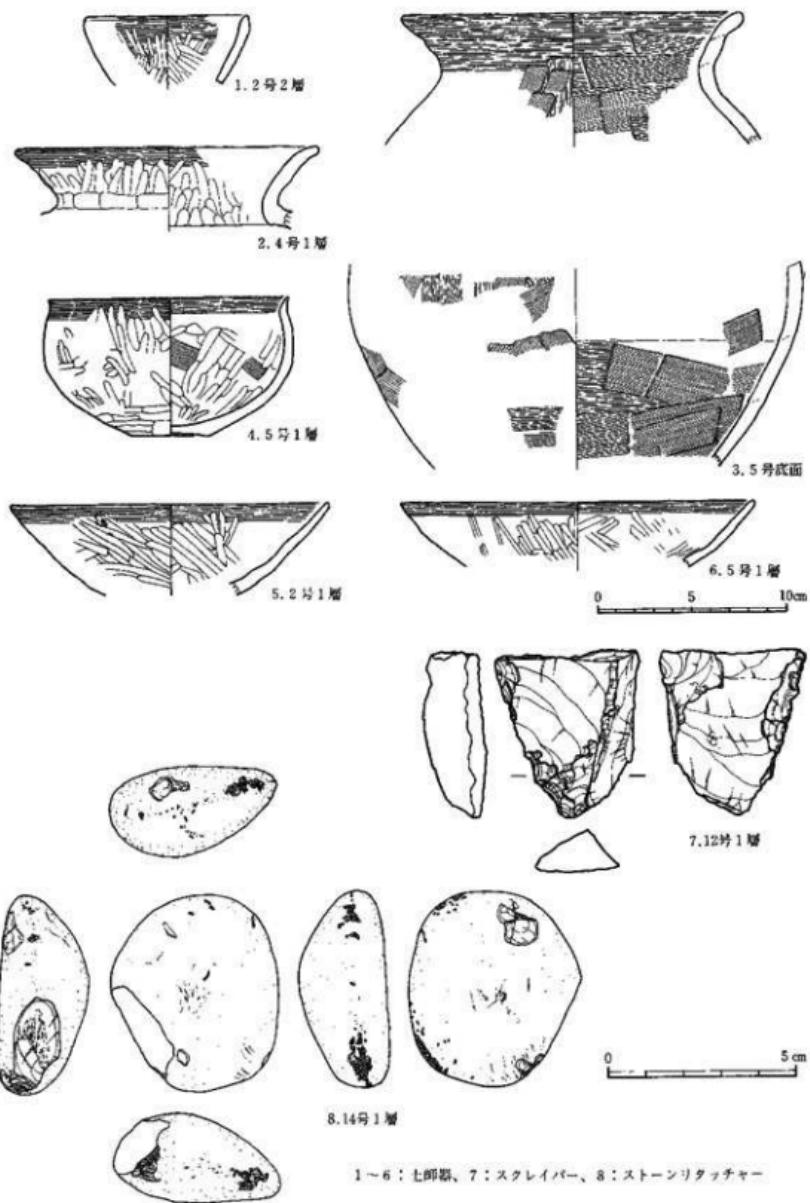


土壤名	堆積土	土色	土性	粒度	しまり	侵入物	
						有	無
2号	1	10YR 5/2 暗褐色	シルト	有	有	炭化物粒、塊状。	地下鉄、風化泥灰岩粒。
	2	10YR 5/2 黒褐色	シルト	やや有	有	炭化物粒 (1 mm)、透土粒。	
3号	1	10YR 5/2 暗褐色	シルト	無	やや有	に近い黄褐色粘土質シルトを複数。	炭化物粒、塊状。
	2	10YR 5/2 暗褐色	シルト	有	有	炭化物粒 (底面附近 1 cm)、塊状。	
4号	1	10YR 5/2 黒褐色	シルト	やや有	有	炭化物粒 (5 mm)、塊状多量。	風化泥灰岩粒。
	2	10YR 5/2 深褐色	粘土質シルト	有	有	炭化物粒、塊状少量。	マンガン粒、風化泥灰岩粒。
5号	1	7.5YR 5/2 黒褐色	シルト	有	やや有	炭化物粒 (5 mm)、塊状。	
	2	10YR 5/2 深褐色	シルト	有	有	炭化物粒、塊状少量。	透土粒。
6号	3	10YR 5/2 黒褐色	シルト	有	やや有	炭化物粒 (5 mm)、塊状。	
	4	10YR 5/2 黒褐色	シルト	有	有	炭化物粒 (5 mm)、塊状。	透土粒。
7号	1	10YR 5/2 黒褐色	シルト	やや有	有	炭化物粒 (5 mm) 少量。	地山ブロック多量。
	2	10YR 5/2 黒褐色	シルト	有	有	炭化物粒 (5 mm) 多量。	風化泥灰岩粒。
8号	1	10YR 5/2 黒褐色	砂質シルト	有	有	炭化物粒 (5 mm) 多量。	風化泥灰岩粒。
	2	10YR 5/2 黒褐色	粘土質シルト	やや有	有	炭化物粒痕跡、地山ブロック多量。	
10号	1	10YR 5/2 黒褐色	粘土質シルト	やや有	有	炭化物粒痕跡、地山ブロック多量。	
	2	10YR 5/2 暗褐色	砂質シルト	有	有	炭化物粒少量。	地山ブロック多量。
12号	1	10YR 5/2 暗褐色	粘土質シルト	有	有	炭化物粒少量。	地山ブロック多量。
	2	10YR 5/2 暗褐色	粘土質シルト	有	有	炭化物粒少量。	地山ブロック多量。
13号	1	10YR 5/2 暗褐色	粘土質シルト	有	有	炭化物粒少量。	
	2	10YR 5/2 暗褐色	粘土質シルト	有	有	地山ブロック多量。	
14号	1	10YR 5/2 暗褐色	粘土質シルト	有	有	地山ブロック多量。	

第13図 12~14号土壤平・断面図



第14図 2～14号土壤出土遺物1（弥生土器）



第15図 2~14号土壤出土遺物2 (土師器・石器)

〈出土遺物〉堆積土1・2層、底面から73点の遺物が出土する。内訳は弥生土器片21点、非クロト師器片45点、石錐1点、ピエス・エスキュー1点、剝片3点、石皿状の石製品の小破片1点である。

2号溝跡(第16・25図、写真図版6-1)

〈概要〉Ⅲ層上面で検出された。B-3～D-1グリッドにかけて位置する。N-85°-Eの傾きをもって延びている。12号土壌を切っており、8号溝跡とD-1グリッドで交じる。上端幅は約58cm、下端幅は約45cmを測る。深さは約10～13cmだが、8号溝跡との交点以西では溝が不明瞭となり、調査区西壁では断面が観察されなかった。底面はほぼ平坦である。断面は「U」字状を呈する。堆積土は単層で、西端部分はグライ化している。

〈出土遺物〉遺物は31点を出土する。内訳は弥生土器片8点、非クロト師器片15点、石錐1点、剝片6点、剝形石製模造品1点である。この内、底面出土のものは剝片1点のみである。

3号溝跡(第16・25図、写真図版6-2)

〈概要〉C-3～E-1グリッドにかけて位置する。Ⅲ層上面で検出された。N-88°-Eの傾きをもつ。4・8・9号溝跡、住居跡を切っている。上端幅は約26cm、下端幅は約13cm、深さは約8cmを測る。底面はほぼ平坦で、断面は逆台形状を呈する。堆積土は単層である。

〈出土遺物〉遺物は52点出土する。内訳は弥生土器片12点、非クロト師器片36点、剝片4点である。この内、底面より出土したものは弥生土器片1点である。

4号溝跡(第16・25図、写真図版6-2)

〈概要〉Ⅲ層上面で検出された。B-3～E-1グリッドにかけて位置する。住居跡を切り、3号溝跡・15号ピットに一部を切られている。3号溝跡とは走向方位、規模等が類似している。N-86°-Eの傾きをもつ。上端幅は約37cm、下端幅は約21cm、深さは約10cmを測る。断面は「U」字状を呈する。堆積土は単層である。

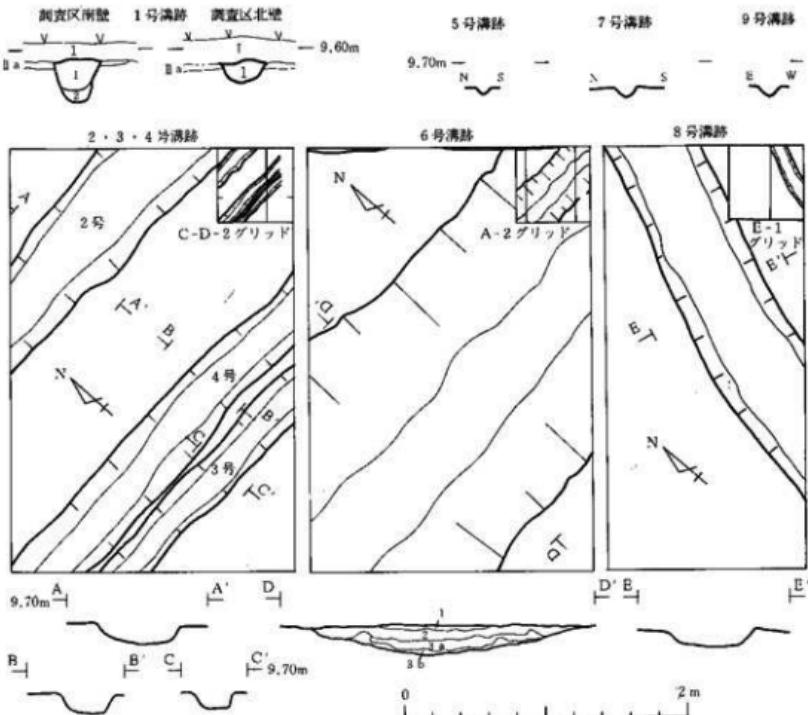
〈出土遺物〉152点出土した。底面出土の弥生土器片1点を除き他は全て堆積土中出土である。内訳は弥生土器片41点、非クロト師器片105点、二次加工のある剝片1点、剝片5点である。

6号溝跡(第16～24図、写真図版7-1・2)

〈概要〉A-2・3～B-C-1グリッドにかけて位置する。Ⅲ層上面で検出された。1・5号土壌、5・7～11号ピットに切られている。N-85°-Eの傾きを持って延びているが、B-1グリッド以西からはゆるやかに弯曲している。上端幅190～270cm、下端幅は約55cmを測るが、

下端ラインは不明瞭である。深さは25cm前後で、断面はゆるやかな「V」字状を呈する。堆積土は3層から成り、さらに最下層はa・bに細分される。

〈出土遺物〉堆積土1・2・3層・底面から1,055点の遺物が出土する。内訳は弥生土器片823点、非クロロ土器片89点、石器2点、二次加工のある剝片1点、石核8点、剝片130点、礫石器2点である。以上のように当溝跡よりは、検出遺構中では弥生時代の出土遺物が極めて多い。



溝跡名	地盤上	土色	土性	粘性	しまり	堆入物	
						1	2
1号	1	10YR 5/4 にぼい黄褐色	粘土質シルト	有	有	マンガン鉱少量。	
	2	10YR 5/4 黄褐色	砂質シルト	やや有	有		
2号	1	10YR 5/4 黑褐色	粘土質シルト	有	有	炭化物鉱少量。地山ブロック。	
	3号	1	10YR 5/4 黑褐色	粘土質シルト	有	有	炭化物鉱。地山ブロック。
4号	1	10YR 5/4 黑褐色	粘土質シルト	有	有	炭化物鉱。マンガン鉱。地山ブロック。	
	5号	1	10YR 5/4 黑褐色	粘土質シルト	有	有	マンガン鉱。地山ブロック。
6号	1	10YR 5/4 黑褐色	シルト	有	有	炭化物鉱。地山鉱。炭化物鉱微量。	
	2	10YR 5/4 黄褐色	砂質シルト	やや有	有	炭化物鉱。炭化物鉱。	
6号	3a	10YR 5/4 黑褐色	シルト	有	有	炭化物鉱。地山ブロック微量。	
	3b	10YR 5/4 褐色	砂質シルト	やや有	有	炭化物鉱。地山ブロック微量。	
	7号	1	10YR 5/4 黑褐色	粘土質シルト	有	有	マンガン鉱。地山ブロック。
8号	1	10YR 5/4 増褐色	粘土質シルト	有	有	炭化物鉱微量。地山ブロック。	
9号	1	10YR 5/4 黑褐色	粘土質シルト	有	有	マンガン鉱。地山ブロック。	

第16図 1～9号溝跡平・断面図

また、堆積土2層以下からは、弥生時代の遺物しか出土していない。

8号溝跡(第16図、写真図版6-3)

〈概要〉Ⅲ層上面で検出される。D-1-E-2グリッドにかけて位置する。3・4号溝跡に切られている。N-12°-Eの傾きをもつ。上端幅は約58cm、下端幅は約46cmを測る。深さは約10cmを測り、底面はほぼ平坦である。断面は「U」字状を呈する。堆積土は単層である。

調査当初は2号溝跡と8号溝跡とは重複関係にあるものと考え調査を進めたが、両者とも交点よりは先に延びていない。加えて、底面レベル、規模、形態、堆積土が同じである。以上の点より、両溝跡は同一のものであり、「L」字状に屈曲した溝跡と見えられる。

〈出土遺物〉堆積土・底面より56点の遺物が出土した。内訳は弥生土器片14点、非ロクロ土師器片40点、剝片2点である。

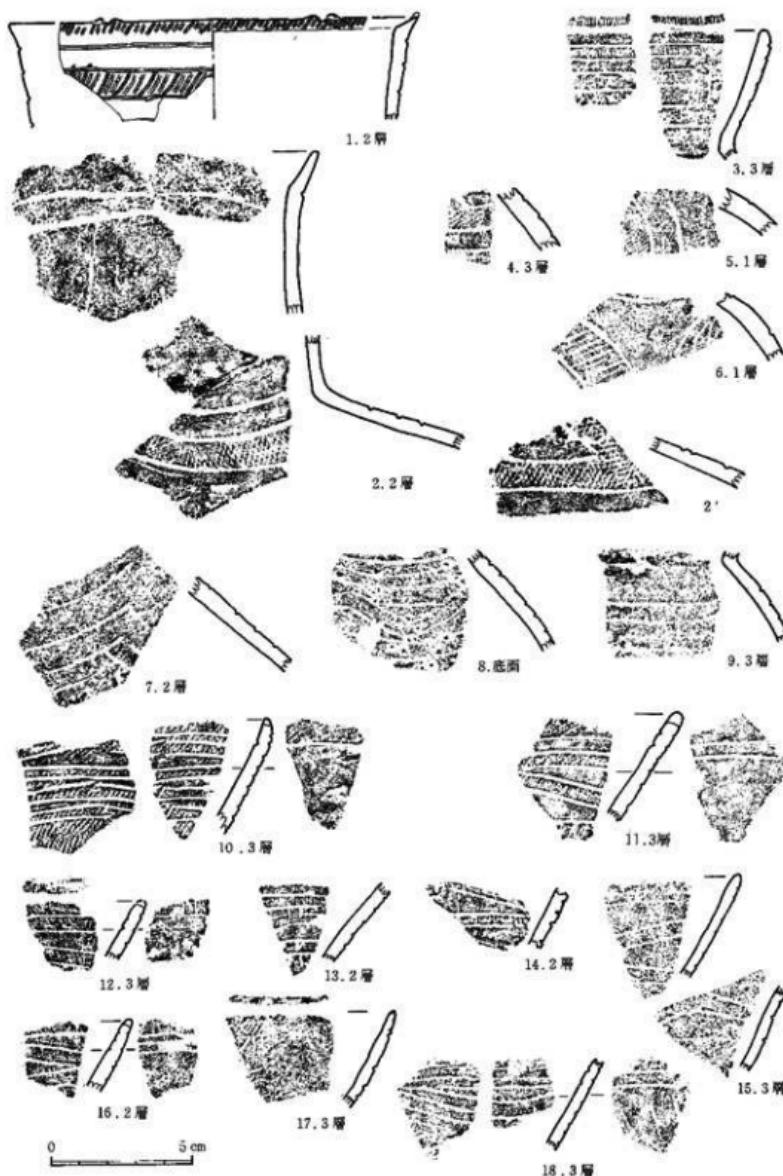
5・7・9号溝跡(第5図)

〈概要〉いずれもⅢ層上面で検出される。5号溝跡はA-3グリッド、7号溝跡はA-2グリッド、9号溝跡はE-1グリッドに位置する。9号溝跡は3号溝跡に切られている。それぞれ全長2m強の小溝跡で(5号-2.0m、7号-2.6m、9号-2.2m)、5・7号はほぼ同一方向に傾く(5号-N-86°-E、7号-N-83°-E、9号-N-25°-W)。上端幅15cm前後(5号-12cm、7・9号-17cm)、下端幅6cm前後(5号-6cm、7号-5cm、9号-8cm)、深さ5cm前後(5号-4cm、7・9号-6cm)と3者ともほぼ同規模である。また、いずれも底面の下端ラインが不明瞭で、断面が「V」字状を呈し、加えて堆積土も単層で共通性が強い。これらの溝跡は、人為的な溝跡でない可能性もある。

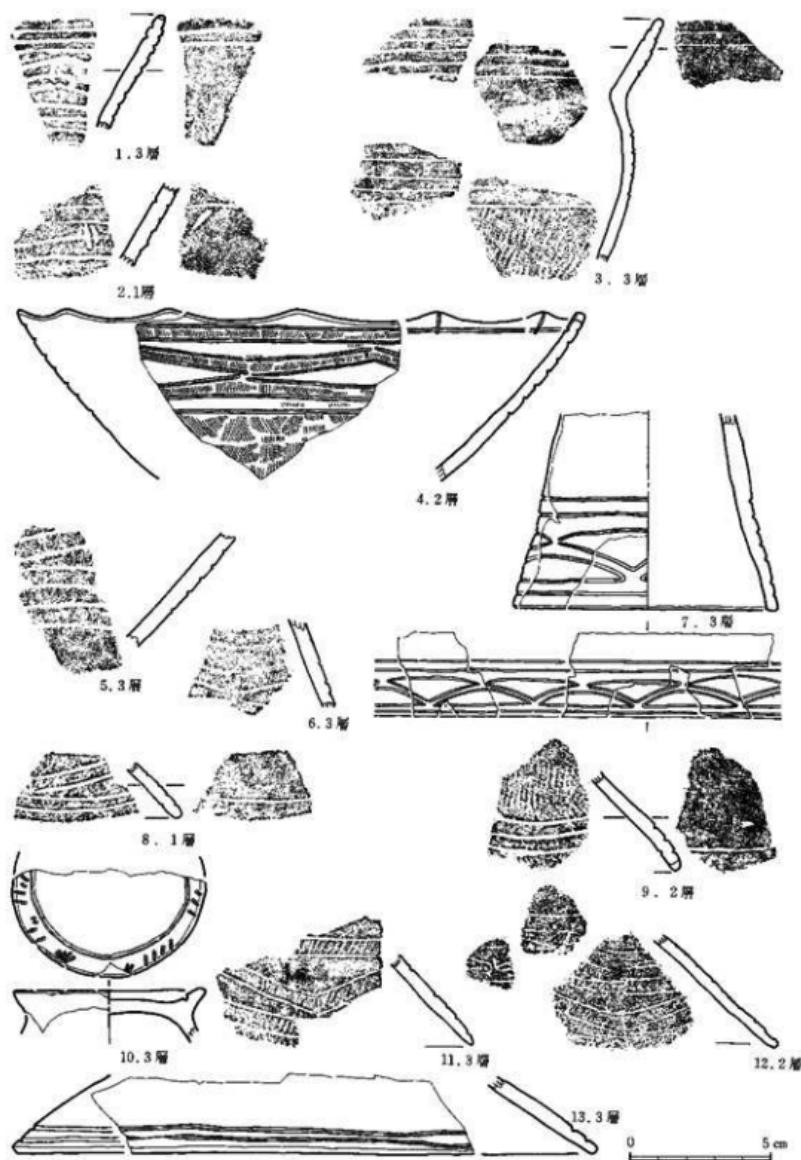
〈出土遺物〉遺物は5号-2点、7号-22点、9号-14点出土するが全て堆積土中である。内訳は弥生土器片(5・9号)、非ロクロ土師器片(5・7・9号)、剝片(9号)である。

ピット(第5・26図、第2・3表)

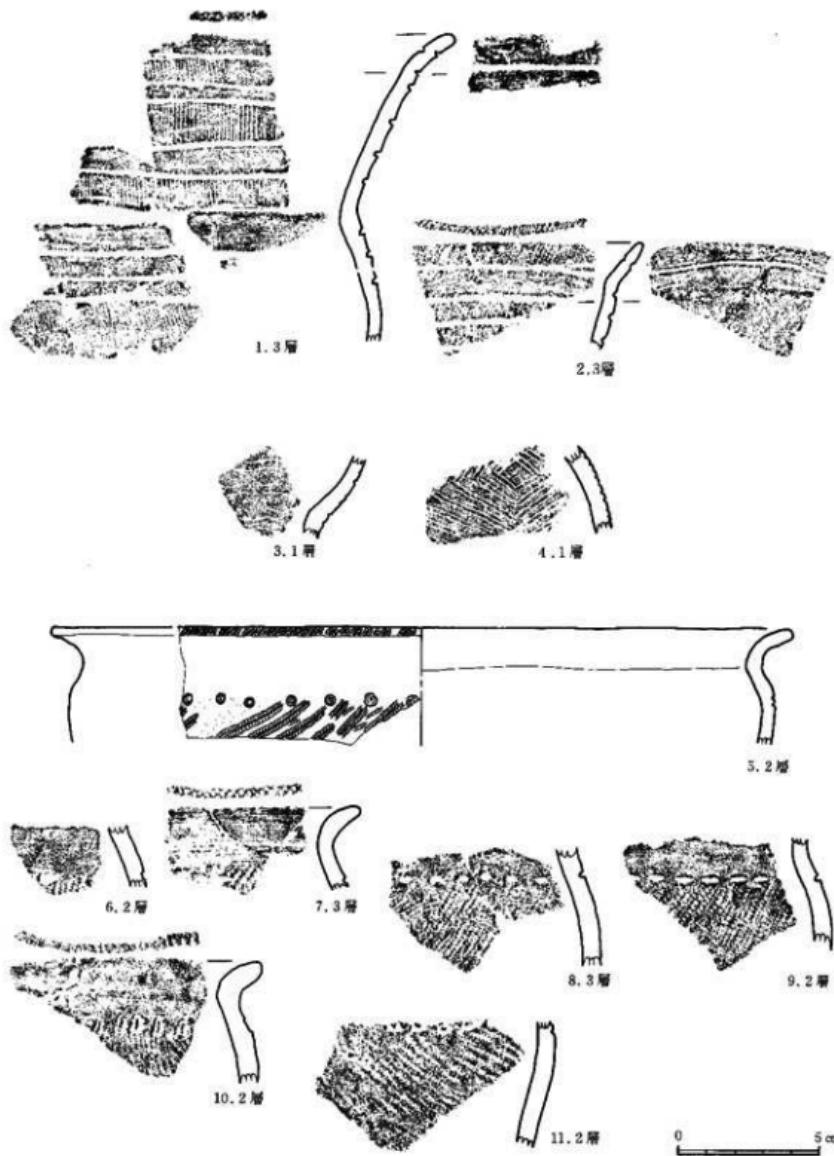
〈概要〉Ⅲ層上面より17個検出している。それらの最大のものは15号ピットで、上端規模が54×36cm、最小のものは1号ピットの18×16cmであるが、多くは20~30×30~40cmである。また深さは最深が18号ピットの60cm、最浅が1号ピットの10cmであるが、その多くは40cm前後である。平面形態は、上端が不整橢円形が大半を占め、下端は円・橢円・不整橢円形がほぼ均一している。また断面形は、底面がやや凹状のものと、尖底状のものに大別され、やや凹状のものが尖底状のものをうわまわる。堆積土は、12号ピットの3層、17号ピットの2層を除けば全て単層である。これらのピットの多くはA区に位置し、B区も含めると13個にも及ぶ。しかし、規模、



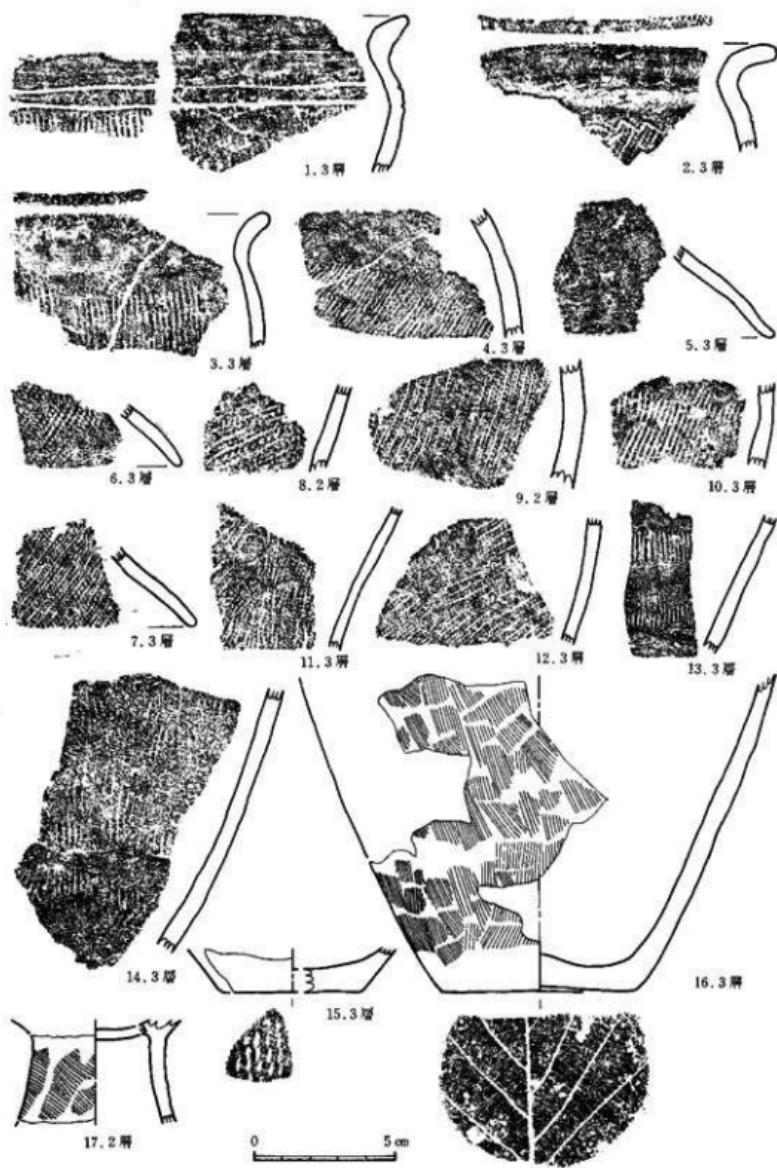
第17図 6号溝跡出土遺物1（弥生土器1）



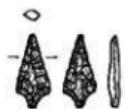
第18図 6号溝跡出土遺物2（弥生土器2）



第19図 6号溝跡出土遺物3（弥生土器3）



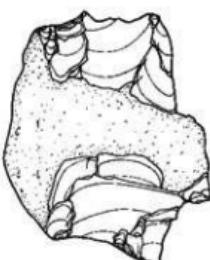
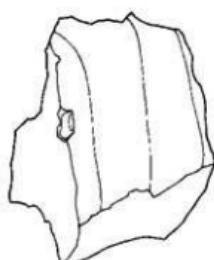
第20図 6号溝跡出土遺物4 (弥生土器4)



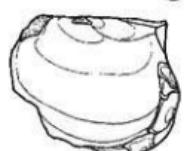
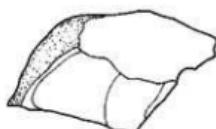
1、2層



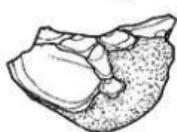
2、3層



3、2層



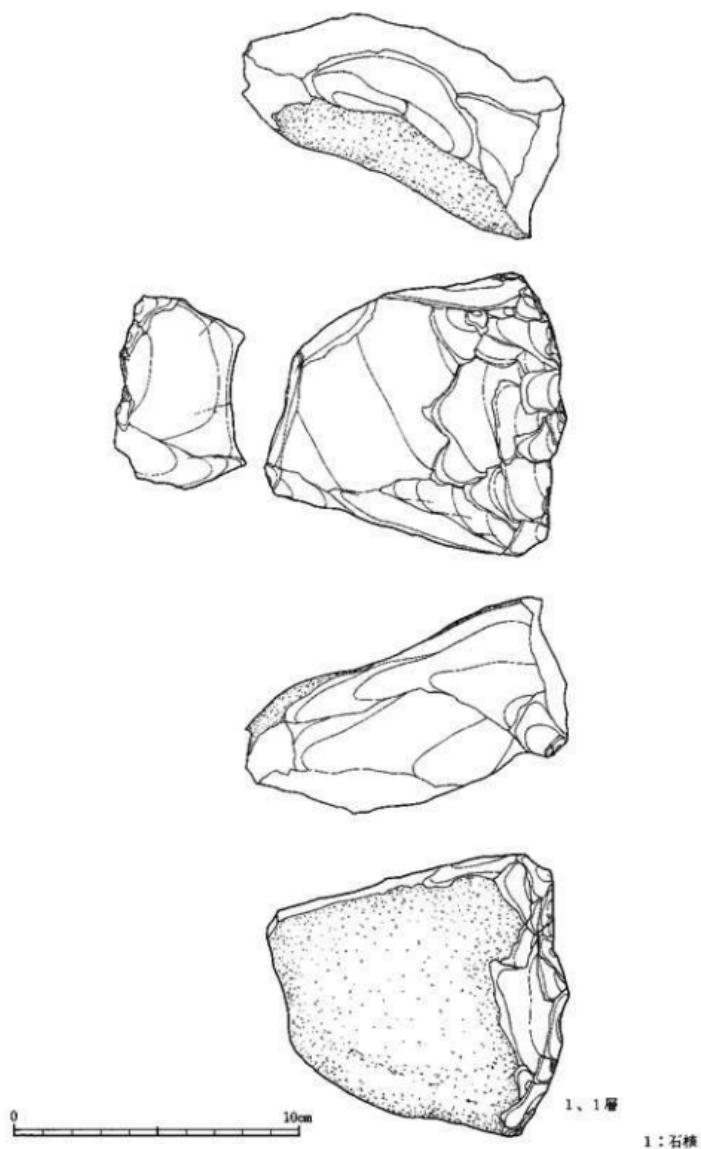
4、3層



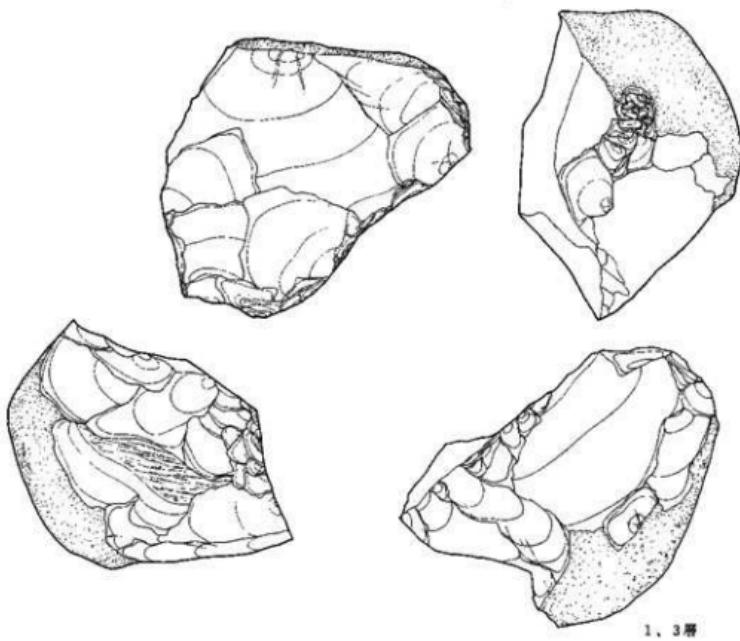
1～2：石器 3～4：石核

0 5 cm

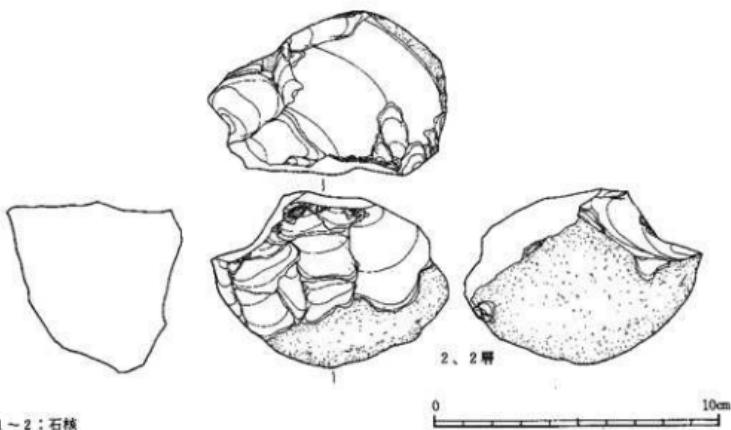
第21図 6号溝跡出土遺物5（石器1）



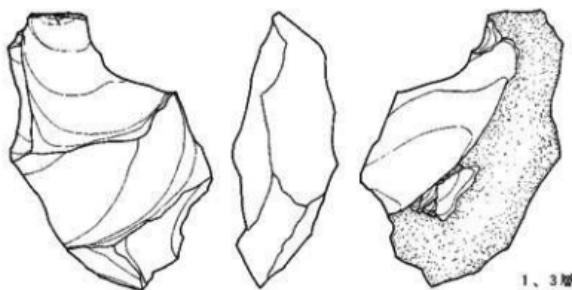
第22図 6号溝跡出土遺物6（石器2）



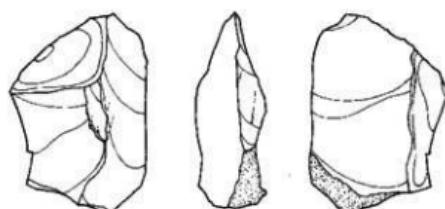
1、3層



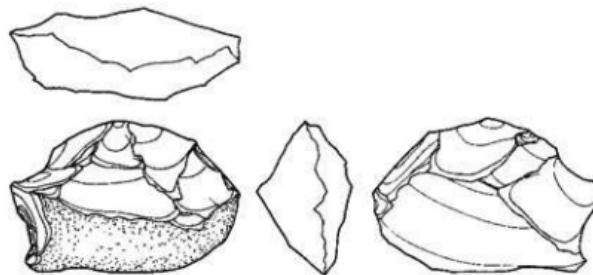
第23図 6号溝跡出土遺物7（石器3）



1、3層



2、2層

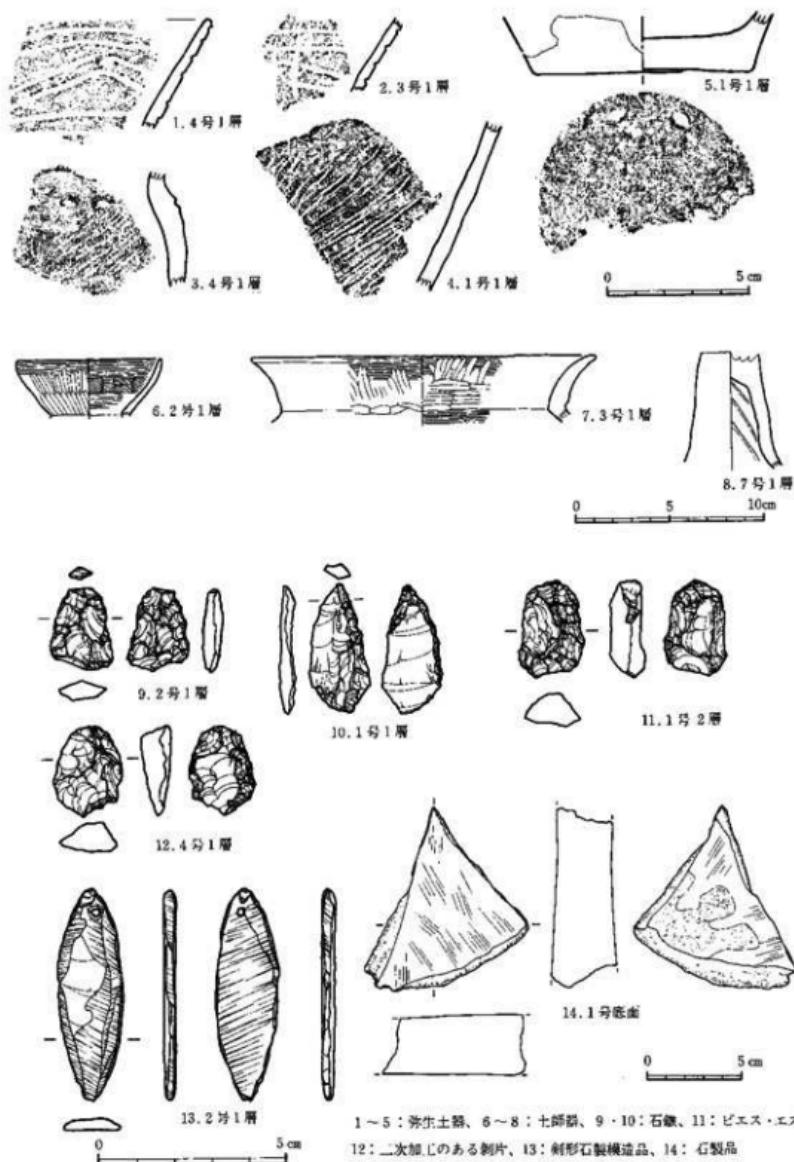


3、2層

1～3：石核



第24図 6号溝跡出土遺物8（石器4）



第25図 2~5・7~9号溝跡出土遺物（弥生土器・土師器・石器・石製品）

堆積土の比較を含めても、配列関係は見られない。加えて柱痕の認められるものもない。

〈出土遺物〉 4号ピットの堆積土（単層）上面より、口縁部を4/5欠失する非クロロ土師器の环が出土した。また10・14号ピットを除く全てのピットから、弥生土器片、非クロロ土師器片、剝片のいずれかを少量出土している。

第2表 ピット観察表

ピット名	地区名	検出面	上端平面形	下端平面形	上端規範	下端規範	深さ	壁角	堆積	遺物出土位置	東西南北
1号	A-3	直壁上面	不整円形	円	16×18cm	6×7cm	10cm	60°	1層	1層	—
2号	A-3	直壁上面	不整円形	円	30×30cm	18×18cm	44cm	75°	1層	1層	—
3号	A-1	直壁上面	不整円形	円	25×30cm	22×22cm	40cm	85°	1層	1層	—
4号	B-2	直壁上面	不整円形	円	28×32cm	24×28cm	32cm	80°	1層	1層	7号土器を切る 6号漏跡を引る
5号	A-2	直壁上面	不整円形	円	22×22cm	16×16cm	14cm	80°	1層	1層	6号漏跡を引る
6号	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
7号	A-3	直壁上面	—	—	26×—	—	34cm	70°	1層	1層	6号漏跡を切る
8号	A-2	直壁上面	不整円形	円	30×24cm	10×14cm	50cm	80°	1層	1層	6号漏跡を切る
9号	A-2	直壁上面	不整円形	円	26×32cm	18×25cm	49cm	70°	1層	1層	6号漏跡を切る
10号	B-1	直壁上面	円	円	24×24cm	13×13cm	14cm	70°	1層	なし	6号漏跡を切る
11号	B-1	直壁上面	円	円	28×32cm	18×22cm	26cm	75°	1層	1層	6号漏跡を切る
12号	B-3	直壁上面	不整円形	円	42×45cm	24×26cm	49cm	65°	3層	1層・2層	12号土器を切る
13号	D-2	直壁上面	円	円	24×28cm	8×10cm	18cm	65°	1層	1層	—
14号	B-3	直壁上面	不整円形	円	28×30cm	12×12cm	20cm	80°	1層	なし	—
15号	C-2	直壁上面	不整円形	円	36×54cm	24×38cm	23cm	65°	1層	1層	4号漏跡を切る
16号	B-2	直壁上面	円	円	24×26cm	16×18cm	37cm	85°	1層	1層	1号土器を切る
17号	D-2	直壁上面	不整円形	円	36×38cm	16×28cm	41cm	80°	2層	3層・2層	—
18号	A-3	直壁上面	不整円形	円	24×30cm	6×12cm	60cm	85°	1層	1層	—

第3表 ピット土層記表

ピット名	部位	土色	土性	粘性	含水率	混入人	物
1号	1層	10YR3/3 暗褐色	シルト	なし	あり	10YR4/3にない黄褐色シルト	
2号	1層	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	あり	あり	10YR2/2黑褐色由粘土を粒状、炭化物多量	
3号	1層	10YR3/2 黒褐色	シルト	べりあり	やあり	地山ブロック、炭化物粒	
4号	1層	10YR3/2 黒褐色	シルト	あり	あり	1号土器を切る	
5号	1層	10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	あり	やあり	炭化物粒、焼土粒、風化砂岩粒	
6号	—	—	—	—	—	—	—
7号	1層	10YR4/2 黑褐色	粘土質シルト	あり	あり	1cm大の炭化物、炭化物粒、地山崩壊七ブロック	
8号	1層	10YR3/1 黑褐色	粘土質シルト	あり	あり	炭化物粒	
9号	1層	10YR4/3 にない黄褐色	粘土質シルト	あり	あり	地山ブロックを多量、炭化物粒	
10号	1層	10YR3/2 黑褐色	粘土質シルト	あり	あり	地山崩壊七ブロック、炭化物粒	
11号	1層	10YR4/2 黑褐色	粘土質シルト	あり	あり	軒上の塵土崩壊七ブロック	
12号	1層	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	あり	あり	1cm大の地山ブロックを多量、マンガン、炭化物粒	
2層	10YR2/2 黑褐色	粘土質シルト	あり	あり	し	炭化物粒を微量	
3層	10YR6/3 にない黄褐色	粘土質シルト	あり	あり	なし	—	
13号	1層	10YR3/1 黑褐色	粘土質シルト	べりあり	あり	炭化物粒、石子、地山ブロックを多量	
14号	1層	10YR3/1 黑褐色	粘土質シルト	あり	やり	地山ブロックを多量	
15号	1層	10YR3/2 黑褐色	粘土質シルト	あり	あり	地山ブロックを多量、炭化物粒	
16号	1層	10YR3/2 黑褐色	粘土質シルト	あり	あり	地山ブロックを多量、炭化物粒	
17号	1層	10YR3/1 黑褐色	粘土質シルト	べりあり	あり	地山ブロック3cm大を多量、炭化物粒、マンガン粒	
2層	10YR4/2 黑褐色	粘土質シルト	べりあり	あり	し	熟土を崩壊状、白色ブロック少量	
18号	1層	10YR3/2 黑褐色	粘土質シルト	あり	あり	炭化物粒	



第26図 ピット出土遺物（弥生土器・土師器）

第4表 造構内出土遺物数量表

1. 住居跡

出土地点	層位	土器		石器	石製品	鐵製品	合計
		非生土器 +以上 破片	生土器 破片				
住居内 堆積土	1	-	218	66	16	-	2
	2	-	134	19	8	1	-
	3	-	50	17	4	-	-
	4	-	63	6	7	-	-
床面	3	48	9	5	-	-	-
床面 施設	P3 1	-	2	-	-	-	-
	P3 1	-	18	10	1	-	-
	P5 2	-	10	1	1	-	-
	P5 3	-	1	5	2	-	-
	P6 1	-	7	-	-	-	-
	P7 1	-	-	2	-	-	-
	P17 1	-	5	3	-	-	-
	P18 1	-	2	1	-	-	-
熱床		-	31	38	13	1	-

3. 溝跡

溝跡名	層位	土器		石器	石製品	合計
		非生土器 破片	生土器 破片			
1号	1	14	23	2	-	72
	2	4	13	3	-	
	底面	3	9	-	1	
2号	1	8	15	6	1	31
	底面	-	-	1	-	
3号	1	11	36	4	-	52
	底面	1	-	-	-	
4号	1	40	105	6	-	152
	底面	1	-	-	-	
5号	1	1	1	-	-	2
	底面	1	97	89	18	
6号	2	353	-	52	-	1055
	3	369	-	72	-	
	底面	4	-	1	-	
7号	1	-	22	-	-	22
	底面	1	14	36	2	
8号	1	-	6	-	-	58
	底面	1	-	7	4	
9号	1	-	-	-	-	11

2. 土壌

土壌名	層位	土器		石器	石製品	合計
		非生土器 (破片)	生土器 破片			
1号	1	57	-	319	7	1
	底面	16	1	17	1	-
2号	1	9	-	32	-	-
	2	5	-	16	1	-
3号	1	4	-	7	-	11
4号	1	6	-	12	-	18
5号	1	3	1	18	1	-
	2	-	-	3	-	-
	底面	9	-	4	-	-
6号	1	-	-	5	-	5
7号	1	1	-	1	-	2
8号	1	13	-	23	-	36
10号	1	4	-	6	-	10
12号	1	23	-	18	4	-
13号	1	6	-	-	-	6
14号	1	1	-	-	1	-
底面	1	-	-	-	-	3

4. ピット

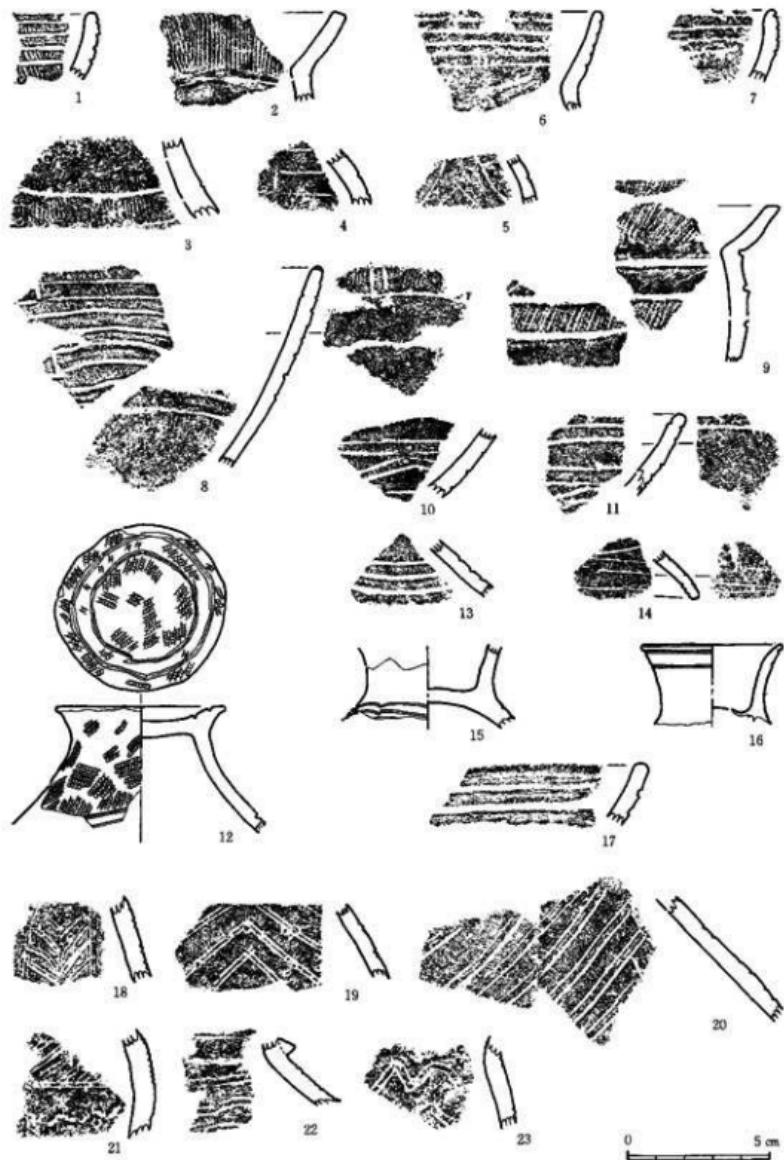
ピット名	層位	土器		石器	合計
		非生土器 (破片)	生土器 破片		
1号	1	1	-	2	3
	2	5	-	4	11
2号	底面	1	-	3	-
	3号	1	-	3	-
4号	1	-	1	15	1
	5号	1	-	7	-
7号	1	-	-	2	-
	8号	1	-	5	-
9号	1	4	-	11	1
	11号	1	4	-	6
12号	1	1	-	1	-
	2	4	-	-	6
13号	1	-	-	1	-
	15号	1	1	-	4
16号	1	1	-	-	1
	17号	1	2	-	6
18号	1	1	-	1	3

2. その他の出土遺物

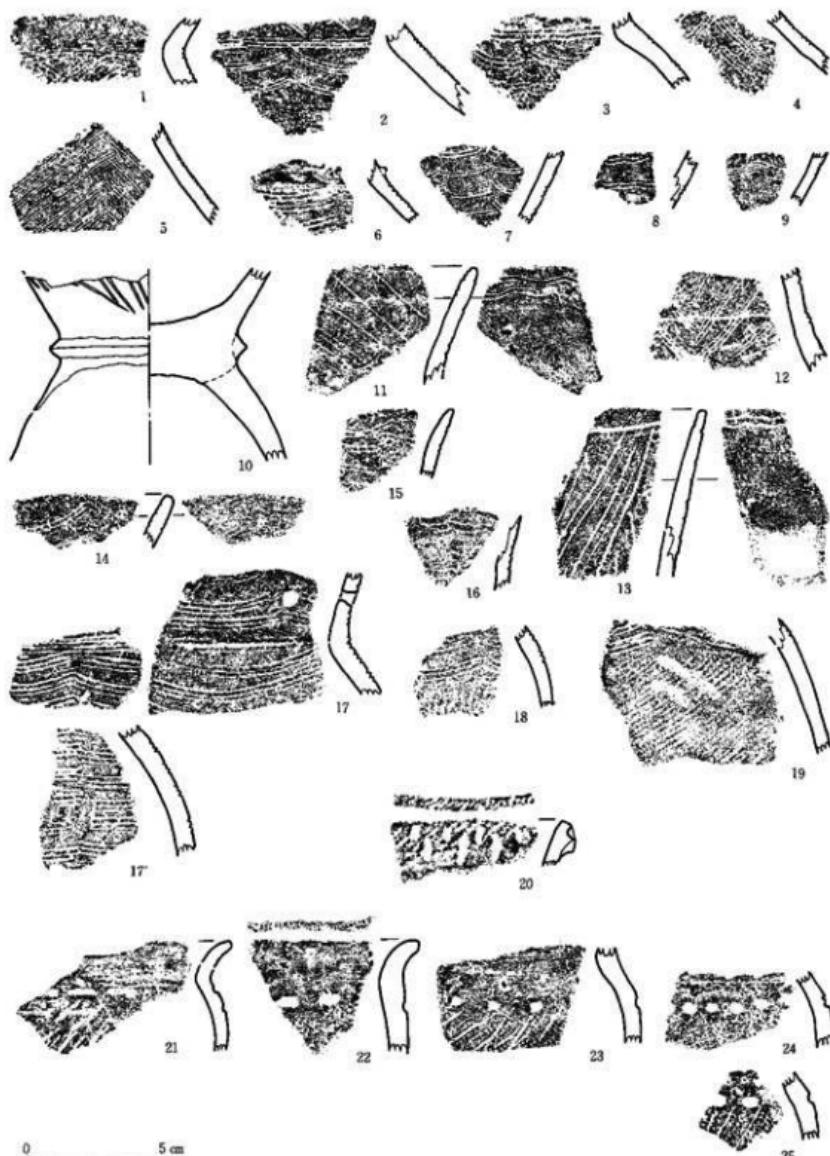
基本層位から5,275点出土した他、表採資料が18点ある。内訳は弥生土器711点、非ロクロ土師器4,287点、須恵器4点、陶磁器34点、瓦1点、土製品1点、石器247点（内、剣片214点）、石製品5点、鉄製品3点である。これら出土資料は、石器・石製品の一部を除き全て破片資料である。基本層位出土の遺物中最も多かったのが土師器で全体の80%を占め、次いで弥生土器の順となる。層位的にはⅡa層出土が多く、各層とも各遺物を混在する。しかし、Ⅱb層中に須恵器、陶磁器、瓦を含まない。また、Ⅱa層中には陶磁器、瓦を含まない。地区的には各遺物ともこれといったかたよりは示さない。

第5表 基本層位内出土遺物数量表

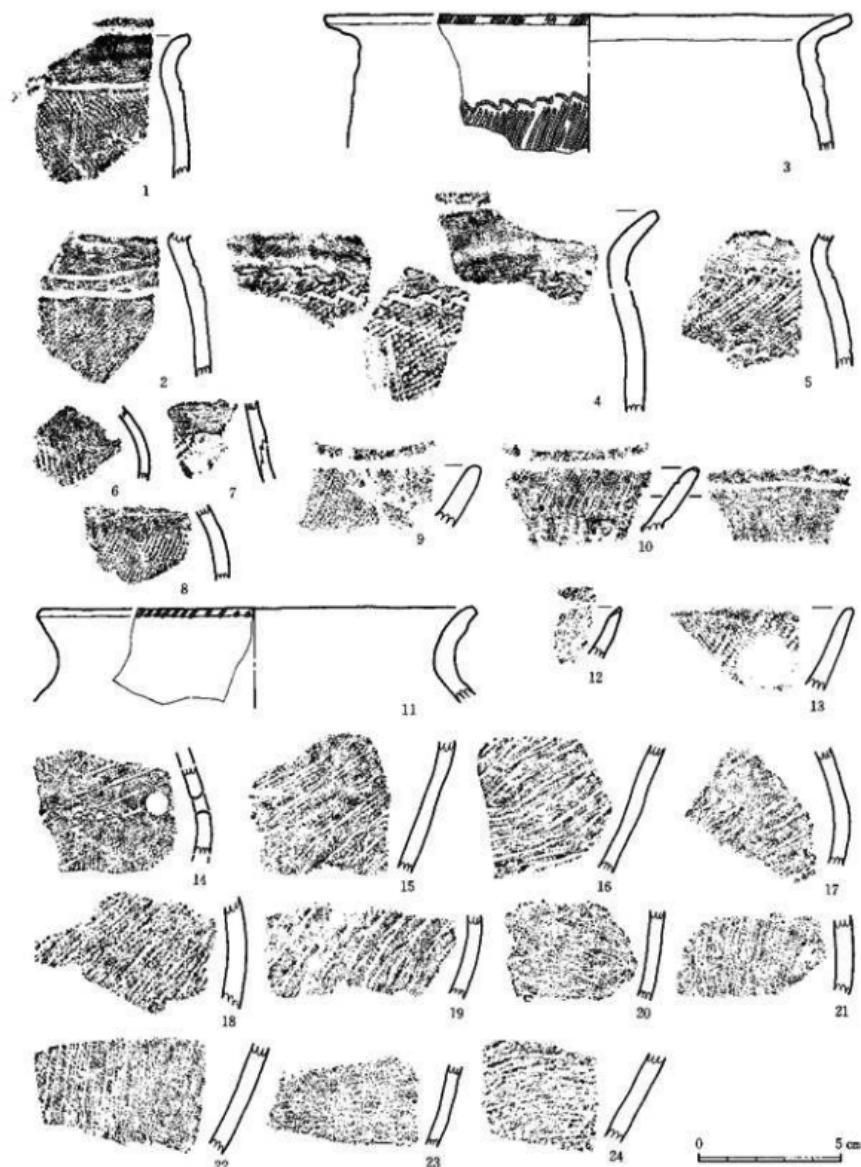
地区名	層位	弥生土器	土師器	須恵器	陶磁器	瓦	土製品	石器	石製品	鉄製品	合計
A-1	I	6	138	—	4	—	4	1	—	—	153
	Ⅱa	2	79	1	—	—	—	4	—	—	86
	Ⅱb	11	31	—	—	—	—	—	—	—	42
A-2	I	16	165	—	2	—	5	1	—	—	156
	Ⅱa	6	122	—	—	—	8	—	—	—	137
	Ⅱb	7	6	—	—	—	3	—	—	—	16
A-3	I	1	47	—	5	—	—	4	—	—	37
	Ⅱa	15	261	—	—	—	10	—	—	—	286
	Ⅱb	8	9	—	—	—	3	—	—	—	363
B-1	I	10	79	—	2	—	—	4	—	—	95
	Ⅱa	21	98	—	—	—	—	14	—	—	133
	Ⅱb	20	21	—	—	—	—	3	—	—	44
B-2	I	10	156	—	—	—	—	4	—	—	170
	Ⅱa	58	253	—	—	—	—	26	—	1	338
	Ⅱb	17	9	—	—	—	—	4	—	—	30
B-3	I	13	63	—	2	—	—	5	—	—	83
	Ⅱa	24	201	—	—	—	—	6	—	—	231
	Ⅱb	19	30	—	—	—	—	5	—	—	54
C-1	I	13	29	—	1	—	—	4	—	—	47
	Ⅱa	27	131	—	—	—	—	9	—	—	167
	Ⅱb	2	8	—	—	—	—	2	—	—	12
C-2	I	27	113	—	5	—	—	3	—	—	149
	Ⅱa	38	117	—	—	—	—	9	—	—	164
	Ⅱb	22	47	—	—	—	—	3	1	—	73
C-3	I	15	138	—	1	—	—	11	—	—	165
	Ⅱa	29	199	—	—	—	—	12	—	1	241
	Ⅱb	12	10	—	—	—	—	1	—	—	23
D-1	I	7	62	—	4	—	—	1	—	—	74
	Ⅱa	33	142	—	—	—	—	4	—	—	179
	Ⅱb	21	32	—	—	—	—	2	—	—	55
D-2	I	3	72	—	—	—	—	1	—	—	76
	Ⅱa	11	206	1	—	—	—	6	—	—	223
	Ⅱb	14	99	—	—	—	—	5	—	—	118
D-3	I	6	71	—	1	—	—	5	—	—	85
	Ⅱa	18	149	—	—	—	—	9	—	—	176
	Ⅱb	11	10	—	—	—	—	1	1	—	284
E-1	I	4	32	1	3	1	—	—	—	—	41
	Ⅱa	6	98	—	—	—	—	1	—	—	100
	Ⅱb	3	24	—	—	—	—	1	—	—	26
E-2	I	7	92	—	2	—	—	5	—	—	106
	Ⅱa	62	386	—	—	—	—	17	—	—	465
	Ⅱb	40	126	—	—	—	—	13	1	—	180
E-3	I	6	57	—	1	—	—	3	1	—	68
	Ⅱa	6	56	1	—	—	—	6	—	—	69
	Ⅱb	—	2	—	—	—	—	1	—	—	3
実採	—	17	—	—	—	—	—	1	—	—	18
合計	II	711	4,287	4	34	1	1	247	5	3	5,293



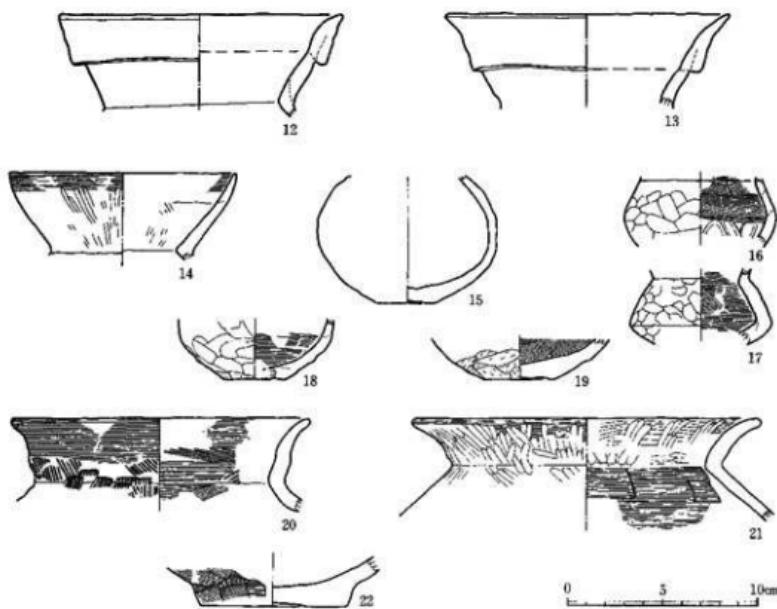
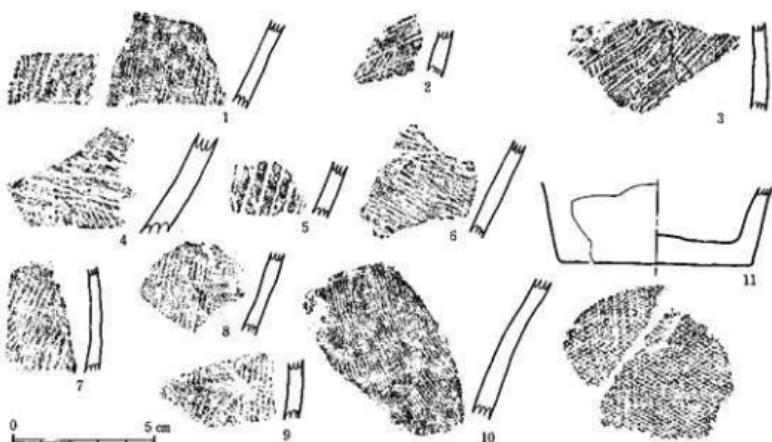
第27図 各地区出土遺物1 (赤生土器1)



第28図 各地区出土遺物2（弥生土器2）

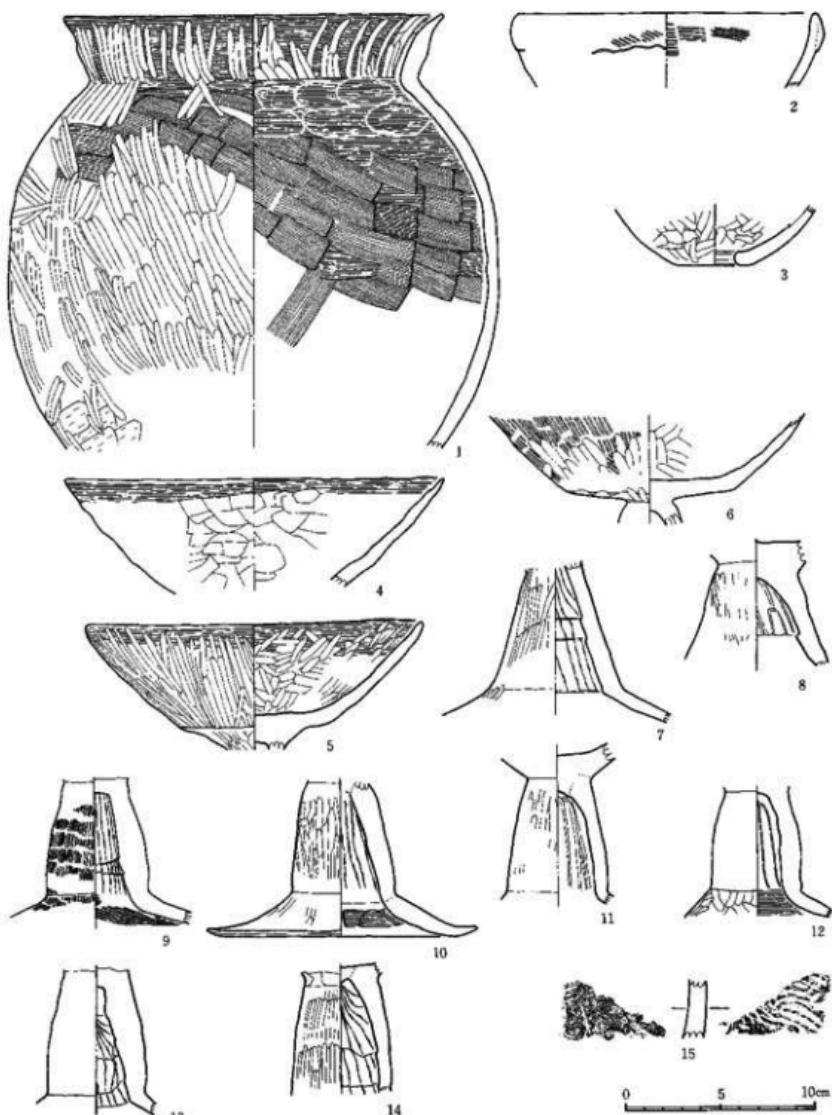


第29図 各地区出土遺物3（弥生土器3）



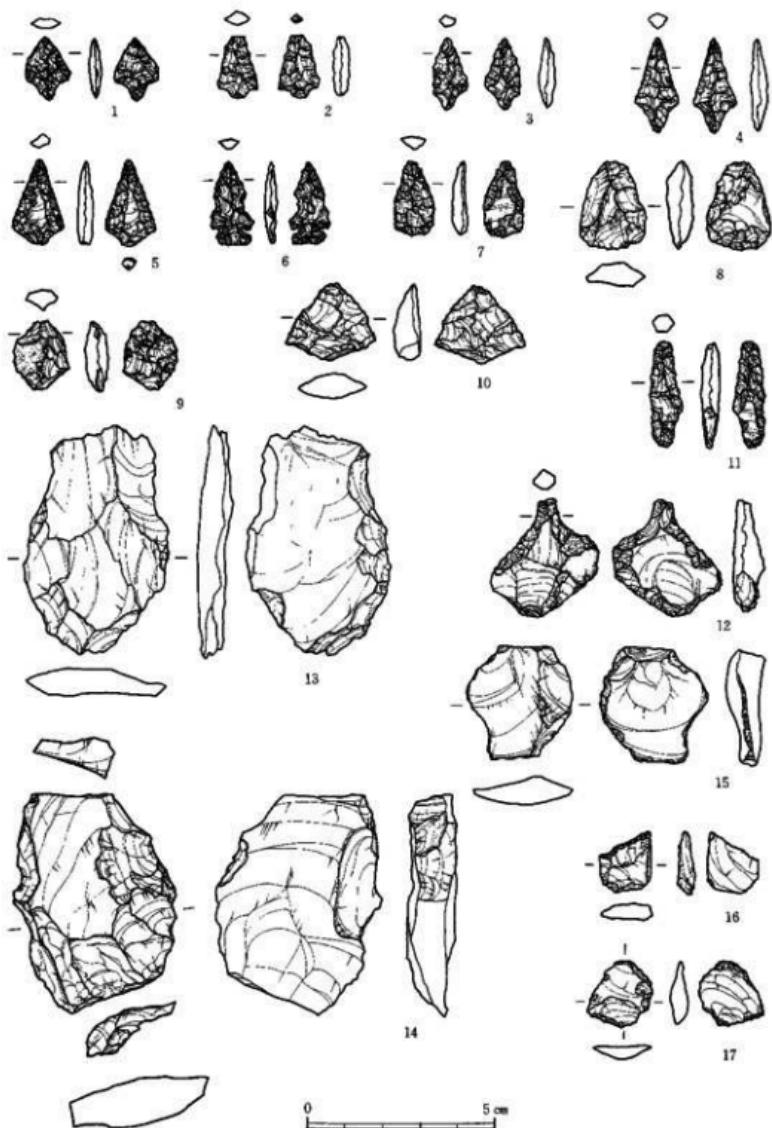
1~11: Yūsei土器、12~22: 土師器

第30図 各地区出土遺物4 (Yūsei土器4・土師器1)



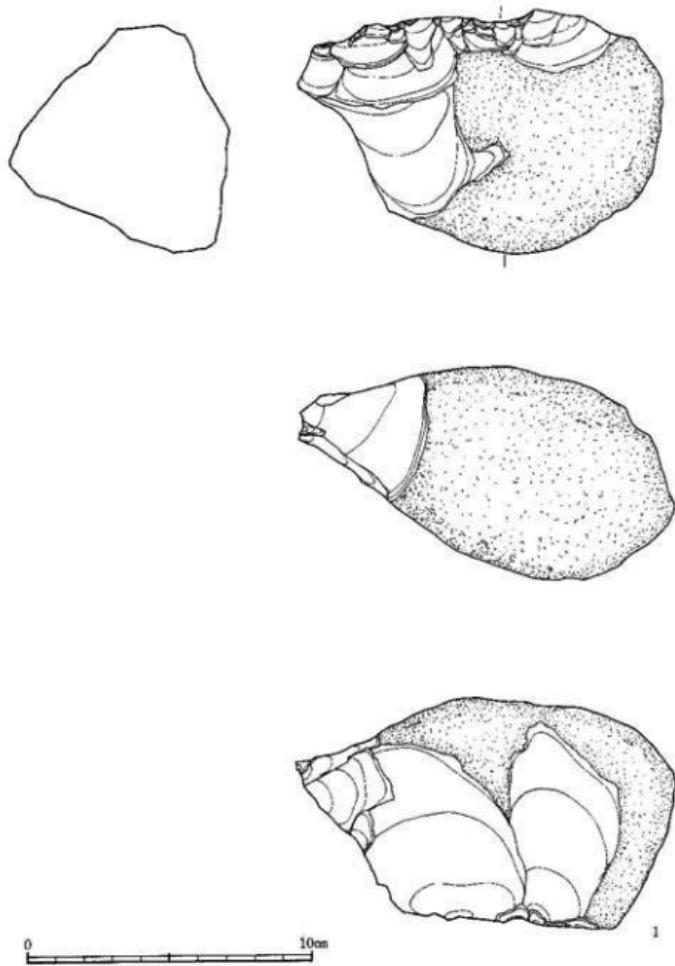
1~14: 土師器、15: 須恵器

第31図 各地区出土遺物5 (土師器2・須恵器)



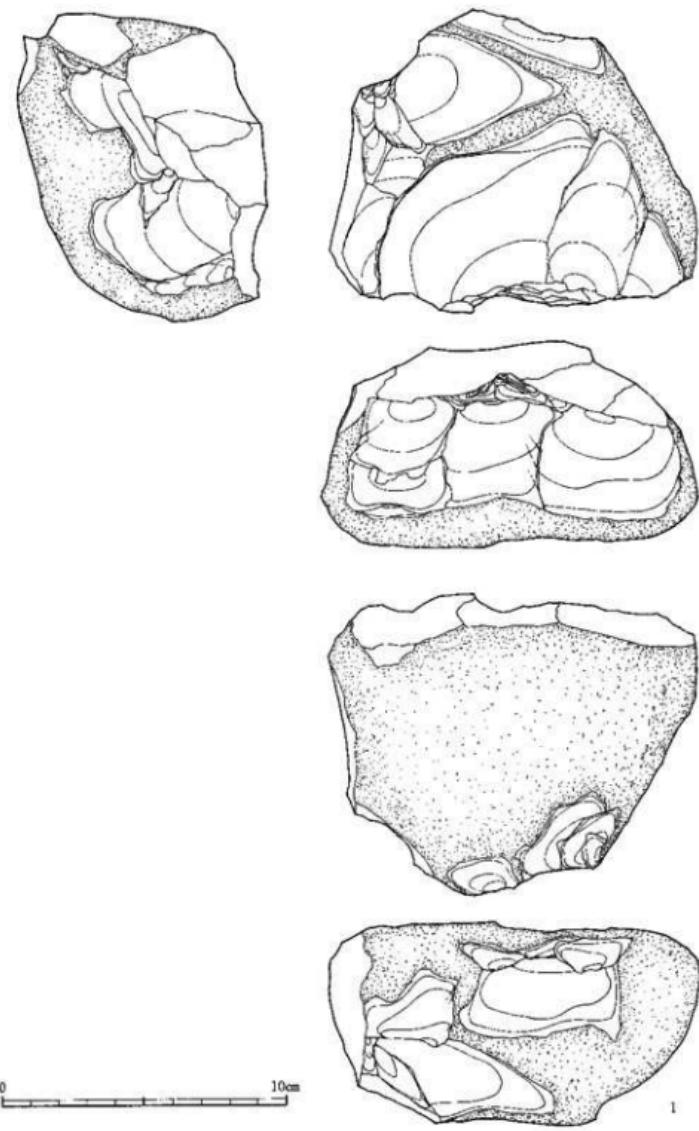
1～9：石鏃、10：ポイント、11・12：ドリル、13・14：スクレイパー、15・16：二次加工のある剝片、17：微細刻離痕を有する剝片

第32図 各地区出土遺物6（石器1）



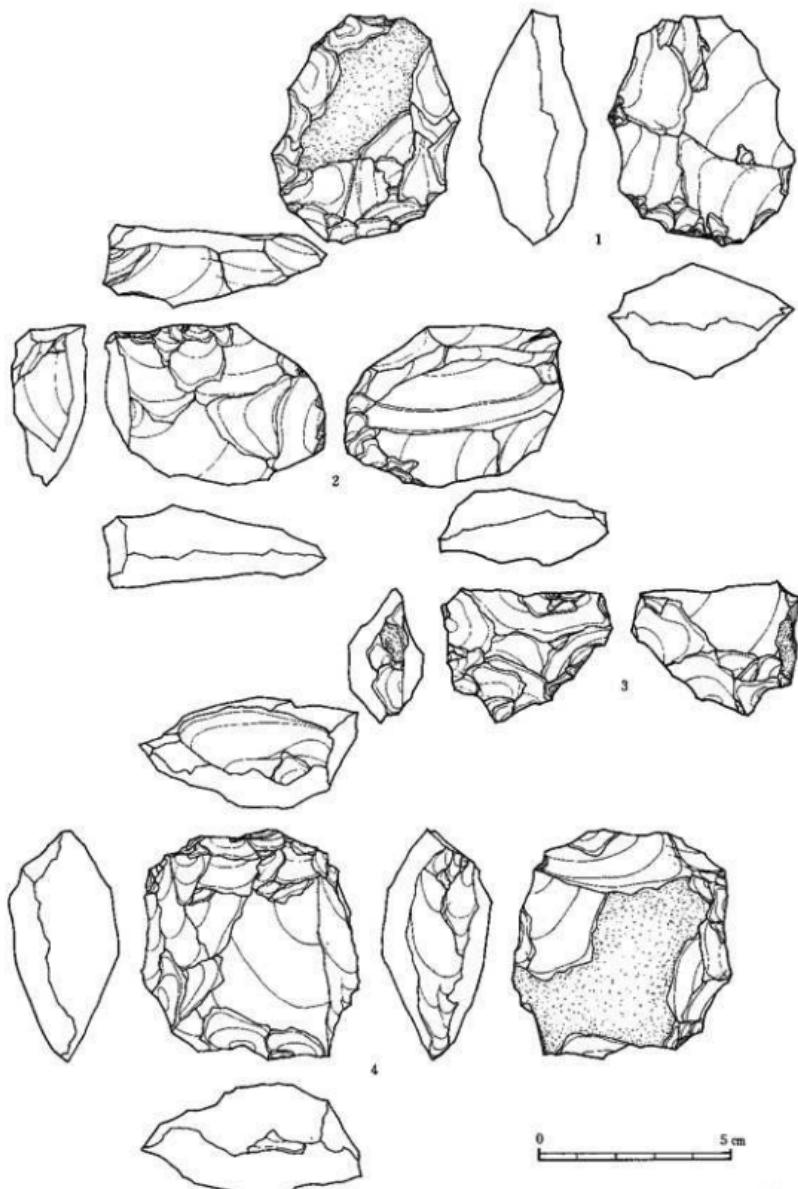
1 : 石核

第33図 各地区出土遺物7（石器2）



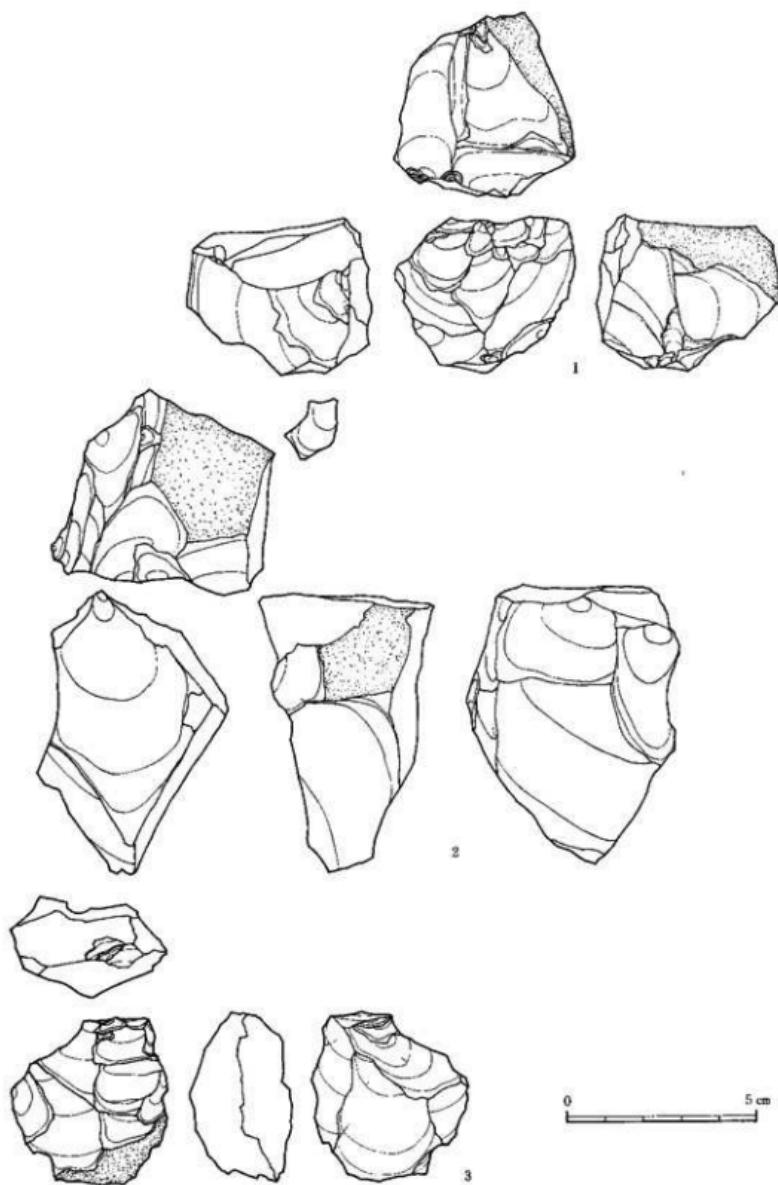
第34図 各地区出土遺物8（石器3）

1：石核



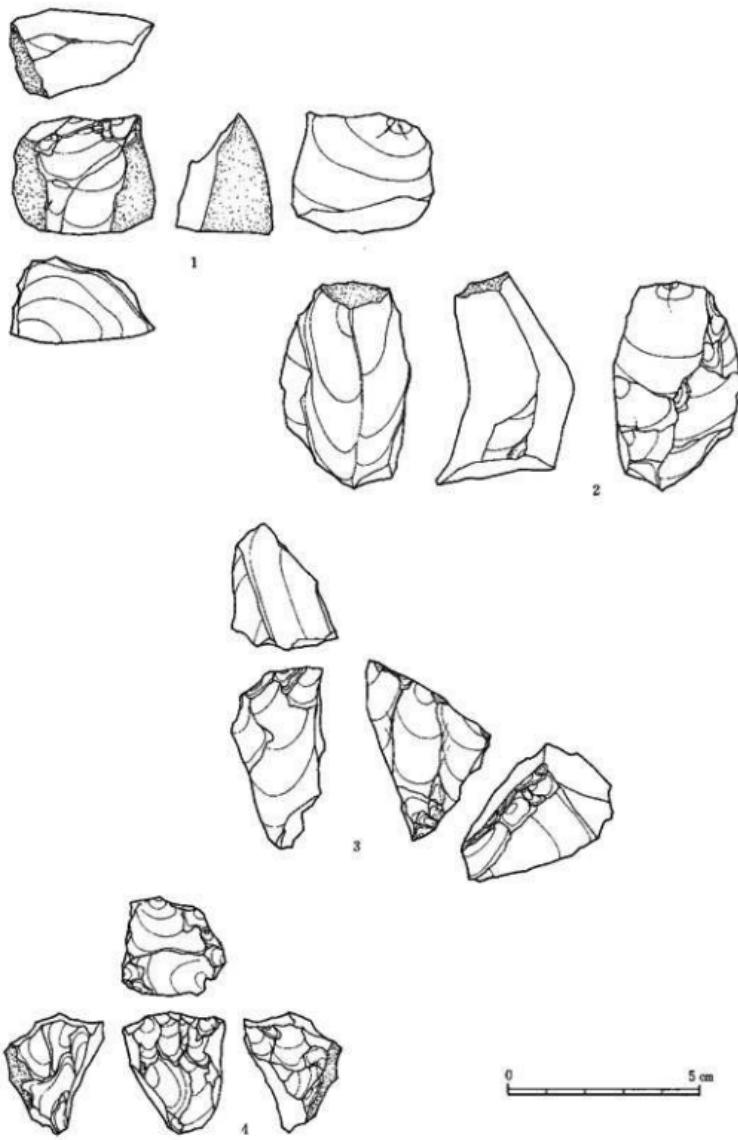
第35図 各地区出土遺物9（石器4）

1～4：石核



1 ~ 3 : 石核

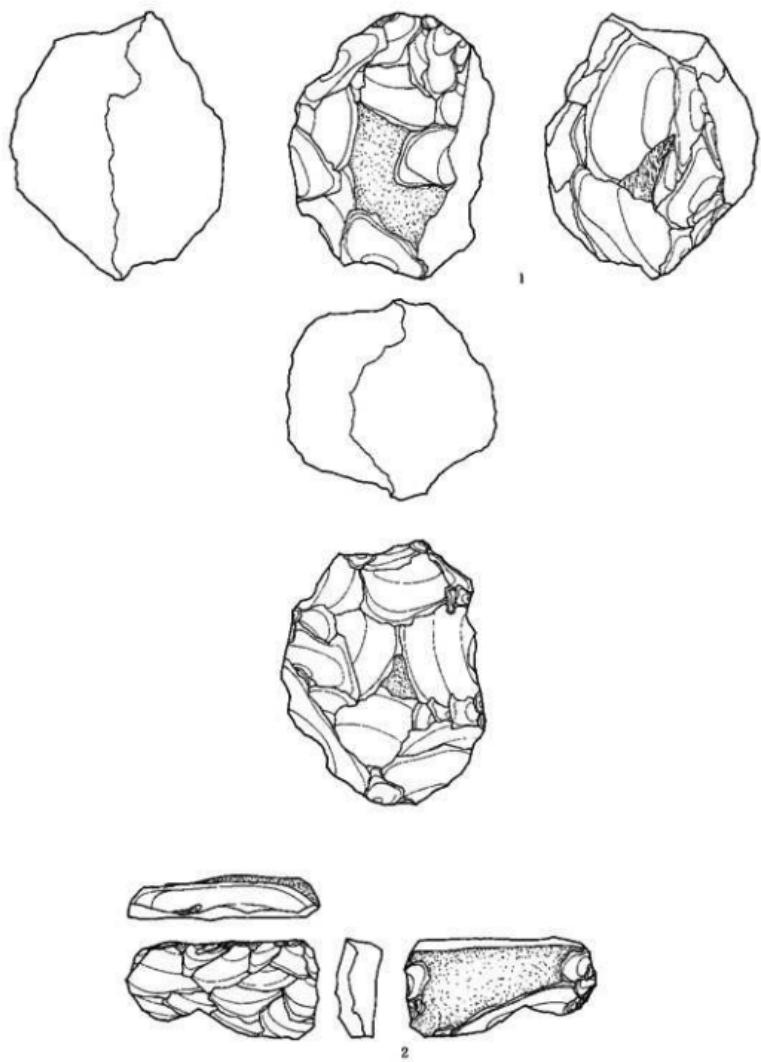
第36図 各地区出土遺物10 (石器5)



1~4:石核

第37図 各地区出土遺物11（石器6）

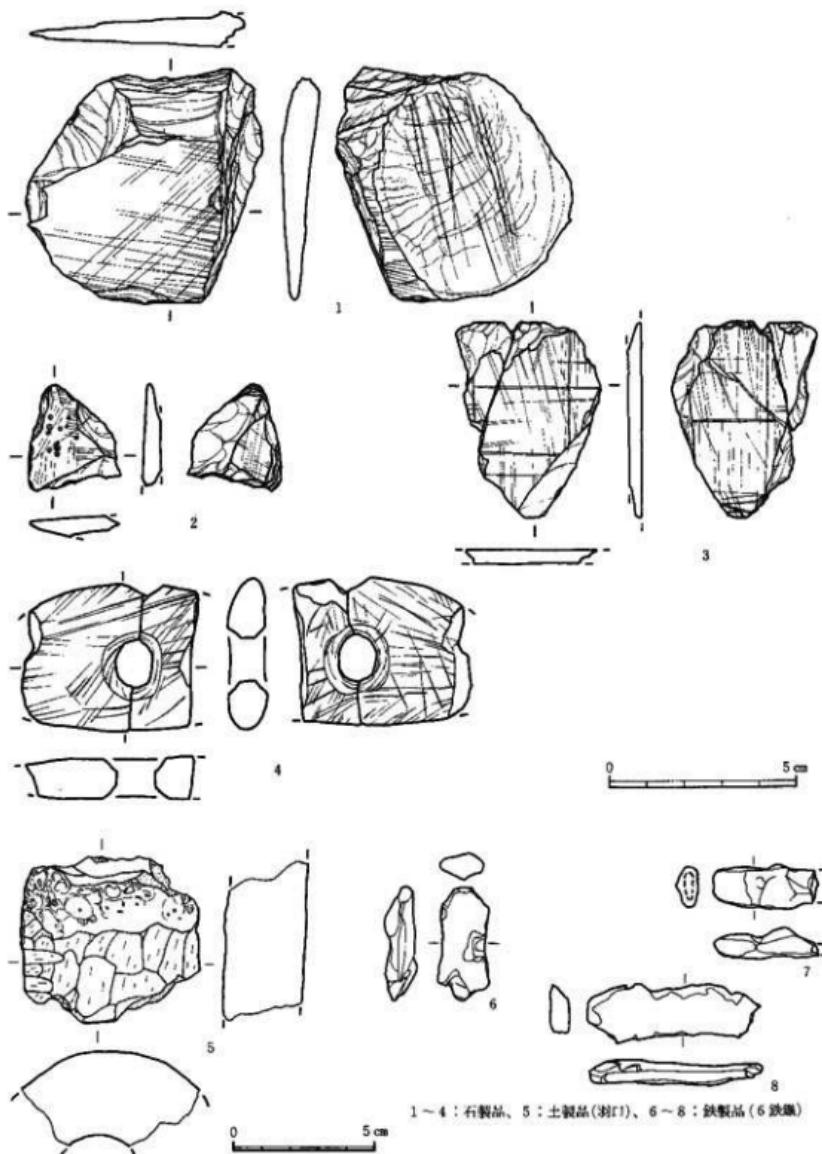
0 5 cm



1～2：石核

0 5 cm

第38図 各地区出土遺物12（石器7）



第39図 各地区出土遺物13（土製品・石製品・鉄製品）

第6表 出土遺物調査表 張生土器

回数 番号	出土 先	時代	記号	種類	部位	文			外	内	面	裏	分類	説明	
						上	下	側							
8-8 住	B-82 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IA	9-7
8-9 住	B-65 瓦?	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IA	10-9
8-10 住	B-26 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IB	10-11
8-11 住	R-4 云	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IC	10-20
8-12 住	B-9 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IB	10-15
8-13 住	B-75 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IV-A	-
8-14 住	B-21 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IV-B	-
8-15 住	B-221 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IV-C	-
8-16 住	W-8 不明	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IV-D	-
8-17 住	P-5 不明	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IV-E	-
8-18 住	P-8 不明	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IV-F	-
8-19 住	P-8 不明	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IV-G	-
8-20 住	B-234 不明	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IV-H	-
14-1 13号土	B-73 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IA	10-1
14-2 12号土	B-37 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IA	-
14-3 2号土	B-65 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IA	-
14-4 3号土	B-24 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IA	-
14-5 12号土	B-25 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IA	-
14-6 12号土	B-31 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IA	-
14-7 13号土	B-57 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IA	-
14-8 9号土	B-44 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IA	-
14-9 4号土	B-49 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IA	-
14-10 14号土	B-260 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IA	-
14-11 8号土	B-46 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IA	-
14-12 12号土	B-50 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IA	-
14-13 12号土	B-37 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IA	-
14-14 8号土	B-253 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IA	-
17-1 6号土	B-253 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IV-A	-
17-2 6号土	B-160 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IV-B	-
17-3 6号土	B-165 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IV-C	-
17-4 6号土	B-166 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IV-D	-
17-5 6号土	B-167 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IV-E	-
17-6 6号土	B-168 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IV-F	-
17-7 6号土	B-169 瓦	新石器		口	上平	施方格文(横)、2本(1面)	-	-	施方格文(横)、2本(1面)	-	1本(1面)	-	-	IV-G	-

器師土

卷之三十一

図版 番号	出土 場所	層位	骨骼 部位	外 観	内 観	顎	法 医 鑑 定		性 別	年 齢	遺 存 状 況
							上頸	下頸			
15-6	C-14 高床	1	骨盤	骨盤	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ	女	小頬片	-
25-6	2分廻	1	C-13 高床	骨盆	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ	女	小頬片	-
25-7	3分廻	1	C-13 骨盆	骨盆	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ	女	小頬片	-
25-8	7分廻	1	C-17 所置	骨盆	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ	女	小頬片	-
26-4	4号	1	C-15 16	骨盆	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ	女	1/1 外因骨膜	-
30-12	A-2	1	B-a C-2	坐骨	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	女	5.7 1/3 内外骨膜薄	13-3
30-13	B-3	1	C-4 前	坐骨	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	女	小頬片	-
30-14	C-1	1	C-18 前	坐骨	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	女	小頬片	-
30-15	A-2	1	B-a C-12	坐骨	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	女	1/5 外因骨膜	-
30-16	A-1	1	B-b C-14	坐骨	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	女	2/3 内外骨膜薄	-
30-17	B-3	1	C-10 前	坐骨	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	女	1/4 外因骨膜	-
30-18	D-1	1	B-b C-17	坐骨	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	女	1/3 外因骨膜	-
30-19	E-1	1	C-16 17	坐骨	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	女	1/4 外因骨膜	-
30-20	B-3	1	B-a C-9 前	坐骨	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	女	1/5 外因骨膜	-
30-21	B-1	1	B-a C-25 前	坐骨	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	女	1/4 外因骨膜	-
30-22	B-3	1	B-a C-6 不明	坐骨	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	口腫 不明	女	1/3 内外骨膜薄	-
31-1	B-2	1	B-a C-30 前	坐骨	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	女	7.7 1/3 外因骨膜薄	-
31-2	D-1	1	B-a C-41 指	手	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	女	1/3 外因骨膜薄	-
31-3	B-2	1	B-a C-12 肩	肩	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	女	1/4 外因骨膜	-
31-4	B-3	1	B-a C-7 高床	肩	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	女	1/3 外因骨膜	-
31-5	R-1	1	B-a C-60 高床	肩	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	女	1/3 外因骨膜	-
31-6	B-2	1	B-a C-64 高床	肩	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	女	1/4 外因骨膜	-
31-7	U-2	1	B-a C-26 高床	肩	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	女	1/3 外因骨膜	-
31-8	B-1	1	B-b C-20 高床	肩	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	女	2/3 外因骨膜	-
31-9	D-1	1	B-a C-39 高床	肩	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	女	1/1 外因骨膜	-
31-10	D-1	1	B-a C-65 高床	肩	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	女	2/3 外因骨膜	-
31-11	D-1	1	B-a C-63 高床	肩	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	女	1/1 外因骨膜	-
31-12	A-2	1	B-b C-66 高床	肩	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	女	4/5 外因骨膜	-
31-13	D-1	1	B-a C-60 高床	肩	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	女	1/1 外因骨膜	-
31-14	E-1	1	B-b C-37 高床	肩	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	口：骨盤 体：ヘラミガギ 耳：骨盤 体：ヘラミガギ	女	4/5 外因骨膜	-

須 惠 器

器物番号	出土場所	層位	骨盤	坐骨	耳	前腕	後腕	頭	胸	腹	腰
31-15	C-2	1	E-1	体	不明	-	-	-	-	-	内 外 骨 膜 薄

陶磁器

弓削鉢	出土地点	所位	地質	性質	時代	产地	施物	外 地	内 地	南 地	海 島	備 考
14-1	C-2	1	1-7	陶石	燒	土	圓孔鉢	中世(14-15C)	灰胎	下漆(灰胎、鐵入青り)、灰胎	灰胎	灰入青り。
14-2	E-3	1	1-11	陶石	燒	土	圓孔鉢	江戸(17C後)	灰胎	色絵(灰胎、輪郭)、灰入青り、灰胎	灰胎	灰入青り。
14-3	D-1	1	1-6	陶石	燒	土	圓孔鉢	江戸(17C前)	灰胎	灰入青り、灰胎	灰胎	灰入青り。
14-4	D-1	1	1-10	陶石	燒	土	圓孔鉢	作天下~高台	灰胎	灰入青り、灰胎	灰胎	灰入青り。
14-5	D-3	1	1-5	陶石	燒	土	圓孔鉢	作天下~高台	灰胎	色絵(灰胎、輪郭)、灰入青り、灰胎	灰胎	灰入青り。
14-6	B-1	1	1-9	陶石	燒	土	圓孔鉢	作天下~高台	灰胎	灰入青り、灰胎	灰胎	灰入青り。
14-7	A-3	1	1-8	陶石	燒	土	圓孔鉢	作天下~高台	灰胎	灰入青り、灰胎	灰胎	灰入青り。
14-8	A-2	1	1-4	陶石	燒	土	圓孔鉢	作天下~高台	灰胎	灰入青り(鉢底)、灰胎	灰胎	灰入青り。
14-9	B-3	1	1-2	陶石	燒	土	圓孔鉢	作天下~高台	灰胎	灰入青り(鉢底)、灰胎	灰胎	灰入青り。
14-10	C-2	1	1-1	陶石	燒	土	圓孔鉢	作天下~高台	灰胎	灰入青り(鉢底)、灰胎	灰胎	灰入青り。
14-11	C-2	1	1-3	陶石	燒	土	圓孔鉢	作天下~高台	灰胎	灰入青り(鉢底)、灰胎	灰胎	灰入青り。

1. 制片石器

固留部分	出土地点	所位	性質	種類	形	法	規	規	規	規	規	規
21-1	6分溝跡	2	石	砾	砾	砾	2.05	×	0.9	0.35	砾	砾
21-2	6号溝跡	3	石	砾	砾	砾	2.3	×	2.4	0.6	砾	砾
21-3	6号溝跡	1	石	砾	砾	砾	2.25	×	1.65	0.55	砾	砾
23-9	1号溝跡	1	石	砾	砾	砾	3.45	×	1.7	0.45	砾	砾
23-10	1号溝跡	2	石	砾	砾	砾	1.65	×	1.25	0.4	砾	砾
33-1	C-2	IIa	石	砾	砾	砾	1.7	×	0.95	0.45	砾	砾
33-2	D-1	IIa	石	砾	砾	砾	1.95	×	0.5	0.45	砾	砾
33-3	D-2	J	石	砾	砾	砾	2.6	×	1.7	0.5	砾	砾
33-4	A-3	IIa	石	砾	砾	砾	3.25	×	1.35	0.45	砾	砾
33-5	A-2	IIa	石	砾	砾	砾	2.3	×	1.05	0.35	砾	砾
33-6	B-3	IIa	石	砾	砾	砾	2.0	×	0.5	0.35	砾	砾
33-7	E-3	IIa	石	砾	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-8	A-1	I	石	砾	砾	砾	1.85	×	1.45	0.35	砾	砾
33-9	C-1	1号住居跡	2	石	砾	砾	3.1	×	1.1	0.75	砾	砾
33-11	E-2	IIa	石	砾	砾	砾	2.8	×	0.85	0.85	砾	砾
33-12	B-2	IIa	石	砾	砾	砾	3.25	×	2.8	0.65	砾	砾
33-13	B-1	IIa	石	砾	砾	砾	4.35	×	3.85	1.7	砾	砾
33-14	K-9	1号土窯	1	石	砾	砾	6.15	×	3.85	1.0	砾	砾
33-15	K-11	1号溝跡	1	石	砾	砾	6.0	×	4.4	1.4	砾	砾
33-16	K-12	1号溝跡	2	石	砾	砾	2.6	×	1.8	0.95	砾	砾
33-17	K-13	1号溝跡	1	石	砾	砾	2.1	×	2.4	0.8	砾	砾
33-18	K-14	1号土窯	1	石	砾	砾	3.05	×	2.85	1.0	砾	砾
33-19	K-15	1号土窯	1	石	砾	砾	1.6	×	1.8	0.4	砾	砾
33-20	K-16	1号土窯	1	石	砾	砾	2.45	×	1.8	0.85	砾	砾
33-21	K-17	1号土窯	1	石	砾	砾	1.8	×	1.7	0.5	砾	砾
33-22	K-18	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-23	K-19	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-24	K-20	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-25	K-21	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-26	K-22	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-27	K-23	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-28	K-24	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-29	K-25	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-30	K-26	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-31	K-27	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-32	K-28	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-33	K-29	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-34	K-30	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-35	K-31	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-36	K-32	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-37	K-33	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-38	K-34	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-39	K-35	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-40	K-36	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-41	K-37	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-42	K-38	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-43	K-39	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-44	K-40	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-45	K-41	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-46	K-42	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-47	K-43	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-48	K-44	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-49	K-45	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-50	K-46	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-51	K-47	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-52	K-48	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-53	K-49	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-54	K-50	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-55	K-51	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-56	K-52	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-57	K-53	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-58	K-54	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-59	K-55	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-60	K-56	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-61	K-57	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-62	K-58	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-63	K-59	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-64	K-60	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-65	K-61	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-66	K-62	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-67	K-63	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-68	K-64	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-69	K-65	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-70	K-66	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-71	K-67	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-72	K-68	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-73	K-69	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-74	K-70	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-75	K-71	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-76	K-72	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-77	K-73	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-78	K-74	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-79	K-75	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-80	K-76	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-81	K-77	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-82	K-78	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-83	K-79	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-84	K-80	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-85	K-81	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-86	K-82	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-87	K-83	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-88	K-84	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-89	K-85	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-90	K-86	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-91	K-87	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-92	K-88	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-93	K-89	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-94	K-90	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-95	K-91	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-96	K-92	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-97	K-93	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-98	K-94	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-99	K-95	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾
33-100	K-96	1号土窯	1	石	砾	砾	2.3	×	1.75	0.75	砾	砾

2. 磚石器

図版番号	出土地点	層位	登錄番号	種類	法 cm	幅 cm	厚 cm	材 料	性 質
15 - 8	14号土塹 A - 2	I a	K - 60	ストーン・リダッチャード ハンマー・ストーン	5.2	× 4.45	× 2.45	細質凝灰岩	-
-	A - 1.5	I	K - 61	ハンマー・ストーン	9.5	× 7.45	× 5.1	砂質凝灰岩	-
-	1号土塹 B - 3	I b	K - 52	ハンマー・ストーン	4.05	× 3.6	× 1.5	石英岩岩	片
-	6号溝跡 E - 3	II b	K - 53	ハンマー・ストーン	4.8	× 4.6	× 3.7	砂質凝灰岩	-
-	6号溝跡 E - 2	II	K - 54	ハンマー・ストーン	4.9	× 3.7	× 4.7	石英岩岩	片
-	1号柱P5 E - 2	II a	K - 55	ハンマー・ストーン	8.6	× 5.2	× 3.7	石英岩岩	片
-	E - 2	II a	K - 56	石墨	7.7	× 6.2	× 5.2	石英岩岩	片
-	B - 2	II a	K - 57	石墨	11.9	× 11.1	× 2.4	石英岩岩	片
-	B - 3	II a	K - 58	石墨	10.6	× 9.1	× 4.7	石英岩岩	片
-	6号溝跡 E - 3	II a	K - 59	ハンマー・ストーン	12.1	× 11.1	× 6.7	石英岩岩	片
-	6号溝跡 E - 2	II	K - 60	ハンマー・ストーン	10.9	× 10.3	× 6.4	石英岩岩	片
-	1号柱柱跡 E - 2	II	K - 61	ハンマー・ストーン	14.1	× 6.85	× 6.1	石英岩岩	破片3点接着

3. 石 横

図版番号	出土地点	層位	登錄番号	種類	法 cm	幅 cm	厚 cm	材 料	分 類
11 - 1	1号土塹 6号溝跡	I	K - 26	6.25 × 6.8 × 2.0	板状	木	2.8	木	B ₁
21 - 3	6号溝跡	II	K - 27	6.45 × 5.9 × 2.7	板状	木	2.7	木	B ₂
21 - 4	6号溝跡	III	K - 28	3.75 × 4.65 × 2.7	板状	木	2.7	木	A ₁
22 - 1	6号溝跡	IV	K - 29	10.85 × 9.9 × 4.95	板状	木	4.95	木	A ₂
23 - 1	6号溝跡	V	K - 30	8.2 × 9.9 × 11.8	板状	木	11.8	木	A ₃
23 - 2	6号溝跡	VI	K - 31	5.95 × 8.7 × 8.7	板状	木	8.7	木	A ₄
24 - 1	6号溝跡	VII	K - 32	7.5 × 4.95 × 5.8	板状	木	5.8	木	B ₁
24 - 2	6号溝跡	VIII	K - 33	5.1 × 4.95 × 5.8	板状	木	5.8	木	B ₂
24 - 3	6号溝跡	IX	K - 34	6.05 × 4.05 × 4.05	板状	木	4.05	木	B ₃
23 - 1	E - 1	II b	K - 35	8.85 × 13.1 × 7.6	板状	木	7.6	木	A ₅
34 - 1	E - 2	II a	K - 36	6.3 × 12.7 × 10.75	板状	木	10.75	木	B ₄
35 - 1	A - 2	II a	K - 37	6.15 × 4.8 × 2.8	板状	木	2.8	木	B ₅
35 - 2	A - 2	II a	K - 38	4.2 × 5.95 × 2.2	板状	木	2.2	木	B ₆
35 - 3	A - 2	II a	K - 39	3.7 × 4.3 × 2.05	板状	木	2.05	木	B ₇
35 - 4	B - 2	II a	K - 40	6.2 × 5.7 × 3.1	板状	木	3.1	木	B ₈
36 - 1	D - 3	II b	K - 41	4.15 × 4.9 × 4.6	板状	木	4.6	木	A ₁
36 - 2	B - 2	II b	K - 42	7.6 × 5.0 × 4.9	板状	木	4.9	木	B ₇
36 - 3	D - 3	II	K - 43	4.65 × 4.3 × 2.65	板状	木	2.65	木	B ₁
37 - 1	A - 3	II a	K - 44	3.2 × 3.8 × 2.55	板状	木	2.55	木	B ₁
37 - 2	B - 2	II a	K - 45	6.7 × 5.1 × 3.1	板状	木	3.1	木	B ₁
37 - 3	E - 2	II a	K - 46	4.7 × 2.4 × 3.0	板状	木	3.0	木	B ₁
37 - 4	A - 2	II	K - 47	3.2 × 2.55 × 2.3	板状	木	2.3	木	A ₁
38 - 1	E - 2	II a	K - 48	5.25 × 7.15 × 5.45	板状	木	5.45	木	A ₂
38 - 2	A - 2	II	K - 49	2.7 × 5.05 × 1.05	板状	木	1.05	木	B ₁

石 製 品

試験番号	所土地点	部位	金持部分	種類	法量cm	石質	特	金	金	可判区版
II-2	1号土壁	I	K-62	不明	-	9	13 青色・滑利堅硬岩	欠損品。形状は長方形で、先端を尖らせる。表面の一方が丸味をもつ長方形。小山頂と長崎山頭の2ヶ所に見 13-25	13-25	
9-2	竹内井	2	K-63	斜形不規則造石	-	19	5 滑石	欠損品。形状は10-25cmの空気眼、表面は滑利、表面に凹凸があり、全周に隙間。	15-22	
9-3	任田路	炮塹	K-64	不明	-	10	通水孔	欠損品。形状は円柱形。中央に貫通孔（径10mm前後？）、表面と側面滑利。孔間に溝となり、表面 留め。	15-22	
25-13	竹内井	1	K-65	斜形不規則造石	57	16	3 はしたした細粒岩	は25cm、斜面形、表面斜面下、左側斜面に貫通孔（径2mm）。全周に隙間。	13-25	
25-14	1号土壁	筒井	K-66	6角	-	—	36 褐色岩	欠損品。表面と側面滑利+隙間あり（表面・全周、裏面・一部半分）。	—	
29-1	D-3	B	K-67	6角	-	61	10 スレート	欠損品。表面斜面に隙間。隙間は2箇所。	13-27	
29-2	F-2	B	K-68	不規	-	6	スレート	欠損品。表面滑利。	—	
29-3	A-1	I	K-69	6角	-	4	スレート	欠損品。表面滑利。	13-26	
30-4	C-2	B	K-70	不明	-	42	10 シラミ上野	欠損品。形状不定形。中央に窓孔の貫通孔（10×15mm）。表面と側面滑利。孔間に溝となり、全周に隙間。	13-24	

土 製 品

試験番号	所土地点	部位	金持部分	種類	法量cm	外・内・底型	特	金	金
29-5	A-2	B	P-1	柱	10.8 外径：7.2 内径：7.1 高さ：7.2 ヘタケダリ	四本脚高脚柱状。先端に窓孔の側面が認められる。			

試験番号	所土地点	部位	金持部分	種類	法量cm	外・内・底型	特	金	金
9-4	作風路	1	N-1	万子	-	13	3 欠損品。万子・素朴な形。平底。平底？。底付？。表面に肥厚（幅10mm×13mm）。表面を多くむき、		
9-5	任田路	1	N-5	不規	-	10	5 欠損品。少半円形の複合形。底付が複数片付いて複雑な複合形状である。		
29-6	C-3	B	N-3	鉢	40	17	- 13.5cm形。輪郭部粗大。縫合は複数点で瓦形形。底付が複数点で瓦形形。底付が複数点で瓦形形。		
29-7	D-3	B	N-2	万子？	-	10	3 欠損品。万子。平底。平底？。底付が複数点で瓦形形。		
30-6	B-2	T	N-4	円錐	-	19	7 欠損品。中央に窓孔を有す。		

第IV章　まとめと考察

1. 出土遺物について

(1) 弥生土器

分類

土師器に次いで出土量が多く、1,992点が出土した。全て破片資料で、全体の器形が復元されたものはわずか1点のみである。これらは文様・施文具により、以下のI～V類に分類される。

I類：磨消繩文のもの（第17図1～6・10～18、18図4～6・8～12、19図1・2他）

一本引きの沈線間を磨消繩文手法、充填繩文手法による磨消繩文を行うものである。充填繩文手法のものが大部分を占める。器種には壺、鉢、高杯、蓋、甕？がある。沈線には細いものが多いが、やや太いものもある。文様は2本単位の平行沈線によって描くのを主体とするが、これに1本単位の沈線が加わるもの（第17図10、18図4等）、また希に3本単位の平行沈線のもの（第17図18）がある。地文には斜行繩文LR、付加条繩文LR+R（第1種）があり、充填されるものには、斜行繩文LR、付加条繩文LR+R（第1種）、擬似繩文がある。斜行繩文、付加条繩文には撚りが細いものが多い。

壺：全て口縁～体部上半資料である。器形には肩が張る大型のもの、口縁部に二又の山形突起が付き、内面が強く外傾するもの（第17図1）、短い口頭部が内寄するもの（鉢の可能性もある）がある。文様は口縁部から体部上半に施文される。文様には数段重ねの横位直線文、（亜）方形文、三角文、同心円文がある。この他、口唇部、口縁部内面に繩文が回転施文されるものもある。

鉢：全て口縁～体部にかけての資料である。器形には口縁部から体部にかけて直線的なもの、やや内寄するもの、体部上半が内寄し、口縁部が強く外へ屈折するもの（第27図9）がある。口縁部には小波状や山形突起が付くものが多い。文様は口縁部から体部上半に連続し施文される。文様には連弧文（連続山形文状のものも含む）、横位直線文、長方形文があり、これらは数段に重ねられたり、上下で半単位ずらしたりしている。連弧文には文様の交点に継位短線が1～2本付く場合がある。口縁部内面には1～3条の横位直線が引かれるものが多く、波状頂部や突起部分では1～2本の継位短線が加わるものがある。この他、口唇部に繩文が回転施文されるものがある。

高杯：壺部資料には鉢と同様に、口縁部から体部にかけてやや内寄するものがある（第18図4）。口縁部は波状口縁で、施文部位も内外面とも鉢と同様である。外面の文様は鉢と同様な連弧文、内面の文様は一条の横位直線文と波状頂部からの1本の継位短線から成る。脚部資料には器形の判るものがない。文様には連弧文がある。

蓋：口縁部の器形には、直線的なもの、やや外反するもの、やや内寄するものがあり、内には波状口縁のものもある。摘部の器形は、強く外反し短い。文様は口縁部、口縁部から体部、摘部天井部に施文される。文様には横位直線文、鉢と同様な連弧文、円文がある。口縁部内面には横位直線文が1条引かれるものがある。

甕？：体部上半が撫で肩状で、頸部は外傾し、口縁部がやや外反する器形のものである（第19図1・2）。広口巻の可能性もあるが、口径が20cm以上と推定されることより、一応、甕？とした。文様は口縁部から体部上半に横位直線文が数段重ねられる。口縁部内面にも横位直線文を1条めぐらしている。口唇部には繩文が回転施文されている。両者とも波状口縁となる可能性もある。

II類：1本引き沈線文のもの（第18図1～3・7・13、27図6・7・11・13～17他）

1本引きの沈線のみで文様が構成されるものである。沈線の種類によって以下のA・Bに細分される。

A：I類と同様な沈線をもつもの。器種には壺、鉢、高环、蓋がある。横位直線文を除く文様は、I類同様2本単位の平行沈線によって描くのを主体とし、これに1本単位の沈線が加わるもの（第18図7）、3本単位の平行沈線のもの（第18図1）がある。

壺：全て口縁～体部上半資料である。短い口径部が内寄する器形のものがあるが、鉢になる可能性もある。文様は口縁部、体部上半に施文される。文様には4～5条の横位直線文、重方彌文がある。

鉢：全て口縁～体部資料である。器形には口縁部から体部にかけてやや内寄するもの（第18図1）、体部上半が内寄し、口縁部が強く外へ屈折するもの（第18図3）がある。前者には口縁部に山形突起が付き、口縁部から体部上半にかけて変形工字文が施文される。後者には口縁部、体部上半に各5条の横位直線文が、体部以下には横位LR繩文 or LR+R付加条繩文（第1種）が施文される。いずれも口縁部内面には、2条の横位直線文が引かれている。

高环：环部資料には口縁部がやや内寄し、山形突起が付くものがある。文様は連弧文で、口縁部内面にも横位直線文が1条めぐる。脚部資料には据部があまり広がらない器形のもの（第18図7）がある。文様は脚下半部に連弧文（上下半单位ずらし）が施文される。

蓋：口縁部の器形には、直線的なもの、内寄するものがある。摘部の器形は、ゆるやかに外反し、長い。文様は口縁部、口縁部から体部、摘部側面に施文される。文様には横位直線文、連弧文がある。

B：I類、IIA類の沈線に比べ太く、浅いもの。粗雑な感じのする沈線のもので、内寄する口縁部資料が1点のみである（第27図17）。蓋あるいは広口巻状の口径を有する。文様は横位直線文が2条めぐる。

Ⅲ類：多条平行沈線文のもの（第27図18～23、28図1～19他）

半截竹管状、櫛状施文具により2～4本の沈線が、同時に施文されるものである。これらは同時施文される沈線数によって、さらにA～Cに分類される。

A：半截竹管状施文具により2本の沈線が同時に施文されるもの。沈線間には、広いものの（2.5mm）と狭いもの（1mm）が認められる。器種には壺、高坏、甕がある。

壺：口縁部が塊状に開くもの（第19図3）、頸部から口縁部にかけてゆるやかに開くもの（第14図1）がある。口縁部資料は全て単純口縁で、口唇部に体部地文と同じものが回転施文されるものがある。文様は体部上半以上に施文される。文様には重方形文、重菱形文、重山形文、連弧文、波状文がある。これらの上下、左右には、文様区画線的な役割を演じる横位直線文、縱位直線文（第27図18）が引かれるものもある。頸部と体部の境には、断面三角形状の横位突帯がめぐるもの（第27図22）がある。体部下半にはLR繩文、LR+R（第1種）付加条繩文が回転施文され、上端に綾絹文をめぐらすものもある。

高坏：坏部下半が脚部のひらきとほぼ同様な器形のもので、文様は坏部にのみ施文される（第28図10）。坏部には斜位直線が数条引かれているが、文様は不明である。坏部と脚部の境には、断面三角状の横位突帯が1条めぐる。

甕：全て口縁～体部上半資料である。頸部から口縁部まで直線的に外傾する器形で、口縁部は全て単純口縁である（第28図11・13・15）。外面文様には重山形文、連弧文、波状文があり、文様の上に横位直線文をめぐらすもの（第28図13）もある。内面文様は全て口縁部に限られ、連弧文、波状文がある。

B：櫛状施文具により3本の沈線が同時に施文されるもの。沈線間には、広いもの（2.5mm）と狭いもの（1mm）が認められる。器種には壺・鉢・甕がある。

壺：器形は不明で、口縁部資料はない。文様は体部上半に施文される。文様には重山形文、連弧文がある。これらの上には横位直線文（第28図1～3）、左右には縱位直線文（第14図4）が引かれるものもある。また、頸部と体部の境に横位突帯が1条めぐるものがある（第8図10）。

鉢：器形は不明で、口縁部資料はない。文様には連弧文、波状文がある。

甕：全て口縁～体部上半資料である。口縁部内面が強く外傾するもの（第8図12）、体部と頸部の境で強く屈折するもの（第28図17）がある。口縁部は全て単純口縁である。外面文様には重山形文、連弧文がある。文様の上下、部位の境には横位直線文が引かれるものがある（第14図5）。内面文様は全て口縁部に限られ、連弧文、波状文がある。

C：櫛状施文具により4本の沈線が同時に施文されるもの。沈線間には、広いもの（2mm）と狭いもの（0.5mm）が認められる。器種には壺・鉢・甕がある。

壺：器形は不明で、口縁部資料はない。文様には体部上半に重山形文、連弧文が、体部下半

にはLR縄文が回転施文されている。頭部と体部の境には横位突帯が一条めぐるものもある。

鉢：器形は不明で、口縁部資料はない。文様には波状文がある。

壺：頭部から口縁部まで直線的に外傾するものがある（第26図1）。文様は重山形文で、上端に横位直線文をめぐらしている。

IV類：刺突文のもの（第28図20）

口縁部資料1点のみである。広口壺か壺になると思われる。有段口縁で、地文施文の後、中央部に連続する刺突を加え、その中間部分の下端に連続する刻み状の押圧を加えている。口唇部には地文と同様なLR+R（第1種）付加条縄文が回転施文されている。内面の調整は粗い。

V類：地文のみのもの（第19図5～11、20図1～4、28図21～25、29図1～8他）

口縁部から体部上端が無文で、これ以下が地文のみの粗製の壺である。口縁部が強く、あるいは緩やかに外反し、体部上半で一度膨らむ器形を呈す。口唇部には地文と同一のものが回転施文されるものが多く、口縁部には横ナデが明瞭に残る。多くのものが外面に炭化物を付着する。これらは地文区画文の有無により、以下のA・Bに分類される。

A：口縁部と体部の境、あるいは体部上端に地文区画文をもつもの。これらは区画文の種類により、さらにa・b・c・d・eに細分される。

a：押し引き連続刺突のもの。これらは押し引き刺突面が長く尾を引くもの（第28図21）と尾を引かないもの（第14図7）があり、2段になるものもある。地文には斜行縄文LR、付加条縄文LR+R（第1種）がある。b：斜位連続刺突のもの。施文具には棒状のもの（第19図7～9）、竹管状のもの（第14図8）、地文原体（擬似縄文）を折り曲げたもの（第19図10）がある。刺突の方向は右から左が一般的である。地文には斜行縄文LR、付加条縄文LR+R（第1種）、擬似縄文がある。c：垂直連続刺突のもの。施文具には棒状のもの（第28図25）、竹管状のもの（第19図5）がある。地文には付加条縄文LR+R（2R）（第1種）がある。d：横位沈線のもの。1条のもの（第29図1）、2条のもの（第20図1）がある。地文には斜行縄文LR・RL、擬似縄文がある。e：綾絡縄文のもの。1段のもの（第14図10）、2段のもの（第29図4）がある。地文には斜行縄文LR、付加条縄文LR+R（2R）（第1種）がある。

B：体部上端に文様区画文をもたないもの。地文には斜行縄文LR、付加条縄文LR+R（第1種）、擬似縄文（第20図3・4）がある。

その他のもの

I～V類のいずれに所属するか不明なもの、あるいはそれ以外の可能性のあるものである。口縁部資料：いずれも単純口縁のもので、有段口縁のものはない。地文をもつものと、無文のものがある。地文をもつものには弦、鉢、蓋などの器種がある。壺（第29図10）、鉢（第29図12）には山形突起をもつものがある。無文のものには壺、蓋などがある。壺には穿孔のあるも

の（第8図15）がある。

体部資料：斜行縄文、付加条縄文、撲糸文、擬似縄文のものがある。斜行縄文はLRが圧倒的に多く、数点RLのものが認められる。付加条縄文は第1種の他、第2種の可能性があるもの（第30図2・3）も數例ある。LR+Rが最も多く、LR+2R、LR+2rのものもある。また、軸になる縄が3本撲りのものや、軸の縄に付加する縄を埋め込むものもあり、器面に表現される縄文はかなりバラエティーに富んでいる。撲糸文は全てRである。擬似縄文には、条の内に剛毛状の圧痕をもつものと、もたないもの（写真図版11-14）がある。尚、同一器面上に斜行縄文（or付加条縄文）と擬似縄文の両者が回転施文されるもの（第30図9）もある。以上の地文の内、撲糸文は少量で、擬似縄文も多くはない。大多数を占めるのが付加条縄文と斜行縄文である。両者の比は約5:3で、付加条縄文の方が多い。

脚部・底部資料：脚部資料には第14図14、第20図17がある。前者は小形の低い台状の脚部で、上端に縦位LR縄文がみられる。底部には下端が突出するものと突出しないものの両者があり、それぞれ体部下端まで地文が付くものと下端が廢されるものがある。底部外面は無文（研磨）の他、木葉痕（第20図16）、織物痕（第30図11）、網代痕（第20図15）が認められる。

所属時期

以上のように出土土器はI～V類に分類された。次に各群の編年的位置づけを考えたい。

I類土器は、壺・鉢・高环・蓋・甕？の各器種から成る。器面には充填縄文手法を主体とし、わずかに磨消縄文手法を含む文様が描かれる。文様には連弧文（連続山形文状も含む）、（重）方形文、横位直線文、三角文、（同心）円文があり、連弧文、方形文、横位直線文には数段、数条重ねたり、これを上下で半单位ずらすものがある。これら文様に使用される沈線は、細いものを主体とする。地文、充填されるものには斜行縄文、付加条縄文、擬似縄文がある。以上のような特徴よりI類土器は、弥生時代中期樹形開式に比定される。ただし、後続形式とされる円田式にも、充填縄文手法のものがわずかに残っており、I類土器全てを樹形開式に位置づけることはできない。^{註1}

II A類土器は、壺・鉢・高环・蓋の各器種から成る。磨消縄文手法、充填縄文手法が加えられない沈線文のみのものである。文様には変形丁字文、連弧文、横位直線文がある。文様の腹間はI類と同様であるが、横位直線文はより多条化する。これら文様に使用される沈線もI類と同様で、細いものを主体とする。文様の下には（体部下半が中心）、斜行縄文、付加条縄文が回転施文されるものもある。以上のような特徴よりII A類土器は、円田式に比定される。ただし、I類とは逆に、先行形式とされる樹形開式の内にも、沈線文のみのものも含まれており、II A類土器の一部は樹形開式に包括される可能性もある。

II B類土器は、II A類の沈線に比べ広く浅いものである。横位直線文の甕？が1点出土したのみである。II A類と同一時期の可能性もあるが、一応、比定形式は不明としておきたい。

III類土器は、同時施文具による平行沈線文のものである。同時施文の沈線数により、A～Cに細分したが、各器種間の器形、文様には大きな差は認められない。従ってこれらを一括し、論じたい。甕・鉢・高环・甕の各器種から成る。主要文様には、数重、数段にわたって重ね合せられる重方形文、重菱形文、重山形文、連弧文、波状文がある。この他に甕や高环の体部上端には、断面三角形状の横位突帯がめぐる。これらの文様に使用される沈線は、鋭利な微細なものである。甕、甕の体部下半には斜行繩文、付加条繩文が回転施文され、上端に綾络文がめぐるものがある。以上のような特徴よりIII類土器は、後期十三塚式に比定されよう。ただし、^{註2}十三塚式には四本一描のものは含まれておらず、一応III C類については、十三塚式以降のものとして保留しておきたい。

IV類土器は、刺突と押圧の連続によって交互刺突状の文様が作り出されている。また、施文部位の口縁部が有段を呈することより、後期天王山類似資料と考えられる。

V類は粗製の甕で、2cm前後の口縁部が強くあるいは緩やかに外反し、体部上半で一度膨らむ器形を呈する。口縁部には横ナデが明瞭に認められる。これらは体部上端の地文区画文の有無によりA・Bに2分され、さらに地文区画文はその種類によりa～eに細分された。このような器形の甕は樹形開式の前形式から十三塚式まで認められる。しかし口縁部に横ナデが明瞭^{註3}に認められるのは樹形開式以降とされている。従ってV類土器は、樹形開式、円田式、十三塚式のいずれかに所属するものである。これら各形式内に於けるVA a～e・B類土器の有無により、樹形開式-A a・c・d、樹形開式～円田式-A b、樹形開式～十三塚式-A e・Bとなる。ただし、B類の内、地文が擬似繩文のものは樹形開式～円田式に限られる。

以上I～V類土器の比定形式を要約すると、以下のようになる。

樹形開式：I類、II A類の一部、V類

十三塚式：III A類、III B類、VAe類、

円田式：I類の一部、II A類、VAb類、

VBe類

VAe類、VB類

天王山式：IV類

I類、II A類は樹形開式、円田式に比定されるが、両者ともその内に一部円田式、樹形開式を含む可能性があるものとした。この両類が遺構内でどのような出土状況を示すかみてみたい。6号溝跡は、堆積土1層中にはIII類土器、土師器を含むが、堆積土2層以下にはI・II A・V類土器しか含まない。I・II A類の堆積土2層以下の比は約3:1（基本層位も含めた全出土量では約5:3）で、I類が主体的であるが、II A類の出土量も比較的多い。このような数量的な関係より、I類は樹形開式期でも新しい段階のもの、すなわち円田式とオーバーラップする時期

のものとして把えられることも可能である。ただし、この溝跡が樹形圓式期から円田式期までの間継続していたことも有り得るし、また、磨消繩文（Ⅰ類）=樹形圓式、非磨消繩文（ⅡA類）=円田式と全て単純に分離できない面もある。

現在、宮城県内の樹形圓式、円田式の内、円田式に関しては、その各器種毎の構成が明確であるとは言い難い。また、両形式のものが、層位的、遺構の重複関係の上で分離された報告例もない。今回、6号溝跡内より出土した両形式のものが、一時期の所産のものなのか、それとも2時期に渡るものなのかは、今後のこの時期の良好な調査例に委ねたい。

註記

- 須藤 伸 「東北地方の初期弥生土器」『考古学雑誌』68-3 1983
- 伊東信郎 「弥生式文化時代」『宮城県史』1 1957
- 須藤 伸 「東北地方における弥生時代農耕社会の成立と發展」『宮城の研究』第1巻 考古学篇 1984

第7表 弥生土器類別資料出土数量表

分類	T	ⅢA	ⅣorⅤA	ⅤB	ⅥA	ⅦB	ⅧC	Ⅸ	ⅩAa	ⅩAb	ⅩAc	ⅩAd	ⅩAc	ⅩB	合計
6号溝跡 1号	5	2	2	—	5	5	—	—	—	4	—	—	1	—	24
2号	14	5	9	—	—	—	—	—	3	3	—	—	1	35	
3号	29	9	15	—	—	—	—	—	4	—	1	1	4	64	
返面	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
13号土坑 1号	—	—	—	—	2	—	—	—	1	—	—	—	—	—	3
14号土坑 1号	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0
底面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1
その他の遺物	7	3	8	—	24	20	14	—	—	1	3	1	4	2	87
新規発見	21	27	36	1	39	30	6	1	2	7	1	3	12	10	217
合計	76	46	70	1	70	75	20	1	4	19	7	7	19	17	432

(2) 土師器

分類

出土量が最も多いが、破片資料が大部分である。この内59点が図化されたが、多くは部分的なもので、全体の器形に及ぶものは少ない。器種には壺、甕、瓶、环、高环がある。全てロクロは使用されていない。ここでは図化出来た資料に基づき、その器形的特徴により分類を行った。

壺：II縁部の形態、器形の大小によりT～Ⅲ類に分類される。

I類：複合口縁で大型のもの。(第10図1他)

全て口縁部から頸部にかけての資料で、小破片からの復元であるが3点図化出来た。II縁部・頸部の外傾がほぼ同じで、内面の境（接合面）がやや凹状となる。内外面の調整は磨滅の為不明瞭であるが、口縁部内外面ともヨコナデと思われる。

II類：単純口縁で大型のもの。(第10図2他)

図化できたものは2点であるが、その内1点は口頭部資料である。頭部が直立気味に外傾し、外反する短い口縁部をもつものである。体部はやや綫長な球状を呈し、最大径をほぼ中央に持つ。外面調整はII頸部がヨコナデの後ヘラミガキ（頸部のみ）、体部は刷毛目の後ヘラミ

ガキである。内面調整は口縁部がヨコナデ（口縁部）、刷毛目（頸部）の後ヘラミガキ、体部はヘラナデ、頸部と体部の境にはナデツケが認められる。この他、頸部外面にも刷毛目が及ぶものもある。

III類：単純口縁で小形のもの。A・Bに細分される。

A：口縁部と頸部の境に段を有し、口縁部がかるく外反するもの。（第7図2）

B：頸部から口縁部がかるく内弯しながら外傾するもの。（第25図6他）

いずれも口頭部資料のみで、体部以下は不明である。Aは1点、Bは3点図化出来た。外面調整はA・Bとも口縁部がヨコナデ、頸部はヘラミガキである。内面調整はA・Bとも口縁部がヨコナデ、頸部は（ヘラ）ナデで、Bには頸部ヘラミガキのものもある。

体部資料には球形のもの、楕円形のもの、算盤玉形のものなどある。これらの外面調整はヘラケズリ（下端）、ヘラミガキである。内面調整はナデツケ、（ヘラ）ナデである。

観：口縁部の形態によりI・IIに分類される。

I類：口縁部が強く外反し、口縁部の短いもの。10点図化されたが、多くは口縁部から体部上半にかけての資料である。体部の最大径の位置によりA・Bに細分される。

A：最大径をほぼ中央部に持つ、やや綫長な球状のもの。（第31図1他）

B：最大径を下半に持つ、撫で肩、下膨れ状のもの。（第7図9他）

内外面調整はA・Bとも同様である。外面調整は口縁部がヨコナデ、体部がヘラナデ、ヘラケズリ（下半）の後、II縁、体部にはヘラミガキが加えられる。内面調整は口縁部がヨコナデの後ヘラミガキ、体部～底部はヘラナデである。口縁部と頸部の境（内面or外面）にはナデツケが認められるものもある。

II類：口縁部が外反し、口縁部の長いもの。（第7図8）

口縁部から体部上端にかけての資料が1点図化されたのみである。II径がI類に比して小さく、壺の可能性もある。内外面とも磨滅しているが、口縁部内外にヨコナデ、体部内外にヘラナデの調整が残る。

観：口縁部から体部上端の資料と、体部下端から底部の資料が各1点出土した。いずれも小破片からの図化で、径、傾きには明確さを欠く。前者は複合口縁のもので、口縁部から体部が内弯する器形を呈し、最大径を口縁部に持つ。内外面とも磨滅しているが、II縁部内外に刷毛目調整が認められる（第31図2）。後者は、底部の中央に一孔を持つ單孔式のものである。外面調整はヘラミガキ、内面調整はヘラナデの後ヘラミガキである（第31図3）

坏：口縁部、体部の形態によりI・IIに分類される。

I類：体部から口縁部まで丸味をもって立ち上るもの。（第8図1）

図化資料は1点である。口縁部はほぼ直立状で、最大径を口縁部に持つ。底部は他の部位

に比べ一段と厚い平底である。外面調整は口縁部がヨコナデ、体部は刷毛目である。内面調整は口縁部がヨコナデ、体部底部はヘラナデの後、ヘラミガキである。

I類：口縁部がくびれて外反するもの。2点図化されたが、それらはA・Bに細分される。

A：口縁部が外傾気味に外反し、最大径を体部にもつもの。(第15図4)

B：口縁部が強く外反し、最大径を口縁部にもつもの。(第26図4)

Aは短い口縁のもので、最大径を体部上半にもつ。底部はやや上げ底状の平底である。外面調整は口縁部をヨコナデ、体部はヘラミガキである。内面調整は口縁部をヨコナデ、体～底部はヘラナデの後ヘラミガキである。Bは底部がやや垂むが、丸底である。外面調整は口縁部がヨコナデ、体部はヘラミガキで、体部下端から底部はヘラミガキかヘラケズリのいずれか判然としない。内面調整は口縁部がヨコナデ、体～底部はヘラミガキである。

高坏：脚部の器形によりI・II類に分類される。

I類：脚部が円錐台状にひらくもの。(第12図2・6他)

4点図化されたが、坏部と接合するものは1点のみである。脚柱部の上端に比べ、下端が大きく広がるものである。脚裾部は脚柱部下端でゆるやかに外反するもの、やや強く屈折するものがあるが、裾部末端まで続く資料はない。この脚部と接合する坏部資料には、口径／器高の比が小さいものが認められる。体部から口縁部がほぼ直線的に外傾するもので、外面体部と底部の境に陵線をもつ。底部は外面ではやや角度をもち直線的に脚部に至るが、内面では底面が明確な平底となる。坏部の調整は、外面では口縁部がヨコナデ、他はヘラミガキである。内面では口縁部がヨコナデ、体部はヘラナデの後ヘラミガキ、底部はヘラミガキである。脚部の調整は、外面では脚柱部がヘラミガキ、脚裾部はヨコナデの後ヘラミガキである。内面では脚柱部の上部がナツケ、下部がヘラナデのもの、その後にヘラミガキを施すもの他、全体的にシボリ目のみのものがある。

II類：脚部が円筒状のもの。(第12図3他)

9点図化されたが、坏部と接合するものは1点のみである。脚柱部の上端に比べ、下端がやや広がるもので、中央部に膨みをもつ。脚裾部は脚柱部下端で強く屈折し、直線的に外傾する。裾部末端はやや外反するものと、強く外反するものがある。この脚部と接合する坏部資料には、口径／器高の比が大きいものが認められる。体部から口縁部がやや内寄気味に外傾するもので、外面体部と底部の境にかるい陵線をもつ。底面は外面ではほぼ水平状態となり脚部に至る。内面ではやや底面が不明確な平底となる。坏部の調整は、内外面とも口縁部はヨコナデ、他はヘラミガキである。脚柱部から裾部の調整は、外面では裾部末端がヨコナデ、他はヘラミガキ、内面では脚柱部がシボリ目のみのものと、ナツケのみのものがあり、裾部は上部がヘラナデである。脚部資料中には刷毛目調整（後ヘラミガキ？）のものが1例ある（第31図9）。

以上の他に環部のみの資料がある。体部から口縁部にかけて直線的なもの、やや内弯気味のもの、外反するものなどがある。調整は内外面とも「I縁部はヨコナデ、体～底部はヘラミガキであるが、体部外面に刷毛目の後ヘラミガキ調整のものが1例ある(第31図6)。

所属時期

以上のような器形的特徴を持つものは、ほぼ「南小泉式」に比定されると思われる。南小泉式は氏家和典氏により、東北地方出土土器の第二型式土器(南小泉Ⅱ式)として設定された土器群である。壺、甕、高环、环の各器種から構成される。しかし、近年では器種内に於けるバラエティーは、その後の資料の増加により、設定当時のものに比べかなりの拡がりをもつものとなっている。また、これらを細分することも試みられている。今回出土した土器は、この南小泉式の中でどのような位置づけがされるものなのか、仙台市域及び隣接市町村出土のものを中心とし、比較・検討を行いたい。

形式設定当時と最も異なってきたのは壺の類である。前形式一塗釜式一の範疇で捉えられてきた複合口縁の壺が、南小泉式の中にも引き続き残っている。仙台市内では^{註1}南小泉遺跡第13次調査1号住居跡より、隣接多賀城市では山王遺跡第3号遺構より^{註2}南小泉式の資料と共に出土している。この壺は、前形式のものと比べ、複合口縁が退化現象を示すことを特徴とする。壺Ⅰ類としたものは、ほぼこれと同様な複合口縁を呈している。前述2遺跡で、この複合口縁の壺と共に伴関係にあるものを、当資料と比較すると、^{註3}南小泉(第13次)遺跡では壺ⅡB類、甕ⅠA・B類、高环Ⅰ・Ⅱ類、山王遺跡では瓶を欠くが、甕ⅠA・B類、高环Ⅰ・Ⅱ類、环Ⅰ・ⅡA・B類の類例が求められる。特に山王遺跡とでは、互いに器種内に欠落するものは認められるものの、大要については各器種とも当遺跡と近似している。

次に複合「I縁の壺を仲介しない資料との比較をしてみたい。仙台市岩切鴻ノ巣遺跡第Ⅱ群土器では全ての器種が出土している。その内には、壺ⅡB類、甕ⅠA・B・Ⅱ類、甕、环Ⅰ・ⅡA・B類、高环Ⅰ・Ⅱ類の類似資料が認められる。前述山王遺跡以上に当遺跡の各器種類別資料を含んでいる。しかし、鴻ノ巣遺跡では、各器種内の類別資料がかなり多様化しており、当遺跡のものはその内の一部でしかない。また鴻ノ巣遺跡1号住居跡出土遺物をみると、当遺跡の類似資料は环Ⅰ・ⅡA類、高环Ⅰ類、壺ⅢB類が上げられる程度である。加えてこの住居跡では、新しい様相である長嗣の甕、長嗣で把手の付けられた瓶が共伴しており、複合「I縁の壺を仲介した資料とは、大きな異感がある。このように岩切鴻ノ巣遺跡第Ⅱ群土器のもつ広がりの中では、当遺跡資料の大部分は包括されるが、1号住居跡にみるように細部に於ける土器の組み合せでは、明らかに当遺跡と異なることが判る。

註5

最後に前形式とされるものとの比較を行ってみたい。名取市清水遺跡第Ⅲ群土器は資料的制

約より環・瓶を欠くが、壺・甕・高环の各器種から成る。壺Ⅰ・Ⅱ・ⅢB類、甕ⅠB類、高环Ⅱ類（器形のみ）の類似資料が認められ、当遺跡と同様なものを比較的多く含む。しかし、清水遺跡では類似資料以外に、壺の口縁部に棒状貼付文の付くものがあること、甕には内外面とも刷毛目調整のものがあること、そして高环では脚部上部が中実になるものがあること、また類似資料であっても、高环Ⅰ類類似資料のように、脚内部の仕上げがヘラケズリであり、調整が全く異なる。これらは、現在までの南小泉式の内にはみられないもので、塙釜式の内に見い出せるものである。

上記の比較を行った各遺跡の報文中での編年的位置づけは、清水遺跡第Ⅱ群土器「塙釜式の新しい段階」、南小泉遺跡第13次調査1号住居跡出土土器「南小泉式の古い段階」、山王遺跡3号遺構出土土器「古墳時代（中期）」、岩切鴻ノ巣遺跡第Ⅱ群土器「引田式類似のものも含めて、一括して南小泉式」としている。また、丹羽茂氏は最近、南小泉式をA・B・Cの編年に分けており、山王遺跡資料を最も古いA群土器、鴻ノ巣遺跡1号住居跡資料を中間のB群土器としている。⁶

以上のように各遺跡出土資料との比較及び比較資料の編年的位置づけを要約すると次のようになる。

1. 塙釜式の新しい段階のものとされる清水遺跡第Ⅱ群土器とは、ある器種については類似資料が認められる。しかし、その他の器種の器形的特徴及び類似資料であっても器面調整方法は、当遺跡内では全く認められない。

2. 南小泉式の古い段階のものとされる山王遺跡第3号遺構出土資料、南小泉遺跡第13次調査1号住居跡出土資料は、いずれも壺Ⅰ類=複合Ⅰ縁の壺と共伴関係にある資料である。特に山王遺跡では壺Ⅰ類以外のものについても、ほぼ当遺跡のものと類似する。

3. 南小泉式の中間段階のものとされる、岩切鴻ノ巣遺跡1号住居跡出土資料の中には、当遺跡の類似資料を一部含む。しかし、これらと共に伴関係である新しい様相を持つ土器（長柄甕・甕・瓶）は、当資料内には認められない。

このような1～3を踏えた上で、当資料の編年位置づけを試みるならば、ほぼ「南小泉式」に比定される。しかも形式内でも古い段階といえる。これは器面調整面に於いても看取される。すなわち、壺Ⅱ類・环Ⅰ類以外にも甕、高环Ⅱ類の一部、高环环部資料の一部に刷毛目調整が認められる。多くは最終調整のものではないが、前形式の器面調整法をまだ根強く残すものといえる。

当出土資料の各器種内には、前形式の特徴をそのまま備えたものがある他、これとは反対に、次の段階まで残るものがある。これは各器種内類別資料の存続時間の差、あるいは当遺跡の時

間隔のいずれかに起因するものと思われる。これらは本来、当遺跡に於ける各遺構内一括資料の比較により、検討されていかなければならない。しかし、当遺跡では床面、底面で土器の組み合せが認められるものは、わずかに住居跡（甕I・B類・壺I類・高壺I・II類）、1号土壙（甕I・II類）の2遺構のみであった。この2遺構を比較した場合、1号土壙出土遺物に前形式の特徴を残す類が占めることより、住居跡出土遺物に先行する遺物とすることも可能であるが、比較遺構数及び比較遺物数の観点からすれば、これら遺物に新旧関係を付けることは無理であろうと思われる。以上のように、今回の調査結果からは、出土資料の各器種内の継続時間の差が何に起因するか、明確にすることは出来なかった。

註記

1. 氏家利典「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯 1957
2. 渡辺誠「南小泉遺跡第13次調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第81集 1985
3. 高齋敬明「山王遺跡」『多賀城市文化財調査報告書』第2集 1981
4. 白鳥良一・加藤道男「岩切湯ノ峯遺跡——東北新幹線関係遺跡調査報告書！」
『宮城県文化財調査報告書』第35集 1980
5. 丹羽茂・小野寺祥一郎・阿部博志「清水遺跡——東北新幹線関係遺跡調査報告書V」
『宮城県文化財調査報告書』第77集 1981
6. 丹羽茂「宮前遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第96集 1983

(3) 須恵器

基本層位 I・IIa層より計4点出土したのみである。全て甕、壺、壺の細片である。第31図15は甕の体部破片で、内面に同心円状の押え目工具痕が残る。これらは、古墳時代末から平安時代までのいずれかの時期に属すと考えられる。

(4) 陶磁器(写真図版14)

基本層位 I層より計34点出土した。全て破片資料である。産地は肥前、唐津、美濃、瀬戸、相馬、堀等がある。器種には碗、皿、鉢、スリ鉢、壺、徳利、土瓶等がある。肥前焼が最も多く(10点)、次いで相馬焼(8点)となる。年代的には美濃・瀬戸焼の碗(写真図版14-1)1点が15・16世紀頃に位置づけられ、他は16世紀末以降のものである(16C末~17C-6点、18C-6点、幕末~明治初頭-10点、明治以降-4点、近・現代-1点)。

(5) 瓦

基本層位 I層より1点出土した。國化はしなかったが、近世の平瓦片と思われる。

(6) 石器

石器は本調査区の基本層、遺構内から出土しており、基本層は弥生以前の資料を含まない。したがって、石器は出土する上器から判断して橢形圓式～天王山式期のいずれかの時期に属するものと考えられる。また、資料総数は495点である。

石材

石器の材質は流紋岩、玉髓、細粒凝灰岩、珪質凝灰岩、鉄石英、頁岩、黒耀石、石英安山岩、砂岩、粘板岩、チャート、珪化木の12種が同定されている。

以上のうち最も多い流紋岩は、石核の大部分を占め、剝片も多い。剝片石器には流紋岩以外の石材が多く使われるが、器種による石材選択の傾向は量的に少ないためとらえられなかった。また、礫石器では、石英安山岩が最も多く用いられており、他には砂岩、珪質凝灰岩などがある。

以上のように器種により石材の相違がみられ、その選択性が推定される。さらに、流紋岩、石英安山岩等は遺跡周辺の河川で容易に採集でき、本遺跡の石材の構成に大きく関係しているものと考えられ、石材の原産地、採集地等今後の検討に期待したい。

剝片石器

石鎚：13点出土している。そのうち茎部を有するものは9点あり、石器の長軸が比較的長いもの（第21図1、第32図2・3・4・5）と短いもの（第32図1）、石器の長軸に対し直交する方向からのノッチにより茎部を作出する、いわゆるアメリカ式石鎚（第32図6）の3種がある。茎部をもたないものは6点あり（第21図2、第25図9・10、第32図7・8・9）前者に比べ大

第8表 石材、器種対照表

石 材 分 類	流紋岩	玉 錫	細 粒 凝灰岩	鉄 石 英	頁 岩	黑 耀 石	石 英 安山岩	砂 岩	粘 板 岩	チャ - ート	珪 化 木	その 他	合 计	
石 鎚	—	1	2	3	2	—	1	—	1	—	3	—	13	
石 鋸	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	1	—	3	
ボイント	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	
スケンノバード	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	3	
二次加工 のある剝片	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	3	
ジエス・ スヌキー	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	1	
石 鋸 鋸	18	1	—	2	—	—	—	—	—	2	1	—	24	
既 製 新 制 作 を有する剝片	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	1	
剝 片	357	31	—	—	5	9	12	10	2	2	5	1	434	
ストーン・ リタッチャード	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	
ハンマー・ ストーン	—	—	—	—	—	—	5	1	—	—	—	—	6	
筒 石	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	
石 黒	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	
砂 石	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	3	
合 计	378	33	2	7	8	11	13	21	4	2	13	2	1	495

型である。また、第21図2、第25図10は未完成の可能性がある。

ドリル：3点出土しており、つまみ部をもつもの（第32図12）ともたないもの（第9図1、第32図11）の2種がある。第32図12は作業刃を欠失している。第9図1、第32図11は、ともに下半部表裏に著しい磨耗が観察される。

スクレイパー・二次加工ある剝片：スクレイパー（第15図7、第32図13・14）、二次加工のある剝片（第25図12、第32図15・16）は表採のもの1点を含め6点出土している。いずれも不規則な剝離により、剝片の表面、あるいは表裏面に二次加工を行っている。

ポイント：1点のみ出土している（第32図10）。基部あるいは先端部を欠失しており詳細は不明である。

ピエス・エスキュー：1点のみ出土している（第25図11）。剝片の上下方向から、両側剝離による縁辺のつぶれが観察される。

礫石器

ハンマー・ストーンおよび、その破片が6点、凹石1点、石皿1点、磨石3点、ストーン・リッチャー（第15図8）が1点出土している。他に、ほぼ同様の大きさをもつ軽石の転石が出土している。その内訳は完形のものが3点、破片が24点あり、8.5×4.5×2.8cmのものを最大とする。

石核および、その製片

石核は転石を素材とするもの：A₁と剝片を素材とするもの：B₁があり、さらに剝片剝離に際する打点の設定から第1種：一向向からの剝離を維持するもの第2種：打面と剝離作業面を頻繁に転位するもの第3種：求心的に素材の周辺をまわるものの三者に分類される。

石核の特徴としては、流紋岩のものにはA₂種の大型のものが多く、その他の石材のものはB₂、B₃種の小型のものが多い。剝片でも同様に流紋岩製のものが大きく、量的にも多い。その他の石材のものは小型のものが多いようであり、いずれも不定形のものが多い。また石核を有する母岩は定型石器の石材と異なっており、遺跡の一つの特徴といえよう。

まとめ

本遺跡においては石器が少ない反面、遺跡周辺で容易に採集しうる流紋岩製の石核、剝片が数多く発見された。いずれも不明な点が多いが、流紋岩製の石器の有無等今後の器種の増加に期待したい。

参考文献

岡村道雄 「宮城県岩出山町境ノ口A遺跡の出土遺物 目録、石器」『釋』第4分 幼生時代研究会 1982.4

(7) その他の遺物

以上その他に、土製品1点、石製品9点、鉄製品5点が出土した。鉄製品の大部分と石製模造品に関しては、古墳時代中期（南小泉式）の時期に属すと思われる。他のものに関しては、その出土状況より、所属時期は不明である。個々の遺物の説明は、出土遺物観察表（P59）に記載したのでこれを参照されたい。

2. 検出遺構について

(1) 所属時期

検出遺構は住居跡1軒、土壙12基、溝跡9条、ピット17個である。これらは検出層位、検出状況によって以下の4つに大別される。

1. II a層上面の遺構：1号溝跡
2. II b層？上面の遺構：8号土壙
3. III層上面の遺構：住居跡、1～7・10・12号土壙、2～9号溝跡、ピット
4. 住居跡貼床排土後の遺構：13・14号土壙

次に基本層位I・II a・II b層の出土遺物の特徴をまとめると以下のようになる。

I層：中・近世の遺物（火・陶磁器）を含む。

II a層：古墳時代末以降の遺物（須恵器）を含む。

II b層：弥生時代（樹形圓～十三塚式）、古墳時代（南小泉式）の遺物のみ含む。

以上、遺構の検出層位・検出状況、基本層位の遺物の特徴、これに遺構内出土遺物を加味することにより、各遺構には次のような所属年代が与えられる。

○中世以降：1号溝跡

○古墳時代中期：住居跡、1～7・10号土壙、2～9号溝跡、ピット（10・14号を除く）

これら遺構には重複関係があり、全てが同時存在ではない。ピット、遺構以外の可能性もある5・7・9号溝跡を除いた重複関係をまとめると

1. (旧)12号土壙→2+8号溝跡、住居跡→4号溝跡→3号溝跡(新)

2. (旧)10号土壙→2号土壙(新)

の1・2が認められる。他の重複関係をもたないものに関しては、出土遺物の上から新旧関係を把握することは無理であった。これら各遺構は、新旧関係があるものの、遺構外も含めた遺物の検討からは、古墳時代中期～南小泉式一に位置づけられる。しかも、住居跡、1号土壙を含めた多くの遺構は、その内でも古い段階のものといえる。

○弥生時代：13・14号土壙、6号溝跡

6号溝跡堆積土2層以下からは弥生時代中期～樹形圓式～円田式一の土器が、13号土壙堆積土からは弥生時代後期～十三塚式一の土器が出土しており、ほぼそれぞれの出土土器の時期に所属すると考える。14号土壙では唯一の時期決定資料がVAe類土器である。この資料は、弥生時代中・後期（樹形圓～十三塚式）のいずれにも認められるものである。従って14号土壙は中・後期のいずれかに時期を限定できない。

この他、8号土壙は、古墳時代末から平安時代にかけての可能性があるが、検出層位に問題があるため、所属時期は不明としたい。また、10・14号ピットは、出土遺物、重複関係がなく、所属時期が古墳時代（中期）、弥生時代（中期・後期）のいずれか不明である。

（2）古墳時代中期の遺構配置

2号溝跡と8号溝跡は、上端幅約60cm、深さ約10cmの小規模な溝跡である。調査当初、両溝跡は別のものとして取り扱ったが、両者は直交し、「L」字状の溝跡となった。この溝跡と住居跡との配置をみると、溝跡は住居跡北壁、西壁にほぼ平行して走行している。また、溝跡、住居跡とも3・4号溝跡に切られており、同時存在の可能性も十分有り得る。すなわち、この溝跡は、住居跡の配置を意識し、これを区画する意味あいをもって造られたとも考えられる。しかし、現在までの南小泉遺跡の調査では、この種の溝跡は検出されておらず、今回の調査も溝跡の全容を明らかにしたものではない。従って、溝跡と住居跡の上記のような関係は、あくまで推測の域を出ない。今後、この種の類例を待ちたい。

写 真 図 版

写真図版1
遺跡全景、検出構1



1. 調査区遠景
(南より)



2. 住居跡出土状況
(西より)



3. 住居跡完掘状況
(西より)

写真図版2
住居跡遺物出土状況

1.床面 (C-)



2.床面 (C-)



3. P 5



写真図版3
検出遺構2



1. 1号土壙遺物出土状況
(南より)



2. 2号土壙完掘状況
(西より)



3. 3号土壙完掘状況
(北東より)

写真図版4
検出遺構3



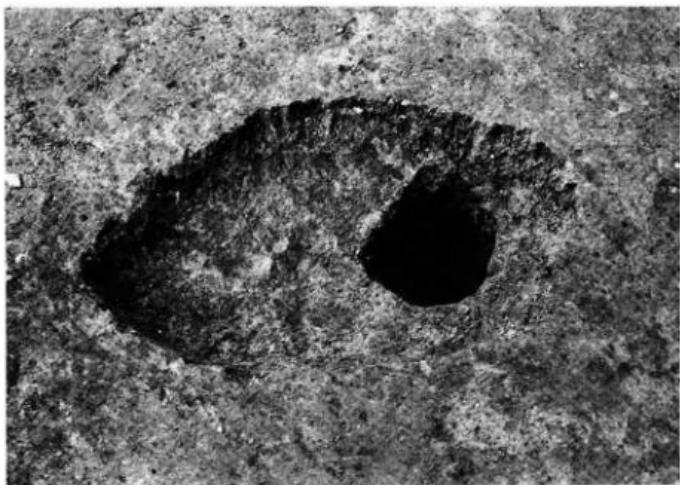
1. 4号土壤完掘状況
(南東より)



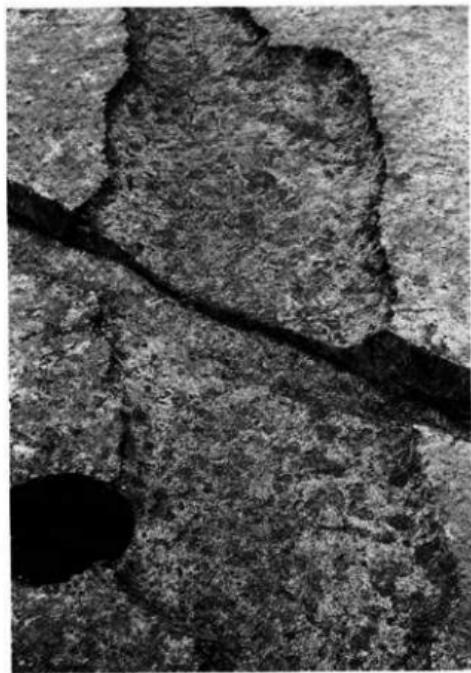
2. 5号土壤遺物出土状況
(東より)



3. 6号土壤完掘状況
(北東より)



1.7号土壤完掘状況（東から）



2.12号土壤完掘状況（北東から）



3.1号溝跡完掘状況（南西から）

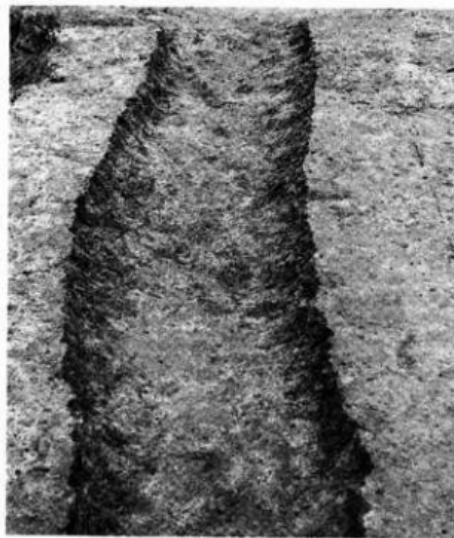
写真図版5 検出遺構4



1. 2号溝跡完掘状況（東より）



2. 3・4号溝跡検出完掘状況（西より）



3. 8号溝跡完掘状況（南より）



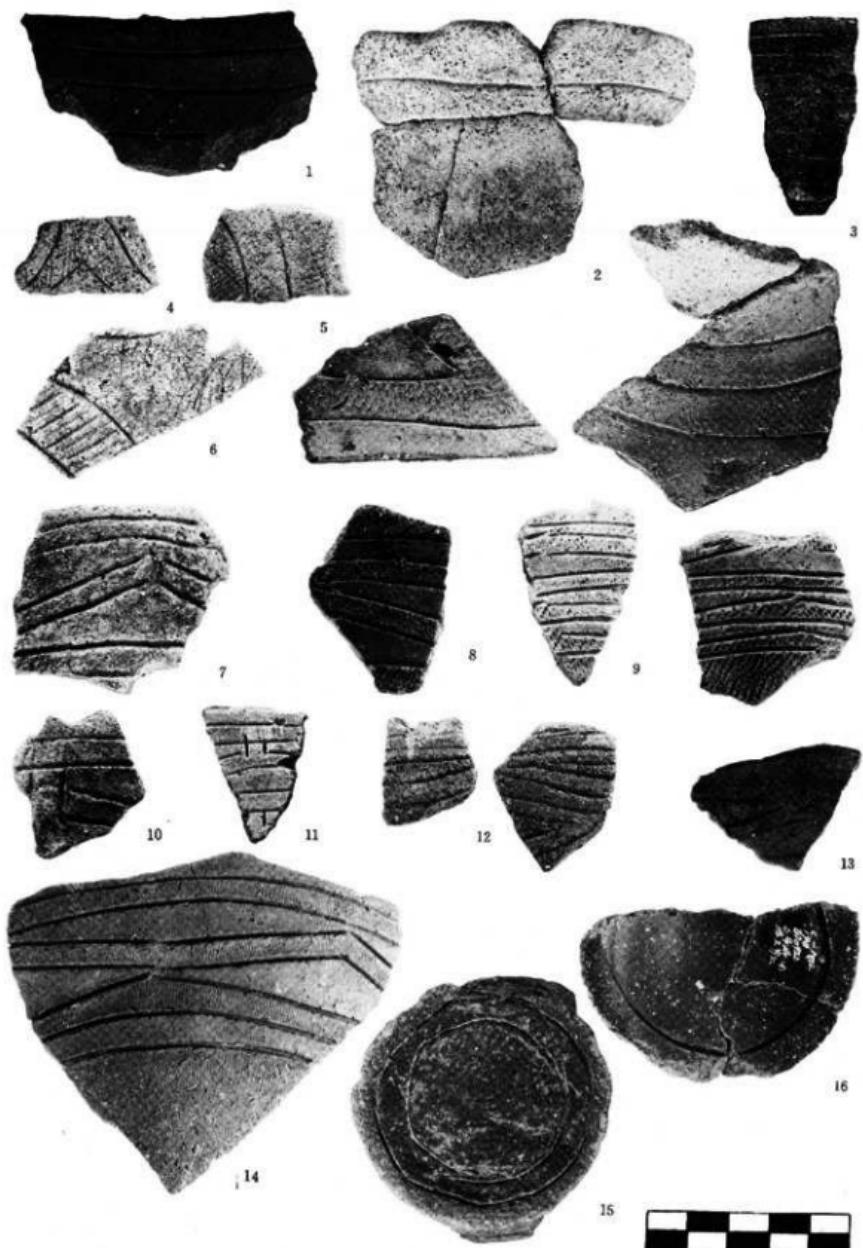
1. 6号溝跡セクション
(東より)



2. 6号溝跡完掘状況
(西より)

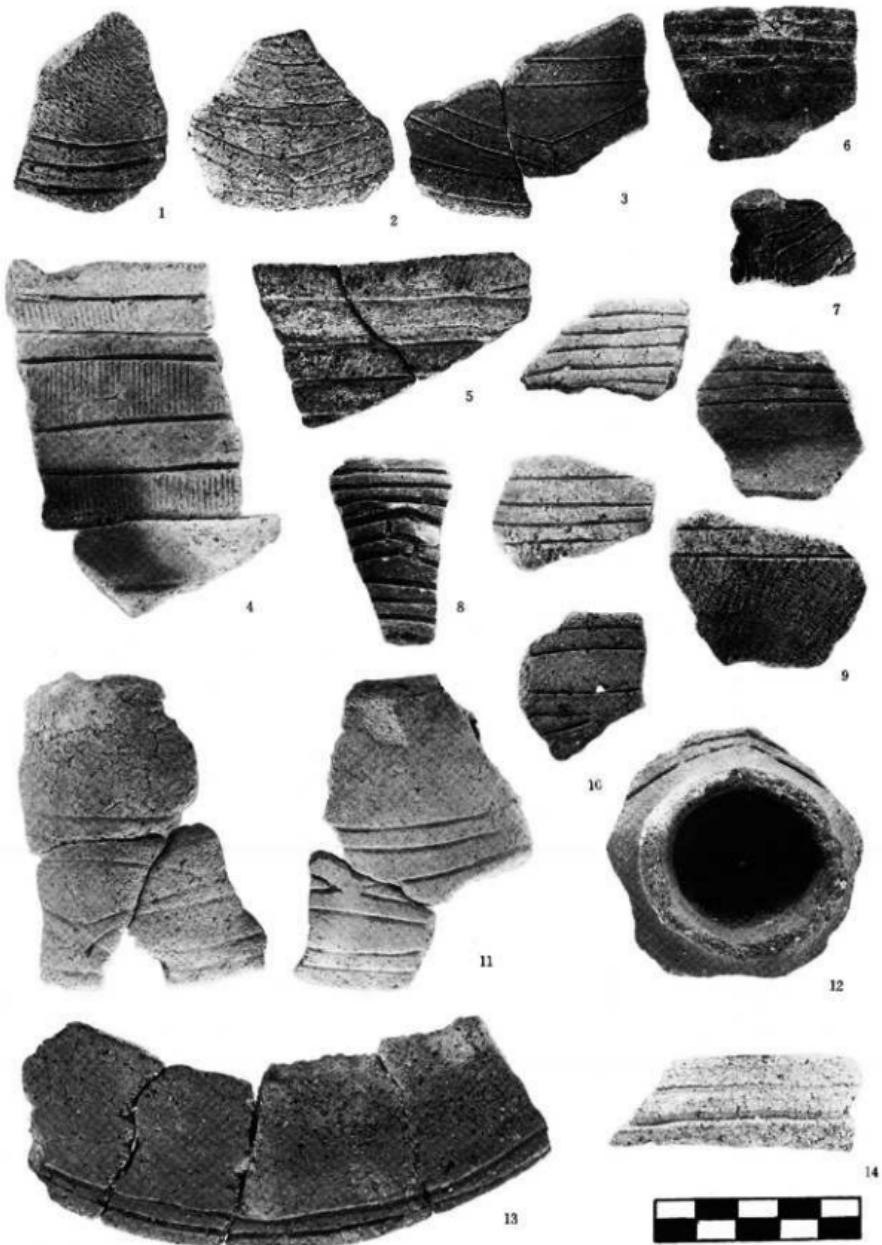


3. 調査区完掘状況
(南西より)



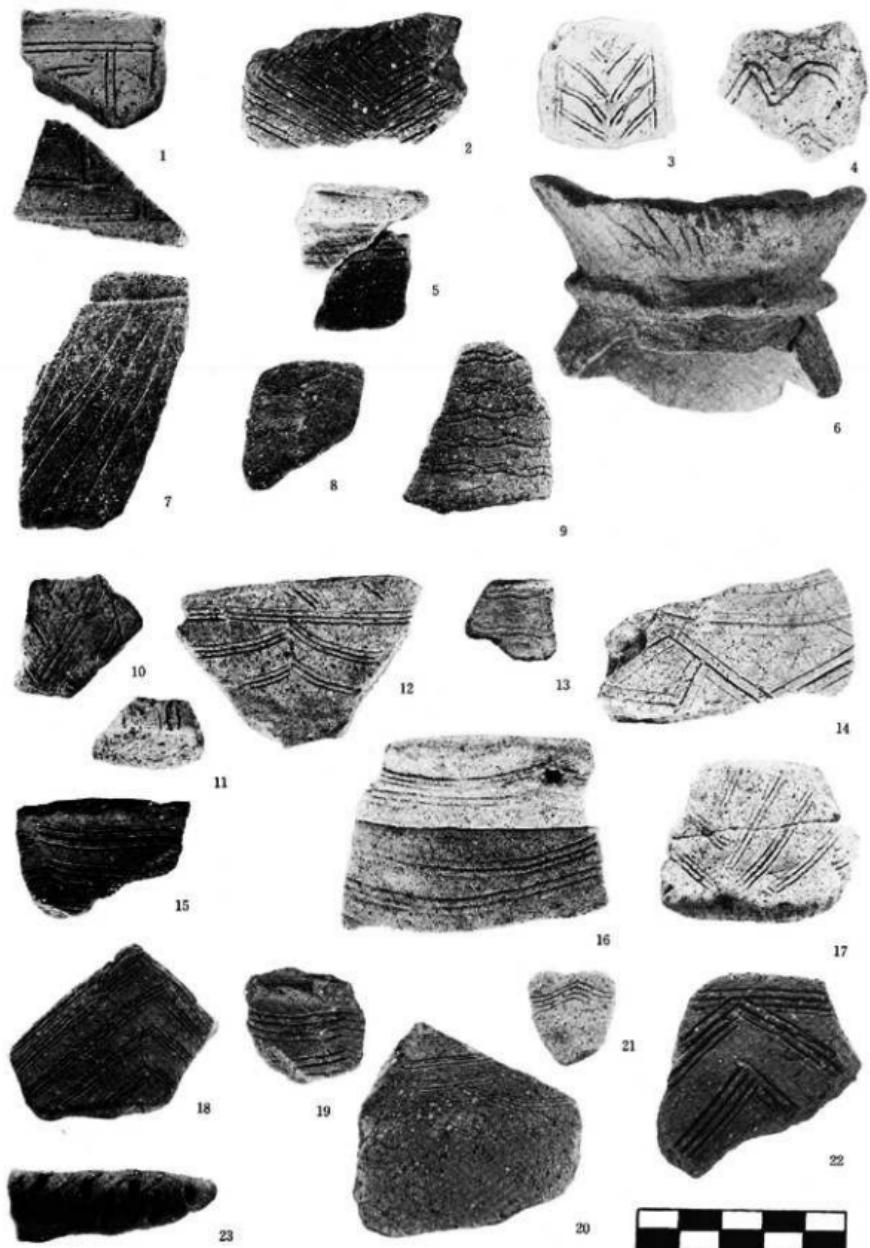
1~15-Ⅰ類

写真図版8 弥生土器1



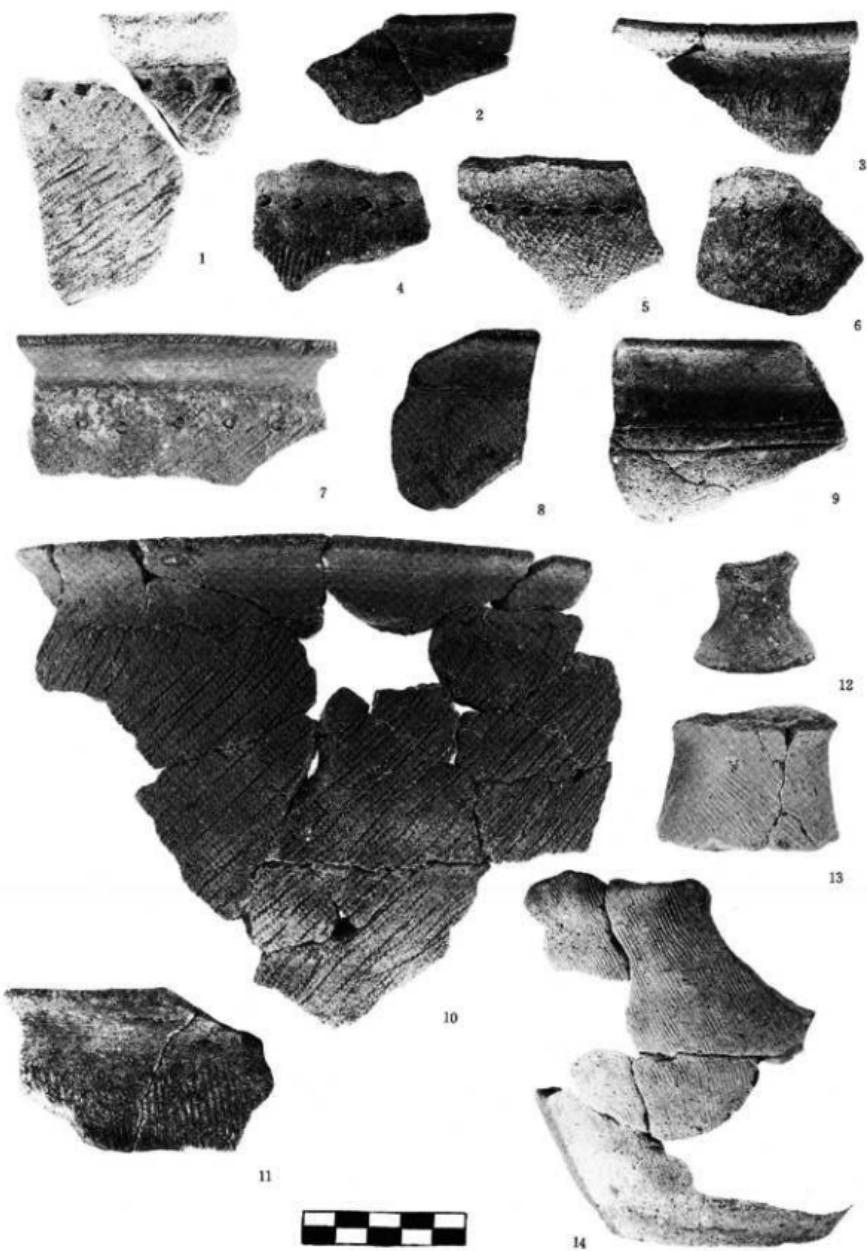
1~5-I類 6~13-IIA類 14-IIB類

写真図版9 弱生土器2



1~9-ⅢA類 10~17-ⅢB類 18~22-ⅢC類 23-Ⅳ類

写真図版10 弥生土器3



1~2-VAa類 3~6-VAb類 7~VAc類 8·9-VAb類 10~VAc類 11~VB類

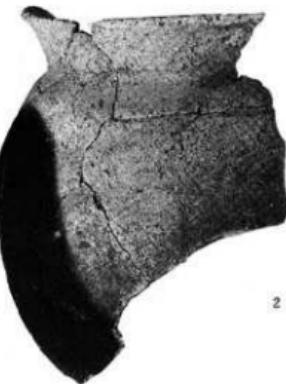
写真図版11 弥生土器4



住居跡内出土遺物



1



2

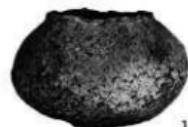


3



4

1—甕ⅠB類 2・3—甕ⅠA類 4—甕Ⅱ類 写真団版12 土師器 1



1



2



3



4



5



6



7



8



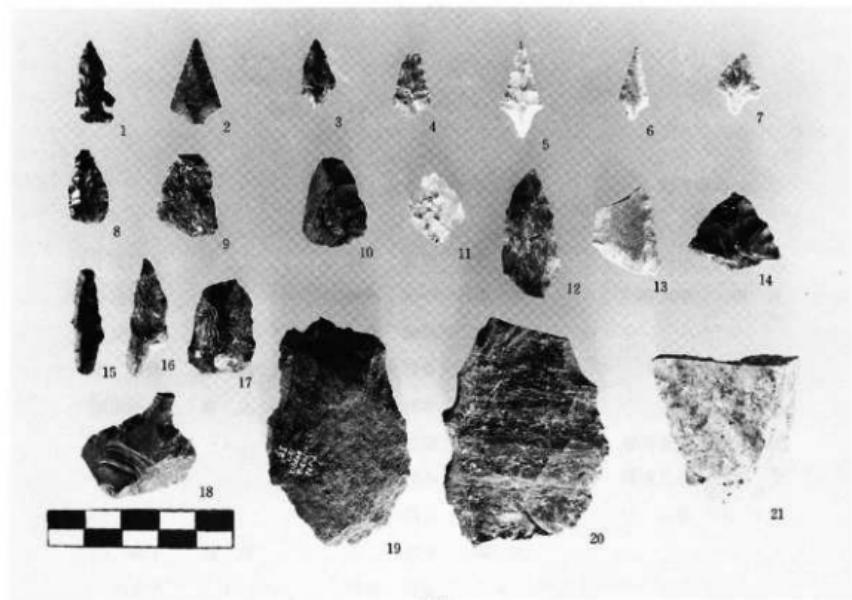
9

1 - 烧Ⅲ類 2 - 环Ⅱ瓶 3 - 环ⅡA瓶 4 - 环ⅡB瓶 5 - 高环 6 · 8 - 高环Ⅱ類 7 · 9 - 高环Ⅰ類



内面

写真図版14 陶器



石器



石製品

写真図版15 石器・石製品

職 員 錄

社会教育課

文化財調査係

課長	阿部 速	係長	佐藤 隆	主事	吉岡恭平
主幹	早坂春一	主事	田中 則和	・	工藤哲司
		・	結城 慎一	・	渡部弘美
文化財管理係		教諭	菅原 和夫	教諭	渡辺 誠
		主事	木村 浩二	主事	主浜光朗
係長	佐藤政美	・	篠原 信彦	・	斎野裕彦
主事	岩沢克輔	教諭	小野寺和幸	・	長島栄一
・	山口 宏	・	佐藤美智雄	・	及川 格
		主事	佐藤 洋	教諭	千葉 仁
		・	金森 安孝	・	松本清一
		・	佐藤 甲二	派遣職員	高橋勝也

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物蘆原下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）
- 第2集 仙台城（昭和42年3月）
- 第3集 仙台市燕沢善光寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
- 第4集 史跡陸奥国分尼寺跡調査整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
- 第5集 仙台市南小泉法師塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
- 第6集 仙台市荒巻五本松古跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
- 第7集 仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
- 第8集 仙台市向山愛宕山横穴古墳発掘調査報告書（昭和49年5月）
- 第9集 仙台市根岸町宗福寺横穴古墳発掘調査報告書（昭和51年3月）
- 第10集 仙台市中田町安東東造跡発掘調査概報（昭和51年3月）
- 第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
- 第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
- 第13集 南小泉遺跡一範囲確認調査報告書（昭和53年3月）
- 第14集 畜遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
- 第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
- 第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
- 第17集 北風敷遺跡（昭和54年3月）
- 第18集 桥江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
- 第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
- 第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
- 第21集 仙台市開発開保遺跡調査報告1（昭和55年3月）
- 第22集 組ヶ峯（昭和55年3月）
- 第23集 年報1（昭和55年3月）
- 第24集 今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
- 第25集 三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
- 第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
- 第27集 史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）

- 第28集 午報 2 (昭和56年 3月)
第29集 郡山遺跡 I—昭和55年度発掘調査概報一 (昭和56年 3月)
第30集 山田上ノ台遺跡発掘調査概報 (昭和56年 3月)
第31集 仙台市開発関係遺跡調査報告 II (昭和56年 3月)
第32集 渋ノ原遺跡発掘調査報告書 (昭和56年 3月)
第33集 山口遺跡発掘調査報告書 (昭和56年 3月)
第34集 六反田遺跡発掘調査報告書 (昭和56年 12月)
第35集 南小泉遺跡—都市計画街路建設工事関係第1次調査報告 (昭和57年 3月)
第36集 北前遺跡発掘調査報告書 (昭和57年 3月)
第37集 仙台平野の遺跡群 I—昭和56年度発掘調査報告書一 (昭和57年 3月)
第38集 郡山遺跡 II—昭和56年度発掘調査概報一 (昭和57年 3月)
第39集 燕沢遺跡発掘調査報告書 (昭和57年 3月)
第40集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報 I (昭和57年 3月)
第41集 年報 3 (昭和57年 3月)
第42集 郡山遺跡一宅地造成に伴う緊急発掘調査一 (昭和57年 3月)
第43集 栗遺跡 (昭和57年 8月)
第44集 海ノ東遺跡発掘調査報告書 (昭和57年 12月)
第45集 茂庭一茂麻住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書一 (昭和58年 3月)
第46集 郡山遺跡 III—昭和57年度発掘調査概報一 (昭和58年 3月)
第47集 仙台平野の遺跡群 II—昭和57年度発掘調査報告書一 (昭和58年 3月)
第48集 史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備に関する調査概報 (昭和58年 3月)
第49集 仙台市文化財分布調査報告 I (昭和58年 3月)
第50集 岩切畠中遺跡発掘調査報告書 (昭和58年 3月)
第51集 仙台市文化財分布地図 (昭和58年 3月)
第52集 南小泉遺跡—都市計画街路建設工事関係第2次調査報告 (昭和58年 3月)
第53集 中田畠中遺跡発掘調査報告書 (昭和58年 3月)
第54集 神明社周辺遺跡調査報告書 (昭和58年 3月)
第55集 南小泉遺跡—青葉女子学園移転新工事地内調査報告 (昭和58年 3月)
第56集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報 II (昭和58年 3月)
第57集 年報 4 (昭和58年 3月)
第58集 今泉城跡 (昭和58年 3月)
第59集 下ノ内浦遺跡 (昭和58年 3月)
第60集 南小泉遺跡一倉庫建築に伴う緊急発掘調査報告書一 (昭和58年 3月)
第61集 山口遺跡 I—仙台市体育馆建設予定地一 (昭和59年 2月)
第62集 燕沢遺跡 (昭和59年 3月)
第63集 史跡陸奥国分寺跡昭和58年度発掘調査概報 (昭和59年 3月)
第64集 郡山遺跡 IV—昭和58年度発掘調査概報一 (昭和59年 3月)
第65集 仙台平野の遺跡群 I—昭和58年度発掘調査報告書一 (昭和59年 3月)
第66集 年報 5 (昭和59年 3月)
第67集 高沢水田遺跡 I—第1期一東崎前地区 (昭和59年 3月)
第68集 南小泉遺跡—都市計画街路建設工事関係第3次調査報告 (昭和59年 3月)
第69集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報 II (昭和59年 3月)
第70集 戸ノ内浦跡発掘調査報告書 (昭和59年 3月)
第71集 後河原遺跡 (昭和59年 3月)
第72集 六反田遺跡 II (昭和59年 3月)
第73集 仙台市文化財分布調査報告書 II (昭和59年 3月)
第74集 郡山遺跡 V—昭和59年度発掘調査概報一 (昭和60年 3月)
第75集 仙台平野の遺跡群 V (昭和60年 3月)
第76集 仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書 (昭和60年 3月)
第77集 山田上ノ台遺跡—昭和59年度発掘調査報告書一 (昭和60年 3月)
第78集 中田畠中遺跡—第2次発掘調査報告書一 (昭和60年 3月)
第79集 欠ノ上 I 遺跡発掘調査報告書 (昭和60年 3月)
第80集 南小泉遺跡—第12次発掘調査報告書一 (昭和60年 3月)
第81集 南小泉遺跡—第13次発掘調査報告書一 (昭和60年 3月)
第82集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報 IV (昭和60年 3月)
第83集 年報 6 (昭和60年 3月)
第84集 仙台市文化財分布調査報告書 III (昭和60年 3月)

仙台市文化財調査報告書第80集
昭和59年度

南 小 墓 遺 踪
第12次発掘調査報告書
昭和60年3月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市宮町3-7-1
仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東 北 プ リ ン ト
仙台市立町24-24 TEL 63-1166

